

麒麟の三兄弟

一 謎の力士

今年二七歳になる首の長い長男は皆から『首長（くびなが）麒麟』と呼ばれていた。

この長男は、自分の首の長いのを内心とても誇りに思っていたから、友人達から「麒麟はみんな首が長いけど、それにしても君の首はとても長いね」と言われるのがとても嬉しかった。

二四歳になる次男のからだには薄黄色地に茶の斑模様があった。とても美しい斑模様だったので、やっぱり次男もそれを誇りに思っていた。「見てごらん、あの麒麟の斑模様はなんと美しいことでしょう」と驚く人々の顔を見るのが大好きだったので、次男は知らない町をぶらぶら歩いて旅することを趣味にしていた。次男はみんなから『斑（まだら）麒麟』と呼ばれていた。

美しい上の二人の兄と違って残念ながら三男には自慢できるものがないものもなかった。この二一歳になったばかりの三男には美しいものがないばかりか、頭のとっぺんに二本の角があったので、物心ついたときにはみんなに『二本角（にほんつの）麒麟』と呼ばれて笑われていた。三男は思春期になると、二本の角を隠すために帽子をかぶるようになった。

このように見た目に違いはあるものの、三人は大変仲が良い三兄弟と町では評判だった。

しかし、たしかに三人の仲は良かったけれど、実は見た目の違いと同じくらい、いや、もしかしたらそれ以上に三人の性格は大きく異なっていた。

麒麟三兄弟の住む町は、アフリカ大陸のモロッコの中央部に位置するマラケシュ市のさらに中心部にあり、住民からは『壁の町』と呼ばれていた。この町は、名前が表すように町のいたるところに高さ5メートル前後の壁が無造作に立っていて、これがこの町の大きな特徴となっていた。もともとこのあたりには裕福な人間が多く住んでいて、住民たちは皆広大な敷地を所有していた。そして、彼らは自分の敷地に他人が侵入するのを防ぐため、各々が敷地全体を高い壁で囲っていた。その当時、町を取り囲む高い山の頂上からこの町を見下ろすと、まるで町全体が巨大な迷路のように見えたという。

長い間穏やかな歴史を刻んでいたこの町だったが、西暦2083年から

7年続いた最終戦争でほとんどの建造物は崩壊してしまい、わずかに残ったのが大邸宅を囲った壁の一部である。

もう少し、現在の壁の町のことを説明すると、住民のほとんどはゴリラやキリン、象、カバといった大型の草食動物で、それぞれ同じ種類の仲間同士で小さな集落を作って暮らしていた。人間も住んでいるけどその割合はわずか1%にも満たなかった。しかも、彼らは、動物たちのように集落を作らず、また、キリンの住んでいる集落からは、かなり離れたところに住んでいたのも、日頃キリンたちが人間を町で見かけることはほとんどなかった。

もっともつと説明しなければならぬことはあるけれど、物語を進めていく中でおいおいお話することとしよう。

キリン三兄弟は、数多くの商店で賑わう繁華街で花店を経営していた。店を始めたのは、彼らの父親で約30年前に遡る。当時、この町で花で生計を立てている者など一人もいなかったのも、彼が商売で成功すると思っていた者は皆無だった。実際、店を開いてから売り上げなしという日が6か月続いた。その間、三兄弟の父親は何をしていたかというところ、友人が結婚すると聞けば式にやってきて花を配り、また、誰か亡くなったと聞けば葬式にきて花を置いてきた。今でこそ花といえば慶弔の際に欠かせないというのはこの町の住民の間では常識となっているが、これも元を正せば三兄弟の父親が気長にこつこつ種をまいた成果だった。

キリン三兄弟は、仕事が終わると毎日のように近所の『足長（あしなが）』という名前のパブに飲みに行った。飲みながらカードゲームをすることも多かった。

この足長の客はほとんどがキリンだった。店主もキリンだったが、足が細くて長かったのも皆から『足長キリン』と呼ばれていた。店の名前はもちろんこの店主の名前から取ったものだ。

5月のある日のこと、この日の仕事帰りもキリンの三兄弟は足長で飲んでいた。

「今年の夏は絶対にひまわりが当たるよ」斑キリンが切り出した。

「ひまわりは僕も好きだけど、室内に活けるにはちよつと大き過ぎやしないか？ 努力の甲斐もあってこの町も今やちよつとした活花ブームだけど、このブームを一過性のもので終らせちゃだめなんだ。季節が変わる度にタイムリーに適切な花を店頭に並べることが大事なんだよ。この町の住人は、ひまわりを活けることができる大きな家に住んでいる者ばかりじゃ

ない。室内で活けるのに向いている花は他にもあると思うよ」

首長キリンは、弟の意見を頭ごなしに否定したりするようなことはしない優しい性格の持ち主だが、それでもピシャリと反対意見を述べた。

「うん、でも僕もひまわりは面白いと思うなあ。あの大きなひまわりの花を活花にするなんて、とっても素敵じゃないか。最近は大きなお家を建てる人も増えているから、意外とこの提案受けるかも知れないよ。一度やってみる価値あると思うな」

二本角キリンはいつもように斑キリンの提案に賛成した。

首長キリンは慎重な長男らしく、何をするにも計画的に物事を進めないと気の済まない性格だった。反対に斑キリンは長男と違い思いつきでどんな行動するタイプで、慎重な首長キリンが石橋を叩き終わらないうちに、すでに向こう岸に渡りきっている、そんなキリンだった。そして、今のところ斑キリンの思いつきは、ほとんどうまくいっていた。ようするに斑キリンは事業センスがあるキリンだった。

二本角キリンは何をするにも自分の意見のないキリンだった。小さい頃から上二人の兄の後ろをついてまわっていてそのまま今に至ってしまった。何でも二人の兄が上手に処理してくれたし、あえて三男の二本角キリンがしなければいけないことは、今の事業においても実のところほとんどなかった。

毎年、夏は花の出荷が少ない時期だけど、今年の夏は何か新しいことをしかけて売上を伸ばそう、三兄弟はそんなことを話題に大好きな冷えたビールを飲んでいた。

そのときだった。ちやりん ドアが開いた。

『足長』は仕事帰りの客で賑わっており、ドアが開いてもほとんどの客は気にも留めなかった。首長と斑もドアが開いても気にもせず、ひまわりについて熱い議論を繰り広げていたが、一人二本角は開いたドアの向こうに立つ異様な影に気がついて、じっと開いたドアの外を凝視した。外はもうすっかり陽も落ちていた。しばらくすると異様な雰囲気気配に気付いたほかの客たちも二本角と同じように黙ってドアの外を凝視していた。

開いたドアの向こうには力士が立っていた。

きりりと頭のとっぺんに鬘を結い、緑色のまわし一つ身に着けた裸足の力士が一人黙って立っていた。力士は、年齢はよくわからないが二十代の半ばといったところか。眉は薄く鼻筋が通っており、口は大きくも小さくもなく、人間の顔では美男子と言ってよいその表情は優しい笑みをたたえ

ている。身長は高く2 mを超えるような大男で、均整の取れた体系だが、肌の色はそれまで見たことのあるどんな人間の肌の色とも異なり、透き通るように白かった。胸も大きな特徴があり、『おっぱい』と呼ぶのがふさわしいような、その形はどうみても女性の豊満な胸にしか見えないという胸をしていた。

力士はいつたい、開いたドアの向こう側で何分立っていたのだろう。もしかしたらほんの20秒くらいだったのかもしれないが、気がつく店内にいた者全員が黙って力士を見つめていた。力士はすっかり静まり返った店内をじつと見ていたが、ゴホンと大きな咳払いをすると、客があつけにとられるなか、裸足の大きな足でぺたぺたと店の中に入ってきた。そして、店内をゆっくり見回したあと、キリン三兄弟のテーブルに向かって歩いてきた。客たちが固唾を呑んで見守る中、力士は三兄弟のテーブルにやってきて立ち止まると、黙ったまま、呆氣に取られて座っているキリンの三兄弟を見下ろした。

「ごつつあんです」斑が力士に声をかけたが緊張のため作り笑顔の頬が少し引きつっていた。

「ごつつあんです」

「ごつつあんです」

首長と二本角も同様にめいっばい緊張していたけど、斑の真似をして作り笑顔で白い歯を目一杯見せながら力士に声をかけた。

力士はキリン三兄弟に対してゆっくり丁寧なお辞儀をすると、一つ空いている椅子に腰掛けた。

「はじめまして乳豊（ちちゆたか）といいます」

力士は一瞬にこりと笑顔を見せ、自分の名前を言った。その声のトーンは意外なほど高く、大きな身体と不似合いに感じられた。

「ええ、もちろん四股名です。ちちは牛のお乳の乳、もちろんお母さんのお乳でもいいです。お父さんの父のことではありません。ようするに乳のことです。ゆたかは豊になるという豊です。心が豊になるとか一所懸命働いて稼いで豊になるというあの豊です。他に豊は思いつきませんが、かつて一度『浴衣？ 父の浴衣？』と聞かれたことがあります。後になって思えばたぶんからかわれていたのでしょう。乳豊が父浴衣と聞き違えることはちよつと考えられません。くだいようですが、父の浴衣ではありません。乳が豊の乳豊です」そういうと、力士は心もち胸を張った。

「そうです、ご覧のとおり男のくせに乳が張って豊かなものですから乳豊かな

んて四股名を頂戴してしまいました。初めのうちは気恥ずかしかったですが、今は結構気に入っています。まあ四股名も慣れば住めば都みたいなものとも言いましょうか」

「どすこい、稽古はさぞ大変なんでしょうね？」斑が尋ねた。

「ええ、そりゃあ稽古はきついです。でも、もちろん相撲は好きですよ。僕は相撲取りですから相撲が嫌いなどと思ったことは一度もありません」
「どすこい、やつぱり将来はちゃんこ料理のお店を出すのですか？」今度は二本角が尋ねた。

「ははは、そうです、よく『将来はちゃんこ料理屋になるのが夢ですか』なんて聞かれますが、ちゃんこ料理屋を持ちたくて相撲取りになったわけではありません。夢は精進して大関になることです。横綱はだめです。後がありませんから。おみくじの大吉みたいなものです横綱は。後は悪くなるだけですからね。やつぱり大関がいいです。『角番の大関乳豊踏ん張りました。八勝負勝ち越しを決めました』なんて実況中継されたらいいですね。それこそ最高です。故郷の両親兄弟同級生を始め、お世話になった方々もきつと喜んでくれるでしょう」そういうと、乳豊と名乗る力士は、三兄弟の顔をそれぞれ見ながらテーブルの上のおしぼりを手にすると丁寧に額の汗を拭った。笑顔は相変わらずだ。

「ちよつと表を歩いていたら気になる話を耳にしたもので」

乳豊は新しいおしぼりを手にすると、今度は脇の下の汗を拭きながら話を始めた。

「ひまわりはやめたほうがよろこぶですよ」

「・・・どすこい、乳豊関、それはまたなぜですか？」斑が驚いて尋ねた。

乳豊は斑の驚く顔を見るとニヤリと笑みを浮かべ右手の人差し指を立てた。

「ひまわりは英語でダンデライオン。『ライオンの歯』という意味です。あなたたちは、もともと草食動物。かたやライオンはもともと肉食動物の王様です。あなたたちキリンにとって、ライオンは言うなれば天敵。花は見る者の想像力を喚起します。『床の間に活けたひまわりがライオンに見えて怖くて眠れない』などと訴えられるかもしれません」

「どすこい、なるほどライオンですか。それはたしかにいいですね」首長が感心して頷いた。首長の顔を見ると乳豊は得意げな顔をして軽くうなずいた。

「ところで僕は自分のことばかり話していました。あなたたちのことも興

味があります。自己紹介をお願いできませんか？」

乳豊にそう言われると、キリンの兄弟たちはお互いの顔を見て、なるほどそれもそうだということになり、長男の首長、次男の斑、三男の二本角の順で簡単に自己紹介をした。

乳豊は三人のそれぞれの自己紹介を聞き終わるとお礼をいい、僕にちよつとしたアイデアがありますという。

「あなたたち三人の名前は長いし、語呂も悪くて言い難いですね。僕が四股名をつけてあげましょう。まあニツクネームみたいなものです」

乳豊はそういうと、三兄弟一人ひとりに四股名をつけた。長男の首長キリンはクツキー、次男の斑キリンはマツキー、三男の二本角キリンはニツキー、ようするにそれぞれの名前の最初の文字とキリンのキの字をくつ付けたものだった。

「ごつつあんです」とクツキー、マツキー、ニツキーはお礼を言った。

三人からお礼を言われたけれど、本当は本人たちより名付け親の乳豊の方がそれぞれの四股名をいたく気に入っていた。

「♪クツキー、マツキー、ニツキー、イエィ♪ そのうち君たちのテーマ曲を作ってあげましょう」

「どすこい。ですが乳豊閣、草食動物とか肉食動物とか言いますが、最近では結構曖昧になってきています。たとえば、健康に気を使って陸上動物をやめて魚しか食べないライオンだっているんです。ましてや僕らのお客さんにはライオンも結構いるんです」マツキーはひまわりを諦めていなかった。

「マツキー、僕は偶然店の前を歩いていて、君たちの話を聞いて気になったことを言っただけさ。まあおせっかいだったかな。正直言つて僕は商売のことはよくわからない。だけど、君たち三兄弟のことだからきつとうまいことやると信じている。クツキー、マツキー、ニツキー、君たちと知り合いになれてよかった。それじゃあまた会おう」

乳豊はそう言うのと席を立ち、ドアに向かって歩き始めたが、ふと立ち止まって振り返った。

「そうだ、僕の家は夕陽丘の向こうのトウモロコシ畑の中にある。よかつたらいつでも遊びにおいで」そういうと乳豊はぺたぺたと裸足の足取りも軽く、爽やかに去って行った。

二 長期休暇

『花の貴公子たちクッキー・マッキー・ニッキーの店』

三兄弟の生花店の新しい看板が出来上がった。

キリン三兄弟の首長、斑、二本角といえ壁の町では知らない者がいないくらいに有名だったけど、せっかく友達になった乳豊が四股名をつけてくれたので、これからはクッキー、マッキー、ニッキーという名前でそれぞれ生きていくことに三兄弟は決心した。

実のところ、何事にも慎重な長男の首長は改名に抵抗していたけど、今回も次男の斑に押し切られた形で渋々承知したのであった。

そこで、さっそく自分たちの店の名前『首長・斑・二本角の花の店』も変えることにし、さらにせっかく新しい店名にするのだから『花の貴公子たち』としゃれた（ちよつぱり恥ずかしいけれど）冠を頭に載せることにした（これはマッキーの発案だ）。

ちょうど花の売り上げの少ない時季ということもあって、看板の書き換えや店名変更に係わるいろいろな事務処理もいっぺんに済ませることにし、併せて店内の大幅な改装もすることにした。ただし、完全に店を閉めるとお客様に迷惑がかかるので、改装期間も営業を続けることにした。店番は三男のニッキーがすることにし、長男のクッキーと次男のマッキーは長期の休暇を取ることにした。

長距離走が得意で、モロッコでもトップクラスの長距離選手と言われるクッキーは、長いことできないでいた本格的な練習をするために合宿訓練に入った。

夏季商戦の目玉にしたいと考えているひまわりは背の高い種類で、どうもイタリアのボローニャ産のものがよさそうだということがわかったので、マッキーはさっそくイタリア半島に向かうことにした。

クッキーは長男としての責任感も強く、合宿中もお店の状況を聞くために二三日おきにニッキーと会っていた。この日は、クッキーの奢りということで、二人は久しぶりに足長でビールを飲みながら、最近の売れ筋や店の売り上げのこと、普段見慣れない人がちよくちよく店を覗きにくること、しばらくお花を買いに来ていなかった常連客の一人が最近亡くなったこと、等々世間話に花を咲かせていた。

「今頃マッキーも美味しいワインを飲んで、大好きなイタリア料理をたらふく食べてるね」

「マツキー兄さんは、ひまわりにやけにこだわっていたけど、本当は初めからイタリア旅行が目的だったんじゃないかな」

「ははは、そうかもね。あいつはブルイところがあるからな」

「ところでクツキー兄さんの調子はどうなの？」

「いやあ練習不足が祟っているよ。来年開催の駅伝ワールドカップの予選までには何とか本調子にまでもっていかないとね」

「まさか兄さんが予選に落ちるようなことはないでしょう」

「いや、強敵が現れたよ。昨年の箱根駅伝でY大学の5区を走った黒キリンが今年大学を卒業して国に戻ってきた。昨年まで、ワールドカップのキリン枠は僕の指定席だったけど今年は黒キリンと争うことになる。実際、今の僕の実力じゃ危ない。選手に選ばれるかどうかは、この合宿の出来次第と言っても過言じゃない」

「黒キリンねえ・・・彼についてはいい話を聞かないよ。」

「ニツキー、人の噂をそのまま鵜呑みにしちゃだめだ。スポーツ選抜でQ大学に行った僕と違い、黒キリンは一般受験で難関Y大学に受かっている。その上彼は4年間、厳しいトレーニングと高度な学問の両立を見事にこなしてきた。そんじょそこらのキリンにできる芸じゃない」

日本が発祥の地と言われている駅伝は、数多い陸上競技の中でも最も人氣があり、選手層も厚かった。現在、世界中のどこの国でも駅伝大会は重要なスポーツ大会と位置づけられているが、その中でも箱根駅伝は『駅伝の中の駅伝』といわれる存在であり、これに出場することは世界中の若い長距離ランナーの夢である。箱根駅伝は大学対抗なので、モロッコからも毎年多くの若者が日本の駅伝強豪校に留学している。

クツキーは、新年早々、日本でいうお正月に開催されるこの箱根駅伝に8年前に初めて出場したキリンである。

彼は今では、モロッコ国内はもとより、世界中のキリンからスポーツ界の英雄として尊敬されており、また、穏やかな性格で目下の面倒見もいいので、多くの若いランナーに慕われてもいる。黒キリンもクツキーを慕う後輩ランナーの一人であり、クツキーも黒キリンには一目置いていた。

黒キリンは、その名のとおり全身が美しい漆黒の毛に覆われているキリンだった。

彼の父は彼と同じように漆黒の毛に覆われた黒いキリンだった。その父は黒キリンがまだ幼いときに黄色系キリンの組織する人種差別団体の構成員数名からリンチ受け、なんとか一命は取り留めたものの半身不随で寝

たきり状態となり、結局、黒キリンが中学１年生のときに亡くなった。

黒キリンは、人種差別の残るこのモロッコを自らが政治家になって変革すると父の墓前に誓った。彼は寝る暇も惜しんで勉学に励み、中学、高校を圧倒的に優秀な成績で卒業すると、授業料免除の特待生として日本の最難関大学であるＹ大学に入学した。大学入学後も勉学への熱意と集中力は途切れることなく、法律、政治、歴史、宗教、遺伝子工学の各分野を優秀な成績で修め、この春、主席で卒業して帰郷していた。

黒キリンの家庭は、母一人子一人のいわゆる母子家庭だった。ところが、国に戻った黒キリンは定職にも就かず、かといって、学校に戻って勉強するということもなかったので、彼を知る者みんなが、黒キリンはいったい毎日何をしているのだろうと不思議に思っていた。

彼には友人と呼べる友人もなく、ほとんど自宅から出ることもなかった。また、町の市場で働く彼の母も子供について聞かれてもいつも硬く口を閉ざしていたので、黒キリンはきつと何か作っているのだろうとか、執筆作業でもしているのだろうと根拠のない噂が絶えることがなかった。しかし、時間の経過とともに、一つの無責任な噂がまた次の無責任な噂を生み、この噂の連鎖が最終的には「黒キリンはきつと何か悪いことを企んでいるに違いない」という噂にまで発展してしまった。黒キリンは、本人が知っているのか知らないのかも不明だけど、今や壁の町のみんなに危険人物と思われるようになってしまった。

「一度その黒キリンとやらにお会いしてみたいものですな」

クッキーとニッキーが驚いて振り向くと、声の主はなんと乳豊だった。「黒キリンとはやつぱり言い難いですね。クロキリンだからクッキーがいけど、既にクッキーはこちらにいらつしやるからブラッキーではどうだろう。ブラックのキリンのブラッキーです。気に入ってくれるといいですが」

いつの間にか二人の後ろに現れていた乳豊は相変わらずご機嫌だった。

「おや、今日はお一人足りませんね。マッキーはどうされました？」

「どすこい、乳豊関、せっかくご助言をいただきましたが、あの後兄弟で話し合ってやつぱりこの夏はひまわりを販売することにしました。マッキーは遠方までひまわりの買い付けに行っています」クッキーは少し申し訳なさそうな顔で説明した。

「なるほど、そうでしたか。それならかえってよかったです。今日は先日の訂正でやって来たのです。ひまわりは英語でサンフラワーでした。お部

屋に飾ればパット明るくなってようございますよ。ダンデライオンはたんぼぼでした。私の記憶違いです。大変失礼しました。ところでマッキーはどちらに？」

「どすこい、乳豊関、マッキーはイタリアに向かいました。イタリアのボローニャというところは背の高いひまわりの産地だそうで、3日前にそちらに向かつて出発しました」

そう言うと、クッキーはテーブルに紙ナプキンを広げると、そこにさらさらとイタリア半島を描き、中心辺りに×印をしてその下に『ボローニャ』と書いた。

三 ニュー・シネマ・パラダイス

ところで、話は1週間ほど前に遡る。6月に入ったばかりの頃、マッキーはひまわりの買い付け先のボローニャに行く準備をしていたが、肝心の経路と交通手段の決定に少し手間取っていた。マラケシュからボローニャへの直行便はなかったが、その代わり膨大な選択肢に悩まされていたのだ。いろいろ調べてみると、ちよつと遠回りになるけど、カサブランカとシチリアの間に定期便があることを知り、マッキーは嬉しさのあまり思わず小躍りした。

マッキーは馬鹿がつくほどの大の映画好きだった。

「君の瞳に乾杯」マッキーは、映画カサブランカのハンフリー・ボガートを真似た。

「どうせなら、プロペラ機に乗りたいな。映画と逆でプロペラ機で飛び立つのは僕。そして涙ながらに僕を見送るバグマン。バックに流れるBGMはもちろん『As Time Goes By』カッコイイなあ。カサブランカか、いいなあ。そんでもって目的地はシチリアか。いいなあ。アルフレード、アルフレードだ」

カサブランカはマッキーの大好きな映画だったけど、映画の舞台でタイトルのカサブランカという自国モロッコ最大の都市に、マッキーはこれまで一度も行ったことがなかった。たいていお花の買い付けはマッキーがしてきたので、あっちこつちと出張は多かったけど、よくよく考えてみれば、マッキーは仕事以外の用事でマラケシュを出たことすら数えるほどしかなかったのだ。そして、外国に行くなんてことは、これまで仕事において

もなかったので、パスポートの手配やらいろいろなしなければならぬことも多かったが、マッキーはてきばきと身支度をすませ、三日前に家を出た。

そして、イタリアである。マッキーにとってイタリアとはローマでもパスタでもサッカーでもアルマーニでもフェラーリの国でもなかった。彼にとっては大好きな映画『ニュー・シネマ・パラダイス』の国であり、ソフィア・ローレンやクラウディア・カルディナーレやシルバーナ・マンガノといったグラマラスな女優の国だった。

マッキーがひまわりといってまず思い出したのは、ソフィア・ローレンとマルチェロ・マストロヤンニ主演、ヴィットリオ・デシーカ監督の名作『ひまわり』だった。マッキーはこのイタリア映画が大好きだったので、ひまわりと言えば一も二もなくイタリアだった。彼は映画の中の、あの35ミリフィルム映画の大画面をまさに覆いつくさんばかりに咲き乱れる広大なひまわり畑の風景は、てっきりイタリアだと思いこんでいた。

映画ではあのひまわり畑のある地は、当時のソビエト連邦（ソ連）という設定であつたということ、しかし、実際にはソ連で撮影されたものではなく、スペインにあるひまわり畑を撮影したものであつたという、少し入り組んだ事実の両方をマッキーは知らなかった。

昼前に壁の町をバスで出発し、途中一度またバスに乗り換え翌日カサブランに到着すると、マッキーは、早朝にもかかわらず大勢の観光客でひしめく繁華街に向かった。そこには映画を記念して建てられた『カサブランカ記念館』があり、マッキーは開館と同時に入館した。1942年という420年も昔の映画であるにもかかわらず、製作当時実際に使われた台本等、貴重な資料が数多く現存していることにマッキーは驚き、時間をかけてそれらの資料を丹念に見て歩いた。マッキーは丸一日、この古典映画の傑作の世界に浸り、大いに満足してカサブランカの町を後にした。

カサブランカからは、旧式の小型飛行機だったにもかかわらずたったの3時間でシチリア島に到着した。あんまり早く着いたのでマッキーも拍子抜けするほどだった。ただし、入国手続きでマッキーは、パスポート写真の肌の色と本人の肌の色が違うとクレームをつけられ、ちよつとばかり嫌な思いをし、少しばかりの手間もかかった。ところが、一步空港を出てシチリアの赤茶けた大地を踏みしめたたん、マッキーの体内に言葉ではうまく言い表せない喜びが満ちてきて思わず小躍りしてしまった。

「ああとうとう僕は『ニュー・シネマ・パラダイス』の島にやってきたんだ」マッキーは大きな声で叫んだ。

「トト、二度とここには来るんじゃない」

「アルフレード、アルフレード」

「トト、ここはなんて書けばいいんだ？」

「あんたって子は何度言ったらわかるんだい」

「アルフレード、アルフレード」

マッキーは、初めての外国の地であるシチリアの町を映画『ニュー・シネマ・パラダイス』に出てくる登場人物になりきりながら歩いた。それも複数の役を一人で演じ、ところどころにストーリーをまじえ、しかもまるで鼻歌でも歌うように軽々と。

島民は美しい斑模様のキリンに目を奪われたが、よく見ると彼がトトやアルフレード、母、神父等の役を見事に使い分けて、ほぼ完璧に映画『ニュー・シネマ・パラダイス』再現していることを知って非常に驚いた。そして、そうこうするうちに美しい斑キリンの『一人ニュー・シネマ・パラダイス』は噂が噂を呼び、少しずつマッキーの回りに人が集まり始めていた。マッキーは憧れのシチリア島に来て、ただ嬉しさのあまり大好きな『ニュー・シネマ・パラダイス』の物真似をしていただけだったけれど、一人芝居が終わって一息つくと、彼は自分の回りに異常な人だかりができていることに気がついた。彼を何重にも取り囲む人々の数は、ざっと200人くらいいただろうか、マッキーが我に帰ると誰もが拍手をした。

「ブラボー」

「ブラボー」

あっちこっちでブラボーの声がする。感激のあまり泣いている人がいる。花束を渡したくてもじもじしている子供がいる。

「斑模様のキリンさん。あんたいったいどこから来なさった？」老人が質問した。するとあっちからもこっちからも質問や感想が聞こえてきた。

「キリンさん、あんたの名前はなんていうんだい？」

「斑模様も見事だけど、あんたの一人芝居は最高だよ。どこでおぼえたかね？」

「どうだい一杯やっていかないか。ごちそうするよ」

「キリンさん、あんたが『アルフレード、アルフレード』って叫ぶと映画を思い出しちまって涙が止まらなかったよ」

マッキーは、島の人々が発する矢継ぎ早の質問や感想にあっけにとられながらもその都度まじめに答えていた。

「今晚はどこに泊まるつもりかね。決まってなかったら、うちに泊まらな

いか。金はいらないよ、その代わりうちの寝たきりの母ちゃんにお前さんの『ニュー・シネマ・パラダイス』を見せてやってほしいんだ」

人懐っこい笑顔が特徴的な、三十歳くらいの小柄なおじさんが話しかけてきた。マツキーは考えてみたら宿のあてもなかったし、陽の長い6月とはいえ、あたりはそろそろ暗くなり始めてきていたので、マツキーは心の中で『マツキー！　じゃなかったラツキー』と叫んだ。イタリア初日、マツキーは、シチリア島で家には寝たきりのお母さんがいるという、この見ず知らずの三十歳くらいのおじさんのお家に泊まることにした。

歩き始めてどのくらい経っただろうか。マツキーは、ついさつきシチリアの空を染め始めた美しい夕焼け雲に感動していたのに、ふと気づくと、夜道に輝くオレンジ色の三日月に感動していることに自分のことながら驚いた。マツキーとおじさんはすでにいくつかの丘を越えたけど、おじさんのお家にはまだ着きそうになかった。この三十歳くらいのおじさんの元気な足取りを見ると、まだもう少し歩かなければならないかなとマツキーはちよつぱり後悔し始めていた。それでも、歩きながら二人は世間話をしたり、自己紹介をしたり、とりとめのないジョークを言ったりしている間に少しずつお互いがお互いのことを知り始めていた。

おじさんの名前はサルヴァトーレ・ヴィッツーニといった。小柄だが、逞しい身体つきで腕は丸太のよう、胸板も厚く見るからに腕っぷしは強そうだ。漁師のように日焼けした顔は濃い眉毛と大きないたずらっぽい瞳が特徴的で、愛嬌たつぷりの笑顔がいかにも人のいいおじさんという印象を醸し出している。

「イタリア人丸出して名前だけど、長くて言い難いですね。いつそのことと僕が四股名をつけてあげましょう。いいえ、ニックネームみたいなものです。サルなんてどうです」

マツキーは乳豊の真似をしてサルヴァトーレ・ヴィッツーニにニックネームをつけた。サルヴァトーレ・ヴィッツーニは鼻をほじくるのを止めると、左の鼻の穴から左手の人差し指を抜いた。

「サルじゃまるで猿って呼ばれているみたいだな。お前さんのようにキリンなら猿と呼ばれても腹も立たないだろうけど、俺は猿と呼ばれるのはちよつと抵抗あるなあ」

サルヴァトーレ・ヴィッツーニは口を尖らせて不満そうな顔をマツキーに向けた。

「あのねえサルヴァトーレ・ヴィッツーニ、たしかに僕はキリンだけど、

だからといって猿と呼ばれて嬉しいはずないじゃないか」マッキーも『お前の言うことは納得できん』という感じの不満の目つきでサルヴァトーレの顔を見た。

「それならレヴィはどうだろう」マッキーは少し考えてからサルヴァトーレに提案した。

「レヴィか、うん、それならいいな。俺氣に入ったよ。よし今日から俺はレヴィだ」

サルヴァトーレは、「なるほどサルヴァトーレのレとヴィツツーニのヴィを足してレヴィか」とぶつぶつ感心しながら、たぶん生まれて初めて他人につけてもらったニックネームにとっても満足したようで、軽い足取りはさらに軽くなった。マッキーは歩き疲れて重くなった足を引きずるように、レヴィのあとを追った。

四 トウモロコシ畑

その頃、壁の町のお花の店では、昼間忙しく働いていた改装業者もいなくなり、店の奥で一人ニッキーが帳簿の整理をしていた。

「ごめんくださいだゾウ」そこに、近所で食品店を経営している象さんがやってきた。彼は象のくせにやけに耳が小さかったので皆から『小耳』と呼ばれていた。

「やあ、小耳さんいらつしやい」

「改装中すまないけどお花を買いに来たんだゾウ。今日はお母さんのお誕生日だからお花をプレゼントしようと思っているんだゾウ」

「そりや感心だ。小耳さんは親孝行だね。お花の希望はあるの」

「いや、僕はお花を選ぶセンスがないからお花屋さんにお任せしたいんだゾウ。お母さんは今日で42歳になるゾウ。中年のおばさん象が喜びそうなものをお願いしたいゾウ」

「了解しました。だけど改装中なのでいつもよりお花の数が少ないからね。その分お安くしておくね」

「それはかえってありがたいゾウ。ところで前から訊こうと思ってたんだけど、なんでキリンさんのお店はいつも象の歌を流してるの」

「小耳さん、なんのことかな。うちはお花屋さんだし、ましてやキリンの兄弟が経営している店だから象の歌なんか流していないよ」

「今流れている曲だよ。この歌は象さんの歌だよ」

♪ 増産増産 お花が長いの 寝そうよ 母さんも長いよ ♪

ニッキーは少し音量を上げてよく聞いてみた。

「これはお花の歌だよ。お花を増産する歌さ」

「あはは違う違う増産じゃなくて象さんだよ」

小耳は小さな耳をバタバタと動かして笑った。

♪ 象さん象さん お鼻が長いね そうよ母さんも長いよ ♪

「本当だね。そう言われてみると確かに増産じゃなくて象さんに聞こえる。実のところ僕もお花が長いのはいいとして、なぜ寝そうで、母さんの何が長いのか理解できなかったんだ。そうかこれは象さんの歌だったんだね」
「そうだゾウ。だけど考えてみると君たちキリンを歌った歌を僕は知らないんだゾウ。」

犬、猫、馬、人間、鯨、イルカ、ライオン、猿、虎、鼠、牛、兎、へび、羊、山羊、亀、ドブネズミ、赤鼻のトナカイ、赤とんぼ、鳩、すずめ、エトセトラ、エトセトラ。

たいていの動物は自分たちの歌を持っているのに、なぜ君たちキリンの歌はないんだい」

なるほど確かにそうだ。自分たちキリンを歌った歌を、ニッキーも聴いたことがないという事実は今更ながら気がついた。

ニッキーはふと、乳豊が「君たちのテーマ曲を作ってあげる」と言っていたことを思い出した。

「小耳さん、僕には歌を作る知り合いがいるんだ。その人に近いうちに僕ら三兄弟の歌を作ってもらうことになっているんだ」ニッキーは、ちょぴり得意げに言ってしまった。

翌日、店を早めに閉めて、ニッキーはさっそく歌を作ってもらおうと乳豊のお家に向かった。ニッキーは乳豊が「僕の家は夕陽丘の向こうのトウモロコシ畑の中」と言っていたのを思い出して夕陽丘に向かってずんずん歩いた。

壁の町は四方が高い山に囲まれた直径20 kmほどの丸い形をした平野だが、ところどころに低い丘陵がある。夕陽丘は町のもっとも西方に位置する丘でキリン兄弟の店のある町の中心街からは10 km以上離れている。ニッキーは生まれてから一度もこの夕陽丘に登ったことはなく、したがって丘の向こう側に行ったこともなかった。ニッキーは早足で歩いたので普通に歩いたら2時間くらいかかる夕陽丘の頂上まで90分くらいで到着

した。額の汗を拭きながら丘の向こう側を遠く眺めるとたしかに広大なトウモロコシ畑が広がっていた。そしてよく見るとトウモロコシ畑の北西の方向に広い空き地があり、その空き地の真ん中あたりに小さな平屋建てのお家があった。

「あれが乳豊関のお家か。大きな身体に似合わず小さなお家だなあ」

ニッキーは乳豊のお家を発見して嬉しくなつて駆け足で夕陽丘を下つていった。丘を下りきつてから最初の十字路を右に曲がり、左手にトウモロコシ畑を見ながら200mくらい歩くと空き地が見えてきた。空き地は高さ1mほどの木製の低い柵で囲まれており外部から中は丸見えだった。お家の前には乳豊らしき人物がおり、よく見ると相変わらず緑色のまわし一丁の姿で穴でも掘っているのか手にはスコップが握られていた。

「どすこい、乳豊関」ニッキーが大きな声で呼ぶと乳豊が振り向いた。

「やあニッキーこんなところで何をしているの」

「どすこい、乳豊関、実はお願いがあつて会いに来ました。ところで乳豊関は何をしているのですか？」

「土俵を作っているんだよ」

「土俵？」

「そうさ、相撲の競技場の土俵さ。畑をつぶして土俵を作っているんだ。あと1カ月もすればここに立派な土俵ができる。トウモロコシ畑をつぶして土俵を作ることが僕の長年の夢だったんだ」

「どすこい、乳豊関、それは変わった夢ですね。どうしてわざわざトウモロコシ畑をつぶさなければならいんですか？」

「そりやあもちろん昔の名力士たちに会いたからさ」

「どすこい、乳豊関、その話は僕も映画で見ましたが、あれはベースボールの話です」

「そうかニッキーもあの映画を見ているんだね。僕は子供の頃あの映画を見て以来、将来力士になったらトウモロコシ畑を所有して家を建て、畑を一部つぶして土俵を作る、ずっとそれを目標にしてきたんだ」

「・・・」

「ニッキーは、たとえば、男女ノ川と双葉山の一番を見たいと思わないかい？」

「男女ノ川と双葉山？」

「うん」

「その二人は強い者同士ですか？」

「うんそりゃあ強い強い。そうだな1か月後にまたおいで。きっとこの二人の大一番を見ることが出来る」

「どすこい、乳豊関、男女ノ川と双葉山はぜひとも見てみたいですが、大事なお願いを忘れていました。乳豊関に僕ら三兄弟の歌を作っていたきたいのです」

「歌？」

「そうです。先日お会いしたときに乳豊関は僕らの歌を作ってくれと言いました」

「ああそうだったそんな話もしたね。お安い御用だ、歌なんて土俵を作るよりよっぽど簡単だよ」乳豊はそういうと、空を見上げてうーんと唸った。3秒ほど何かを考えてから右手の親指と人差し指でパチンと音を鳴らした。

「よしできた。こんなのはどうかな。♪ キリンの三兄弟 ♪ 川のなかあそーと覗いてみてごらん ♪ そーと覗いてみてごらん ♪ 仲良くお花を売ってるよお ♪」

「どすこい、乳豊関、そのメロディはメダカの学校じゃないですか。そもそも僕たちは川の中でお花は売ってないし」ニッキーはがっかりした顔で文句を言った。乳豊はニッキーの顔を見てけけら笑った。

「ははは歌なんていつだっていい加減なものさ。まあいいや明日またおいで、それまでに作っておくよ」

「えっ明日！ 本当ですか、ごつつあんです乳豊関。よろしくお願いします」

乳豊があんまり簡単に引き受けてくれたので、かえってニッキーは不安な気持ちになりつつもトウモロコシ畑を後にしたのだった。

五 ブラッキーの秘密

「ブラッキー、たすきを渡すタイミングが悪い」

「ブラッキー、駄伝は駆け引きだ。ここぞという勝負どころまでは我慢して自分のペースを守れ」

黒キリンの悪い噂を心配したクッキーは合宿に彼を誘ってみたが、意外なことに黒キリンは大喜びでクッキーの誘いに乗ってきた。黒キリンにとってクッキーは、ずっと目標にしてきた偉大な先輩であったが、いつの間

にか彼は、来年開催の駅伝ワールドカップのキリン枠をめぐって、クッキーを脅かす存在にまで成長していた。

「先輩、さつきから僕のことをブラッキー、ブラッキーって呼んでますが、いったい何のことですか？」休憩時間、二人が芝生に腰掛けると黒キリンはクッキーに尋ねた。

「ブラッキーは君のことに決まっているじゃないか。黒キリンなんて名前じゃ時代遅れだし、そもそもしゃい難いからって、乳豊関が君に四股名をつけてくれたんだ。黒はブラックでブラック・キリンでブラッキーなんだ。素敵な四股名だよ。カッコよくて羨ましいよ。僕なんかクッキーさ。まゐるでお菓子みたいで弱そうだろ。そういうわけで、今日から君はブラッキーだ。僕の場合はクッキーと呼んでくれ」

「僕はブラッキーですか。先輩はクッキーですね。了解です」

黒キリンはなんだか要領を得ないという顔をしていただけ、尊敬する先輩の言葉なのでとりあえず了解した。

「クッキー先輩は首が長いのにたすきの扱いが上手ですね」

「首が長いことは、たすきをかけて走る駅伝では大変なデメリットだからね。僕の場合、たすきを受けて首にかけたあと、首の下まで落ちないようにしないとならない。そうしないと、たとえば一度たすきが下までずり落ちると、次のランナーに渡すときにたすきが脱げなくてじたばたすることになり、下手すれば大きなタイムロスとなる。そんな醜態をさらしたら、僕を使う方だってわざわざリスクを犯すことを避けるから、結局、僕はたすきを渡すランナーのいない最終ランナーとしてしか使われなくなる。悲しいかな僕自身が何の工夫もしなかったなら、僕はいつだって最終区間を走るしか能のないランナーになるしかない」

「なるほど、先輩の独特な走法は練習の賜物なんですな」

「もちろんそうさ。僕が自ら考案した首の上の方でたすきをくるくる回し続ける『回転式たすき落下制御走法』は、理論的にはもちろん可能と言われていたけど、たすきを回し続けながら長距離を走れることはそう簡単なことじゃない。要するに無意識のうちにたすきを回し続けることができないれば不可能だ。僕もそれなりに相当の練習をしたんだ」

首の長いキリン・駅伝ランナーの間では今やすっかり定着しているこの遠心力を利用した『回転式たすき落下制御走法』を血の滲むような長年の練習の末に初めて成功させたのがクッキーだった。

「ところでブラッキー、君は就職もせず毎日いったい何をしているんだ

い？。何かよくないことでも企んでいるんじゃないかって噂されているぞ」
「噂があることは承知していますが、僕は本を読んでいるだけです」ブラ
ツキーは毅然とした表情でこたえた。

「本？」

「はい。僕は今、過去の偉大なキリン作家達の作品を読み耽っています。
先輩は『キリンの子はキリンか』を読んだことがありますか？」

「僕たちキリンのほとんどの種は、実は人間が過去数百年にわたり他の動
物と掛け合わせて作り出したいわば人工種であり、原種はもはや地上に存
在しない、という事実を明らかにしたタテガミキリンの問題作だろ。国内
では手に入らないと聞いていたけど」

「さすがクツキー先輩、読んでいらつしやいましたか」

「うん、学生時代に読んだ。日本でね。もうかれこれ6年くらい前だよ。
あの本は、そりゃあ衝撃的だった」

「僕は原種の剥製も見ました」

「原種の剥製？」

「ええ」

「それはいったいどこで？」

「・・・すみません。残念ながらそれは言えません。先輩も知らないほう
がいいです。タテガミキリンの書いていることはすべて本当でした。原種
はものすごく巨大で、身長はたぶん僕らの3倍がありました。しかもクツ
キー先輩のように首が恐ろしく長くしかも斑模様でした」

「・・・巨大で首が長く斑模様・・・僕に弟のマツキーの斑模様があるよ
うなそんな姿なのか」

「からだの色は基本的に黄色でした。斑は茶褐色です。残念ながら黒くな
かったです。期待もしていなかったですが」

「黄色のからだに茶褐色の斑か。マツキーと同じだね」

『『キリンは月夜に吼えない』もタテガミキリンの作品ですが、これも先輩
読みましたか？』

「いや、その本は知らない」

「原種は満月の夜に吼えることはなかったそうです」

「それは初めて聞いた。満月に吼えなくてキリンと呼べるのか？」

「タテガミキリンは、キリンが満月の夜に吼えるのは、もともとは宗教的
行事だったものが習慣化したものだ」と推測しています」

「突拍子もない推測だな。そもそも原種が満月の夜に吼えなかったという

ことは事実なの？」

「人間の記録にはないようです。僕もいろいろ調査していますが、他品種の性癖が交配過程ですりこまれたものか、タテガミキリンのいうとおり宗教的行事だったものが習慣化したものか、また他の理由によるものなのか、正確なところはわかりません。ただし、人間の記録が間違いで、原種も満月の夜に吼えていたという説もあり、これも否定する根拠はありません」

「きみは仕事もしないで、毎日そんなことを研究しているの？」

「ええ、おかしいですか？」

「おかしいよ。だいたい仕事もしないで生活ができるの？」

「母には迷惑をかけていますが、僕一人食べさせるぐらいは何とかなるようです」

「そうかもしれないけれど、いったい何のためにそんな研究を？」

「僕はいつたい自分が何者なのか知りたいのです」

「・・・」

「こんなこと先輩だから話しましたが、誰にも言わないでください」

「まあ、変なことを企んでいるんじゃないことだけはわかった。君らしいといえば君らしいともいえる。もちろん誰にも話さないよ。さて、またひとつ走りするとするか」

クッキーとブラッキーは芝生から立ち上がった。

クッキーとブラッキーの二人を木陰からじつと見つめる視線があることを二人はまったく気がつかなかった。

六 レヴィのお家

さて、話をシチリア島にうつそう。

マッキーとレヴィことサルヴァトーレ・ヴィッツニは、すっかり陽が落ちてからもさらにいくつかの丘を越え、広大なオリーブ畑を横切ったり、夜中に一人で歩くのはちょっと遠慮したくなるような森を突っ切ったり、たっぷり2時間ほど歩いてレヴィのお家のある小さな村に辿り着いた。マッキーが見上げると、空にはたくさん星が瞬いていた。

レヴィの家は建坪20坪くらいの小さな木造の平屋建て家屋だった。お庭らしいお庭はないけれど玄関の脇左右各々に50センチ四方程度の小さな花壇があり、右には白いユリの花が、左には赤いガーベラが咲いてい

た。マッキーはそれを見てちよっぴり嬉しくなった。

「母ちゃん帰ったよ。遅くなってごめんよ。今日は友達をつれてきたよ」
レヴィは玄関を開けるなり大声で叫んだ。

「遅いじゃないかサルヴァトーレ、もうお腹が空いて死にそうだよ」奥からしわがれた声が聞こえてきた。

「ごめん母ちゃん、すぐ食事の用意をするからね。それまで俺の友達と話でもしててよ」

レヴィは、玄関から奥の部屋を指差しながら、母ちゃんに『一人ニュー・シネマ・パラダイス』をやってみせるようマッキーに言った。

マッキーはうなずくと、すたすた真っ直ぐ奥の部屋の前まで行き、ドアをノックした。中から「開いてるよ」というしゃがれた声がして、マッキーはドアをそっと開けて中を覗き込んだ。

レヴィのお母さんはベッドに横になっていたけど、よっぽどお腹が空いて機嫌が悪いらしくマッキーがドアを開けてもソップを向いていた。マッキーはどうしようか、何か話かけようか迷っていたけど、結局、ドアを開けたきり何も言ってこないことに待ちきれなくなったレヴィのお母さんが根負けして振り向いた。

「なんだキリンじゃないか！」レヴィのお母さんはマッキーの顔を見るなり驚いて素っ頓狂な声を出した。

『この女性は、いったい何歳くらいだろう。60歳くらいか、いや70歳は超えているかも。うーんわからない、人間の女性の年齢は本当にわからないな。まさか90歳を超えているってことはないだろうな』マッキーはレヴィのお母さんの顔をまじまじと見た。小柄なレヴィと対照的にレヴィのお母さんは大柄で、顔色はいいし見るからに元気そうで、その上何しろよく太っていてとても寝たきりの病人には見えなかった。

「友達だと言って、らくだを引っ張ってきたり、猿をおぶってきたり、サルヴァトーレ、あんたには人間の友達はいないのかい？」レヴィのお母さんは台所で夕食の用意をしているレヴィに聞こえるように大きな声で叫んだ。

「おい若造、来い」突然マッキーが何かを演じ始めた。

「俺？」

「なんで石を投げた？」

「投石は法律違反？」

「いい度胸だな 貴様」

レヴィのお母さんはしばらく呆氣にとられていたが、その目がみるみる輝き始めた。

「ジミーだね。あんたそれジミーだろ？」レヴィのお母さんは叫んだ。

「何しに來やがったんだ」マツキーは、レヴィのお母さんの言葉を無視して演技を続けた。

「会える？」

「ケートに？　なぜ、何の用がある？」

「ただ話しがしたい」

「おおっ！ジミー、私の青春。美しい斑模様のキリンさんよ、もつと続けておくれ」レヴィのお母さんは、すっかり興奮していた。

マツキーはたつぷり1時間半かけて『エデンの東』を演じきった。

「どうだい母ちゃん、俺の友達のマツキーの演技、なかなか素晴らしいだろう？」

レヴィはまるで自分のことのように誇らしげに自慢した。

「ああ、ああ、素晴らしいいったらないよ。長生きはするもんだねサルヴァトーレ。それにしてもほんとに名演技だったよ。キリンの間抜けな顔がハンサムなジェームズ・デインに見えてきちゃうからなんとも不思議だよ」
「母ちゃんたら、死にそうなくらいお腹が空いていたくせに、俺が腕によりかけて作ったカツ丼に箸もつけてないよ。それにしてもマツキー、お前さん、なんで母ちゃんがジェームズ・デインの大ファンだつてわかったんだ？」

「君のお母さんの顔を見た瞬間『エデンの東』とピーンときたんだ。自分でも不思議なんだ。喜んでもらえて僕も嬉しいよ。」

七 ニッキーの二本角

トウモロコシ畑をつぶして土俵を作っているし、いい加減な替え歌を歌って、さも自分の作品だと言ってみたり、ニッキーにはだんだん乳豊がまともな人間だとは思えなくなってきた。彼に明日またおいでは言われたけれど、ニッキーは実のところ不安でいっぱいだった。どうしようかとほんの少し悩んだけれど、騙されたと思って、ニッキーは翌日も乳豊の家にやって来た。

「ごつつあんでーす」玄關の前でニッキーが大きな声で挨拶をすると、し

ばらくしてドアが開いて乳豊が現れた。彼は真つ赤のアロハシャツを着てギターを抱えていた。ニッキーは、初めて見る服を着た乳豊の姿に少し驚いたけれど、よく見るとアロハシャツの下はやっぱりまわし一丁だった。「やあニッキー待っていたよ。ちょうど君たち三兄弟の歌ができあがったところさ」そう言々と乳豊はポロンとGのコードを鳴らした。

乳豊に導かれてニッキーは家の中に入った。外から見ると小さな家だけど、乳豊の身体が大きいせいとか、家の中はもつと狭く感じた。乳豊がお茶の用意をしている間、ニッキーは用意された椅子に腰掛けて部屋の中をきよるきよる見学した。壁が一面あり、その4分の1くらいが書棚になっていて、見た目にも古い本がざつと百冊くらいあった。本はよく見ると背表紙に大きな字でAとかBとか書いてあるので、ニッキーは、あの本はきつと大昔の百科事典に違いないと思った。壁は残りの4分の3の半分は棚、半分は壁で、棚にはいろいろな小物の他に写真立てがいくつか置いてあったが、ニッキーの位置からは遠すぎて、何が写っている写真なのかわからなかった。壁には乳豊が写っている畳半分くらいの大きな写真が一枚飾っていた。乳豊が他の力士を投げ飛ばしている瞬間を撮ったものだった。しばらくして乳豊は部屋に戻ると、椅子とギターを持ってきてニッキーの向かいに腰掛けた。ニッキーは、待ってましたとばかりに乳豊に話しかけた。

「どすこい、乳豊関が持つとギターがウクレレに見えてしまいます」あんまり乳豊のアロハシャツとギターを抱える姿が似合わないものだから、ニッキーは我慢しきれなくて、プーと吹き出してしまった。

「ニッキー、笑うなんてひどいじゃないか。僕はこう見えても相撲引退後は歌手で生きていくつもりなんだよ」

「どすこい、それは本当ですか？ まったく乳豊関には会うたびに驚かされます」

「引退が決まった後、両国国技館の土俵でお別れコンサートを開くのが僕の夢さ」

「どすこい、乳豊関にはいろんな夢がありますね。だけど、神聖な土俵の上で歌を歌うんですか？ そんなことが許されますか？」

「ふふ、歴史は繰り返す。過去に同じ理由で歌うことを反対された若者たちがいた。誰のことかわかるかい？ ニッキー」

「どすこい・・・もしかしたら、美空ひばりが紅白歌合戦に出なくなったことと関係ありますか？」

「それはたぶん関係ない。答えはビートルズ。武道館で初めてコンサートをやったのが彼らのさ。神聖な武道館でコンサートなんてとんでもないと、保守的な大人たちに猛反対されたんだよ」

「どすこい、それは知りませんでした」

「20世紀のことだからね、知らなくて当然さ。でもね、ビートルズですら、あの偉大なビートルズですら。国技館での土俵ライブは実現しなかったんだ」

「どすこい、ビートルズの土俵ライブ？」

「ビートルズの果たせなかった夢を実現させる可能性があるのは、たぶん僕だけだろうな。僕はこれでも現役の力士だからね。昔から角界は身内には甘いんだ」そう言うと乳豊はポロンとAmのコードを鳴らした。

「おっと、失敬、夢を語るにはちよつと暗いコードだったね。さて、前置きはこれくらいにして、そろそろお待ちかねのキリン三兄弟のテーマ、できたてホヤホヤの新曲を披露いたしましょう」

乳豊はギターのチューニングを始めた。

ニッキーのいうとおり、身体の大きな乳豊が抱えるとギターはまるでウクレレのように見えた。しかも彼がギターを抱えて座ると、豊かなバストのせいで、とっても弾き難そうに見えるし、そのうえ乳豊の指ときたら、まるでフランクフルト・ソーセージのように太くて本当に弦を上手に押さえることが可能なのかと疑ってしまったが、実際に彼がポロンとコードを弾くと不思議なほど濁りのないきれいな音を響かせた。

「大貫妙子風の軽い曲だよ」そういうと、乳豊は軽く目をつぶり、上半身を軽くスウィングさせながら、右足でぺたぺたとリズムをとり始めた。そしてEのコードを軽くしゃかししゃか弾き出すと軽やかに歌いだした。

① ♪ キリンさんが満月に吼えるのは

大昔心の優しいキリンさんが ♪

♪ おーいウサギさん元気かあなんて

満月に向かって話しかけていた名残だという ♪

♪ クッキーの首が長いのも月へ月へと首を伸ばしていたからかな

② ♪ キリンさんがお花を好きなのは

大昔恋に目覚めたキリンさんが ♪

♪ 大好きな彼女の気を引くために

毎日いろんなお花をプレゼントした名残だという ♪

♪ マッキーの斑模様はだから花びらのように美しいのかな

③♪ キリンさんが兄弟仲良しなのは

大昔迷子になったキリンさんが ♪

♪ ライオンに襲われそうになったとき

助けにきた兄弟が力を合わせて戦った名残だという ♪

♪ ニッキーが誰よりも勇ましく見えるのは二本角のおかげかな

時間にして2分足らずと短いけど、リズムカルでありながらメロディはとても耳に優しく聞こえて、ニッキーは覚えやすそうな歌だなと思った。

「ニッキーどう？ 曲名は『キリン三兄弟』だ。気に入ってもらえたら嬉しいけど」

「ごつつあんです乳豊関。メロディもリズムもとてもいいです。歌詞も1番と2番はすこく気に入りました。ただ3番目の歌詞はちよつと・・・僕の二本角は醜いのに」

「ニッキー、君の二本角が醜いなんて、いったい誰が言ったんだ？」

「どすこい、みんなそう思ってます」

「どうしてみんながそう思うと思うの？ ニッキー帽子を取ってみせて」
ニッキーは右前足をそおつと頭まで伸ばすと、恥ずかしそうに少しためらってから帽子を脱いだ。

「ニッキー、どうしていつも帽子なんか被っているの？ どうしてその素敵な二本角を見せて歩かないの？ 今日から帽子を被るのはやめなよ。女の子にだってずつともてるよ」

「どすこい、乳豊関、からかうのはやめてください。子供の頃からみんなに笑われていたから僕は自分の二本角が大嫌いなんです」

「ニッキー、きつと本当はみんな君のその二本角が羨ましいんだよ。力士の僕がいうんだから間違いない」

ニッキーは二本角を初めて他人にほめられて、とっても恥ずかしい気分になって、頬はもちろん両耳まで真っ赤になった。乳豊にお礼を言うのと、「また来ます」と言って足早に家を飛び出した。

乳豊のお家からの帰り道、ニッキーは心の中で何度も乳豊の歌と言葉を思い出していた。

『♪ ニッキーが誰よりも勇ましく見えるのは二本角のおかげかな ♪』

『どうしてその素敵な二本角を見せて歩かないの？』

すると、ニッキーは自分の中から元気がモリモリ湧いてくるのを感じ始めていた。

そして、夕陽丘を登りきる頃には自分の二本角がもしかしたら本当に勇

まして素敵なんじゃないかと思えてきた。ニッキーは帽子を脱ぐと夕陽丘のてっぺんに生えているケヤキの木の枝にひっかけた。

「二本角のキリンさん、いったい帽子をこんなところに引っ掛けてどういうつもりだい？」

黒カラスがニッキーに尋ねた。

「やあ黒カラスくん、丁度いいところに来たね。きみにこの帽子をあげるよ。布団にびったりだろう」

「本当かい、ありがとう。それにしても見事な二本角だね。どうしていつも帽子なんか被っていたんだい？ もったいない」

「ありがとう黒カラスくん。もう帽子は被らないよ」

ニッキーは黒カラスに別れを告げると、足取りも軽やかに夕陽丘を降りていった。

八 ひまわり農園主テラタン

「おい、マッキー起きろ。朝だ」マッキーは眠い目をこすりながらゆっくり瞼を開けると、目の前にエプロン姿のレヴィが右手にフライパンを持って立っていた。左手は相変わらず鼻をほじっている。

「さあ楽しい一日の始まりだ。顔を洗っておいで。朝飯食べながら作戦会議だ」

ニッキーは洗面所にいくと、冷たい水に顔を突っ込んで眠気を醒ましたけれど、慣れない異国の地ではしゃぎ過ぎた疲れが出たのか、身体も頭もいまひとつしゃきつとしなかった。

「作戦会議？ それにしてもレヴィはいつも鼻をほじってるし、あの手で作った料理は何だか嫌だな」

マッキーはすっきりしない頭をパンパンと2度ほど軽く叩いた。テーブルに着くと目の前には素晴らしいごちそうがところ狭しと並んでいた。

「うわあ凄い料理だなあ。これは誰のごちそうだね？」

「俺がお前さんのために作ったんだ。昨夜のお礼さ。お前さんの『一人エデンの東』のおかげで、俺も久しぶりに母ちゃんの嬉しそうな顔を見ることができたよ。ありがとう。キリンの口に合うか自信ないけどたとえ召し上がってくれ」

「実のところ君のお母さんにあんなに喜んでもらえるとは僕も思ってたな

かった」

「マッキー、『ニュー・シネマ・パラダイス』のときも思ったけど、俺は『エデンの東』を見て確信した。お前さん、俳優になるべきだ。俺にいいアイデアがある。ひとつお前さんのその才能で一儲けしないか？」

「レヴィ、僕はずーとこの島を訪れるのが夢だったんだ。今は夢が叶って満足してる。昨日も話したけど、僕はこれからひまわりの買い付けにボローニヤに行かなきゃならないんだ」

「何もわざわざボローニヤにまで行くことはないよ。ひまわりなんてこの島にだっていくらだって生えているんだ。まあ俺に任せておけ。休暇はあとどのくらい残っているんだい？　すぐ帰国しなければいけないのか？」

「初めての海外旅行だし、一か月くらいかけてあっちこっち行くつもりだけど」

「ふうん一か月か。ところでマッキー、フェリーニの『道』はできるか？」

「ザンパノ、ザンパノ、もちろん。僕の大好きな映画さ」

「他に何ができる？」

「イタリア映画では『山猫』とか」

「ヴィスコンティは貴族趣味でこのへんじゃ受けない。イタリア映画にこだわらなくていいよ」

「ゴッド・ファーザーはどうだい？」

「いいねえ、俺も大好きだ。1か2かそれとも3か？」

「どれでもOKさ」

「『ニュー・シネマ・パラダイス』、『エデンの東』、『道』、『ゴッド・ファーザー』の1と2』これだけあれば一か月もつだろ。あとはマネージャーの俺に任せておけ。ゆっくり朝飯食べてろ。ちよつくら出かけてくらあ」レヴィは手ぬぐいをくるくる捻ってそれを頭にぎゅつと巻いて玄関から飛び出して行った。

「僕に負けず劣らず、すぐ行動するタイプだなレヴィは」

マッキーはすっかり眠気も覚めて、あらためてテーブルの上の料理を眺めてみた。

「それにしても朝早くからいろんな料理を作ったものだ」

・オリーブオイルがたっぷりかかった地中海風サラダ

・わかめスープ

・ボンゴレ・スパゲッティ

・ツナとハムのサンドウィッチ

・たらこと鮭のおにぎり

・ハンバーグ

・なんだかよくわからない料理①（見たことのない野菜を炒めて酸っぱい匂いがする）

・なんだかよくわからない料理②（海老に変な黄色いつぶつぶが振りかけてある）

・籠一杯の生ホウレンソウ（テーブルに置きっぱなしになっているだけかも知れないが）

ほかにデザートとして

・プリン

・イチゴの乗ったミルフィーユ

・なんだかよくわからないデザート（液体チョコに見たことのない果実が浮いている）

どれもこれも美味しそうで『なんだかよくわからない』料理やデザートについてはなんとも言えないけど）マッキーはどこから手をつけようか迷ったが、とりあえず生ホウレンソウをむしゃむしゃと食べ始めた。

「サルヴァトーレッツ、サルヴァトーレッツ」レヴィのお母さんのしゃがれ声が聞こえた。

マッキーはお母さんの部屋に行き、レヴィが行き先も言わずにどこかに行ってしまったことを話した。

「キリンさん、どうかサルヴァトーレの友達になってやってくださいな。ああ見えて、あの子はとても心の優しい子で毎日私の世話を本当によくやってくれるんです」

「お母さん、僕はもうとつくにレヴィの友達ですよ。彼が優しい心の持ち主であることは玄関脇の花壇を見てすぐわかりました。僕もしばらくこの島に滞在することになりそうです。僕のほうこそよろしくお願いします」

レヴィのお母さんの部屋には、中心にベッドとその左隣に小さな机と椅子がワンセットあるだけで、これといったものは無かったが、唯一目を引いたのが机の上の写真立てで、たぶん銀製の見るからに高級品という品だが、写真には花嫁と花婿が写っており、若く美しい花嫁の隣の日焼けした笑顔の花婿はどう見てもレヴィだった。

「お母さん、レヴィは結婚しているんですか？」マッキーはレヴィのお母さんに尋ねた。

「えっなぜだい？ サルヴァトーレは独身だよ」

「だってその写真、レヴィは花婿姿だし、隣にはとても綺麗なお嫁さんが写ってますよ」

「やだね、これはあたしだよ。あたしの結婚式のときの写真だよ。あたしにだって若くてきれいなときがあったんだよ」レヴィのお母さんは笑いながらそういうと、マツキーに向かって両手を伸ばした。

「キリンさん、すまないけれど、さっきから膀胱が破裂しそうなんだよ、便所までおぶって連れてっておくれ」

「お安い御用です」マツキーはレヴィのお母さんをおぶって便所に連れていった。

『なるほど、あの写真の花婿はレヴィのお父さんか。そっくりだな。瓜二つとはこのことだ。それにしても、あの写真の美女がこんなに重たくなっちゃうんだ。時間というのは残酷だな。レヴィも毎日本当に苦労様だな』重たいお母さんをおぶって、あらためてマツキーはレヴィを見直した。

2時間くらい経ったろうか。レヴィが帰ってきた。しかも空から帰ってきた。レヴィはヘリコプターに乗って帰ってきたのだ。

ギョルギョルギョルギョルギョルギョル

家の外があんまりうるさいことになっているのでマツキーが表に出てみると、家の前にちょうど二人乗りのミニ・ヘリコプターが着陸したところで、中からレヴィが出てきた。レヴィはマツキーを見つけて何か叫んでいるけど、ヘリコプターのエンジン音がうるさ過ぎてまったく聞き取れなかった。

ギョルギョルギョルギョル・・・プッピー

ヘリコプターのエンジンが止まり操縦士も出てきた。黄色のヘルメット、黄色のTシャツ、黄色の半ズボンに黄色の靴と、上から下まで黄色づくめの操縦士は、ヘルメットを脱ぐと猿だった。

レヴィは猿と戻ってきたので、マツキーは「サルが猿を連れて帰ってきた」と、どうしても言いたい衝動に襲われたけど、ぐっと我慢して飲み込んだ。

「レヴィお帰り。さっきは何を叫んでいたんだい？　ヘリコプターがうるさくて聞こえなかったよ」

「ああ、あれは『サルが猿と帰ってきたよ』って言ったんだ。おもしろいだろあはは」レヴィが大笑いした。

「ぜんぜんおもしろくないわっ！　このボケ」猿の操縦士はあきれた顔をしてレヴィの腹に軽くパンチを入れた。

『やっぱり言わなくて正解だった』マッキーは冷や汗を拭った。

「マッキー、ひまわり農園の社長を連れてきたよ。古い友達の手長オランウータンだ」

レヴィは猿に殴られたお腹をさすりながら言った。

「はじめまして。映画カサブランカで有名なモロッコのマラケシュ市壁の町で兄、弟と三人で生花店を経営しているマッキーです。縁あって昨日からレヴィにお世話になっています。よろしくお願いします」マッキーはぺこりとお辞儀をした。

「こちらこそよろしゅおま」手長オランウータンは長い両腕を上には伸ばし、万歳をしながらぺこりとお辞儀をした。

『万歳をしながら頭を下げるとは変わったお辞儀だ。なるほど近くで見ると、黄色のTシャツの胸のところにひまわり農園と書いてあるし、よく見ると半ズボンにも書いてある』

マッキーは感心しながらポケットから名刺を取り出し、手長オランウータンに渡した。手長オランウータンもポケットから名刺を取り出してマッキーに渡した。名刺も黄色だった。手長オランウータンの名刺を見ると、会社名は『手長オランウータンひまわり農園』、肩書きは『農園主』、名前は『手長オランウータン』と書かれていた。

マッキーはぴんと閃いた。

「手長オランウータンさん、あなたの『手長オランウータン』という名前はなんとも長くて言い難いですね。僕がさっそく四股名をつけてあげましょう。ニツクネームです。テナガオランウータンを縮めてテナランタンなんてどうです？」

「テナランタン？ うーんなんだかまるで熱帯魚みたいやな」手長オランウータンは、無意識に両手をブランブラン回しながら困った顔をした。

「いっそのこともっと縮めてテナタンはどうだい？」レヴィが間に入った。「気に入った。ウチそれ気に入ったで。テナタン、うん、それでいこつ」

手長オランウータンは頭の上で拍手すると大きな歯を出して満足そうな顔をした。マッキーはテナランタンが却下されて不満だった。

「マッキー、そう不満そうな顔しなさんな。お前さんがテナランタンって言ったから俺はテナタンを思いついたんだ。テナタンは、いわばお前と俺の共作だ。この調子で仲良くやっていこうぜ相棒」レヴィは右手の人差し指を右の鼻に突っ込んで、調子に乗って左手でばんばんとマッキーの肩を叩きながらそう言うと、テナタンを連れて家の中に入っていった。

『痛いよ、レヴィ。それにしても、みっともないから人前で鼻ほじるのやめなよっていつか注意してやんなきゃ』マツキーは呟いた。

「なんだあマツキー、俺がせっかく早起きして作った料理に手もつけてないじゃないか」家の中からレヴィが大声で叫んだ。

「だって、ほうれん草でお腹が一杯になっちゃったんだもん」マツキーは言い訳しながら家に入ってしまった。

九 ノアの方舟

「かんぱーい・・・」

「・・・いやー久しぶり・・・」

「・・・今度入った営業マンときたら・・・」

「はははそれはおぬしが悪い・・・」

ここ足長は、仕事帰りの一杯を楽しみにやってくるキリンたちで今日も大いに賑わっている。

クツキーとブラツキーも、今日は足長で晩飯を済ませ、食後のコーヒーを飲んでいた。しばらくするとニツキーが現れた。クツキーはブラツキーに弟のニツキーを紹介し、ニツキーに椅子に座るよう促した。椅子に腰かけたニツキーの顔をクツキーは不思議そうな目でじろじろと見ている。

「あつ何か変だと思ったら、ニツキー、帽子はどうした？」

「兄さん、僕、もう帽子は被らない」

「そうかそれはよかった。なかなか勇ましくていいぞ」

「ほんと？ 兄さん僕の二本角勇ましく見える？」

「うん、見える見える。かつこいい」クツキーはそういうとブラツキーの方を向いた。

「ブラツキー、信じられないかもしれないけど、ニツキーはこの角が嫌で、もう何年も前から四六時中帽子を被って隠していたんだよ。いったい何かあったのかニツキー？ 僕にはニツキーが帽子を被っていないことが信じられないよ」クツキーはニツキーの角を撫でながら嬉しそうに言った。「へーそうですか、もったいない。そんな素敵な二本角を帽子で隠していたなんて」ブラツキーはニツキーの二本角をまじまじと見た。

他の足長の客たちもニツキーの頭がいつもと違うことに気づき、帽子の乗っかっていないニツキーの頭を珍しそうに眺めたり、わざわざやってき

て角を触ったりした。

「ほーカッコイイなあ」

「なんで今まで隠してたんだろ」

あっちこっちからニツキーの二本角を羨むため息が聞こえてくるので、ニツキーは誇らしいやら照れ臭いやら、だんだん居心地が悪くなってきた。「そういえば、原種はどうだった？　もしかして角はなかった？」クツキーは何か思い出したような顔をしてブラツキーに尋ねた。

「ええそうなんです、僕もニツキーの二本角を見たとき『あれっ』って思ったんです。もしかしたら原種の剥製にも二本角があったかもしれません。あまり自信はないんですが」

「原種って何？」ニツキーが尋ねた。

「ニツキー、大昔のキリンは僕のように首が長くて、マツキーのように斑模様だったそう。ニツキーみたいな角が生えていたかはわからないけど、満月の夜に吼えなかったらしい」

「・・・いったい何のこと？」

ブラツキーは、ニツキーにタテガミキリンの著書『キリンの子はキリンか』と『キリンは月夜に吼えない』の概要や自分が見た原種の剥製の話をした。

「原種がクツキー兄さんのように首が長くて、マツキー兄さんのように斑模様なら、きつと僕のように二本角のはずだよ。そうじゃなければそんな不公平だよ」

「ごめんニツキー、僕もじっくりと見たわけじゃないんだ。しかも頭はずーと高い位置にあったから、もしかしたら頭のとっぺんは見えていないかもしれない」ブラツキーはすまなそうに言い訳をした。

「ブラツキー、生きた原種は本当に絶滅したの？」ニツキーが尋ねた。

「そう、そこが実はポイントで、地球には存在しないとされている」

「それは、もしかしたら地球外には存在するってこと？」

「うん、ちよつと話は長くなるけどいいかい？　僕が最近読んだ本によると、昔はいろいろな種類の人間がいたんだそう。肌の色が白いのや黒いのやその中間や、目の色や髪の色もいろんな色の人間がいたそう。しかも顔つきや体つきもいろいろな種類があったんだそう。その違いを『人種』と言ったそう。ようするに昔は、人間にはいろんな人種があったんだそう」

「まるで僕らみたいだね」ニツキーが驚きの声をあげた。

「そうなんだ。人間といえば、多少背が高いとか低いとか、太った痩せたの違いはあっても肌や目や髪の色の違いとか、顔や体のつくりに大きな違いはないよね。これは現在の人間は長い時間をかけて人種の違う者同士をかけ合わせて作られた結果なんだ」

「なんで人間はそんなことしたの？」

「人間は大昔からずっと戦争ばかりしてきたんだ。いろいろな国のいろいろな人がいろいろ知恵を出していろいろとやってみたけれど、どうやっても戦争をなくすことができなかったんだ。結局、人種をなくすことが人間同士の争いをなくす究極の手段だったんだよ」

「ちよっと、待って」クッキーがさえぎった。

「人間の戦争は必ずしも人種間の争いだけじゃなかったはずだけど」

「そうです。国と国が戦うという戦争もあったし、民族と民族の戦争もあった。また、宗教と宗教が戦う戦争も多かった。たとえば、人間の世界にも僕たちキリンと同じように宗教がありますね。有名な太陽を神とする宗教です。僕らキリンの宗教が月を神とするのと、これも全く正反対です。でもこの宗教についても今僕が読んでいる本によると、人間の世界には、昔はいろいろな宗教があったそうです」

「太陽と月以外にも、火星とか金星とか水星とか、それとも、もつとずっと遠くの星を神としていた宗教があったということ？」不思議な話にニッキーは身を乗り出してきた。

「いや、僕らの知っている宗教とは全然別物だと思った方がいいです。クッキー先輩が言っていたように、人間の戦争というのは、人種対人種よりむしろ宗教対宗教が主だったようです。各々自分たちの宗教を信じる者同士がお互いに相手を攻撃していたということです」

「たくさんあった宗教が戦争を続けていくうちに淘汰されて、最終的に太陽を神とする宗教が勝ち残ったということかっ！」ニッキーが叫んだ。

「いや、そうではない。昔、人間の世界で戦争といったときは基本的に国と国との戦争のことでした。だけど、国の土台となるものは人間の集団であり、人間を集団化させる要素は『宗教』だったり『民族』だったり『人種』だったりしたわけです。そして、西暦2080年頃、約280年前に大きな二つの宗教上の対立が地球全体を巻き込む大戦争に発展しました。人間はこの戦争を最終戦争と言っているけど、最終的に勝利した国が圧倒的な力を持つ超大国になりました。その大国の最高権力者が後にすべての国が加盟する連邦政府の皇帝になって、この皇帝がもう二度と戦争はごめ

んだということ、その原因となった宗教を全世界から駆逐することになりました。自分の国はもちろん、他のすべての国に対しても宗教を捨てることを命じたんです。『最終戦争を制して地球の支配国になった我々も宗教を捨てるからお前たちも捨てる』というわけです。ただ、人間もキリンと同じで、宗教なしでは生きられない動物だということも事実。生ある限り死の恐怖から逃れることができないように、この世がある限り宗教をなくすことも不可能だと悟った皇帝は新しく宗教を作ったんです。それが太陽を神とする宗教です。古代より太陽を神とする宗教は腐るほどあったけれど、現在の人間の宗教はほんの260年前に当時の最高権力者が自分の頭の中で作った新しい宗教なのです。これを自分の国の宗教である国教とし、同時に他のすべての国に対して、この太陽を神とする宗教を国教とするよう命じました」

「・・・」

「それだけじゃない。同時に最高権力者は人間の争いの種はすべて取り除こうと考え、人種の壁をなくすためにすべての人間に対して同じ人種間の結婚を禁止しました」

「・・・」

クッキーもニッキーもブラッキーの突拍子のない話に驚いて声も出なかった。

「ところが、話はこれで終わらない。すべての国が古い宗教を捨て、単一人種化への道を歩むはずだったけど、命令に従わなかった国があったんです」

「それは当然だ。僕がもし人間だったら絶対にそんな命令に従わないよ」クッキーがそう言うと、ニッキーもうなずいた。

「それで命令に背いた国はどうなったの？」ニッキーが心配そうに身を乗り出して尋ねた。

「地球から追放された」

「えー！」クッキーが叫んだ。ニッキーは驚きのあまり椅子から転げ落ちた。

「正しくは地球から出て行きました。人口は極々少ない小さな町にも満たないような小国だけど、国民が地球から出て行きました」

「そして、彼らはいったいどの星に行ったの？」テーブルの下からニッキーが尋ねた。

「地球を捨てた彼らがどこに行ったのかは不明なんだ。そして実はこれが

また重要なことなんだけど、彼らは地球から出て行くとき、地球上のありとあらゆる物を持っていったんだ。もちろん動物も植物も考えられるものすべて持ち出した」

「その話はどこかで聞いたことがあるよ。たしか何千年も昔の伝説だったと思うけど」

「クッキー先輩、それは『ノアの方舟』という古い伝説です。もっとも、これは大きな方舟を作ってたくさんの動物と一緒に大洪水から生き延びたというお話ですが」

「ブラッキー、君がさっき僕らキリンの原種が地球にはいないとあえて言ったのはそういうことだったのか」合点がいったとばかりクッキーは右前足でテーブルを叩いた。

「はい、長い話になって申し訳なかったです」

そう言うときブラッキーはコーヒード喉を潤した。

「地球から出て行ったその国の人はどういう人種だったの？ 肌の色は白かったの？ 黒かったの？」クッキーが尋ねた。

「肌の色でいえば、今現在地球にいる人間とはまったく違います。牛乳のように真っ白だったそうです」

「あっ」ニッキーが叫んだ。

「乳豊関」クッキーが叫んだ。

十 脅迫

「乳豊関って僕らの四股名をつけてくれた力士ですね」ブラッキーが尋ねた。「うん、僕ら兄弟の四股名をここでその場で作ってくれた人です。今日はキリン三兄弟のテーマ曲まで作ってくれました」ニッキーが嬉しそうに報告した。

「テーマ曲？」クッキーが驚いた。

「僕もさっき乳豊関の家で聞いてきたばかりです。今日は兄さんにそれを報告しに来たんです」

「変わった力士ですね」ブラッキーも乳豊に興味をもったようだった。

「うん、とにかく変わった力士さ。肌はそれこそ牛乳のように白いよね、ニッキー」

「はい、胸の膨らみ方も尋常じゃなかったです」

「そんなに肌が白いんですか？ 是非会ってみたいな」

「いつでも紹介します。もしかしたら、外で僕らの会話を聞いているかも知れませんか」ニッキーはドアの方をちらりとみた。

「ははは、大いにあり得る。振り向くとそこにいたりして」そういうとクッキーは後ろを振り向いたが、もちろんそこに乳豊はいなかった。

「ブラッキー、僕は原種の剥製を是非見てみたい。この目で二本角があるかどうか確認したいんだ。どこに行けば原種の剥製を見ることができるの？」

「ニッキー、大事なことを言うのを忘れていた。原種の剥製のことはどうか忘れて欲しい。と言っても無理だろうからここだけの話にして欲しい。誰にも話さないで欲しいんだ」

トンつとクッキーが何かを思い出したようにテーブルを叩いた。

「それはどうして？ そういえばブラッキーは僕にも原種の剥製のある場所は知らないほうがいいって言ってたよね。どうもタテガミキリンの本が国内で手に入らないことと関係がありそうだけど」クッキーはブラッキーの目を見ながら言った。

「クッキー先輩、実は僕、どうも何者かに狙われているようなんです」ブラッキーはしばらく言うか言うまいか考えていたが思い切って話すことにした。

「狙われているって、どういうこと？」クッキーの表情は一変して強張った。

「キリンの歴史についてほじくり返すなという脅迫文がありました」

「脅迫文？ それはいつ？」

「2か月ほど前のことです。たぶん、原種が3歳程度の知能しかない低能な動物だったということを隠しておきたい奴だと思っています。タテガミキリンの説を信じたくない人でしよう。そういう話も聞いています」

「3歳程度の知能？」クッキーとニッキーは驚いて顔を見合わせた。

「人間が単一人種政策を推し進める前の時代まで、西暦2100年頃までの話です。僕らキリンのご先祖様に限らず、ゾウや熊、ライオン、カバその他もろものご先祖様たちもそろって犬・猫・牛と同じように低能動物だったそうです」

「犬や猫って、それじゃまるで僕らのご先祖様はペット並みの知能しかなかったってこと？」ニッキーはまた椅子からずり落ちそうになった。

「そうです。人間は放っておいたら絶滅の恐れがある動物を27種類選び、

人工的に繁殖させることにしたんです。僕らキリンのご先祖様もその27種類の中に入ったということです」

「なるほど、人工繁殖中に遺伝子操作をされて知能が高くなったということか」クッキーはうなずいた。

「だけどなぜ、何のために高度な知能を授けたのだろう。その話が本当だとすると、恣意的にいじくったということだから、むしろ絶滅種の保護という目的を大きく逸脱している」

クッキーの話に今度はニッキーがうなずいた。

「そうです、中にはカラスのような鳥類もいますが、27種はほとんどが大型の哺乳類で、それは本当に大きかったです。僕らや象なんか今の何倍も大きかったようです。確かにクッキー先輩のいうように、原型を留めていないのですから、繁殖とはいえません。むしろ明らかに小型化を目的にしていました」

「原種は僕らより大きかったの？」ニッキーはきちんと座りなおすと質問した。

「剥製を見て腰を抜かしました。もうそれは凄く大きかったです。僕らの身長のように3倍はありました」

「さ、3倍！」ニッキーは今度は飛び上がって驚いた。

「現在のキリンの身長の平均は170センチですが、当時の原種の身長は5メートルくらいあったといいます。ですからやっぱりちょうど3倍です。ですが、驚くことに身長の半分近くは首です。首が異様に長いのです。頭部の大きさは僕らの2倍くらいあったでしょう。したがって僕らの身体は凄く小型になったのです」

「なぜ人間は僕らキリンを小さくしたの？」ニッキーは興奮して立ったまま聞いた。

「小型化すればそれだけ食料の量も減らせるからね。当時は世界戦争の後で、地球全体が汚染されていて、とにかくあらゆる動物が飢えていた。食料の量もごくごく限られていたし、そういう状況の中で生き延びるようにするために、少ない食料で生きられるように小さく改造するという目的は合理的だったといえるでしょう」ブラッキーはコーヒーを一口飲むとさらに続けた。

「それと、これが本当の目的のようですが、人間が便利に使えるようなサイズにしたかったようです。僕らの平均身長の170センチというのは、人間の平均身長とほぼ一緒です。ゾウや熊なんかも今よりずっと大きかつ

たですが、今はやはり、ほぼ人間と同じ身長でしょう」

「この話が本当だとすると、人間って本当に勝手な動物だね。自分たちが勝手に地球を汚しておいて、困った挙句に自分たちの都合で僕らを作り変えたっていうことでしょ？」

ニッキーの話にブラッキーはうなずくと、コーヒーのお替りを注文するためにウェイトレスを呼んだ。

「コーヒーをブラッキーで、もといブラックで」

「ははは」

「ははは」

ブラッキーがトイレで席を立っている間、クッキーはしばらく頭の中を整理していた。

「犬・猫・牛は今でも低能動物だっていうことは、彼らは27種類の中に選ばれなかったということだよね。なぜだろう？」ブラッキーが戻るなりニッキーは質問した。

「犬や猫はペットとして、牛や豚は食糧として各々大昔から人間と深い関係にありましたし、それ以外の役割は期待されなかったのです。人間は肉食動物ですから、肉食用に繁殖させた動物も数多くありましたが、人間は知能の高い動物を口にするには抵抗があるので、牛や豚は、人間が食べて食糧にしておくために高い知能を与えなかったのです。反対に僕らキリンや象やゴリラ等々27種の動物は、ある程度高い知能を有していたので人間は僕らを保護したのです。僕らを人間とコミュニケーションが可能なレベルの動物に改造することで、家畜レベルの動物には考えられない高度な仕事をさせようという魂胆があったようです」

「自分勝手な人間のせいで僕らはこんなにいろいろな種類がいるということ？僕のように首が長いや、マッキーのように斑模様なのや、ニッキーのように角があるのや、ブラッキーのように黒いのや、茶色や白いのや黒白ブチや足が長いや少し大きいや小さいのやエトセトラエトセトラ」今度はクッキーが口を開いた。

「犬を見てください。犬は元はただ一種類だったと考えられています。何千年という長い間人間に飼われている間に狼等の種類的に近い色々な動物と掛け合わされてあれほど多品種な動物になったんです」ブラッキーはそう言うと、コーヒーを口にした。

クッキーは黙ってブラッキーを見つめていた。ニッキーは黙ってテーブルのコーヒーを見つめていたが、思いつめたような表情でブラッキーの方

を向くと質問した。

「ブラッキーを脅迫しているのはいったい誰なの？」

「わからない。この話はこれっきりにしましょう。僕も調子に乗ってしゃべり過ぎました。少し後悔しています。あなたたち二人を巻き込みたくないですから」

夜も更けて賑やかな足長の店内だけど、3人のテーブルだけは重い空気が漂っていた。

十一 伊勢正三

さて、三兄弟の真ん中のマッキーに話をうつすと、今日はシチリア島に来て二日目。この日、昼前にレヴィからひまわり農家のテラタンを紹介された。そこから話を始めよう。

さっそくマッキーは、テラタンのひまわり農園を見学することになった。2人乗りなのにマッキー、レヴィ、テラタンの3人が乗りこんだから、ヘリコプターはすし詰め状態だ。

パラパラパラパラ・・・

レヴィの家からヘリコプターは北東に向かった。10分もしないうちに遠方にひまわり畑が見えてきた。まるで緑色の大海原がずんずん近づいてくるようだ。

「ほうら、見えてきたで。なかなか壮大な眺めでっしやる。ウチとこの畑は月からでも確認できるんや。東京ドーム何個分とかのレベルじゃないんやで」

「ひまわりといえば僕にとってはイタリアだけど、ボローニャにまで行く必要は本当になかったんですね。シチリア島にもこんな広大なひまわり畑があったなんて！」マッキーは初めてのヘリコプターということもあって、上空から広大なひまわり畑を見てすっかり興奮してしまった。

「あとで降りてからよく見てもらうけど、ウチとこのひまわりは無農薬有機栽培だからたくさん虫がついているんや」

「む、虫ですかっ！」マッキーが驚いて叫んだ。

「そうや、あんさんとこはひまわりを観賞用として販売したいそうやけど、基本的にひまわりは食用やからね。虫がたくさんつくのは美味しくて栄養豊富な証拠なんや。確かにボローニャは全体としてみれば世界一のひまわ

り産地かもしれんが、企業単独でみれば食用ひまわりのシェアはウチとこが世界ナンバーワンや」

「ひまわりって美味しいんですか？」

「マッキー、今朝せっかくお前さんに食べさせてあげようと思ってひまわりの煮付け作ったのに、お前さん食べてなかったもんな」レヴィががっかりした声でいった。

マッキーは今朝テーブルにあつたいろいろな料理を思い出した。

「ああ、初めて見る料理①のことだね。見たことのない軟らかい野菜が入っていて少し酸っぱい匂いがした、あれだね？」

「うんそうだ、美味しいぞ」

「ごめんね、せっかく作ってくれたのに。帰ったら食べるよ」マッキーは申し訳なさそうにレヴィに謝った。

ちょうどひまわり畑の真ん中あたりまで来たので、テラタンはヘリコプターを地上から約200mの空中で停止させた。ここから下に広がる畑を見ると、前後左右東西南北あたり一面見るものすべてがひまわりで、マッキーはあらためてその広大な畑とそこに整然と美しく育てられているひまわりのなんともいえない健気なさまに感動した。

「今は6月だから緑一色だけど、あと1か月もすればみるみる黄色と緑の世界に変わるんや。何時間見えていても飽きないそれはそれは見事なひまわりワールドやで」

マッキーはテラタンの話を聞きながら、この元気一杯のひまわりが一斉に黄色の花を咲かせた世界を想像して興奮していたが、ふと我に返って心配になってきた。

「とりあえず、今年は初めてなので多くてもコンテナ一台分くらいの買い付けのつもりだったんだけど、このスケールを見たら・・・」

「おう、そんな全然構わないで。コンテナ一台でもリヤカー一台でも。ウチとこはキロ売りもしとるんや。季節になると毎日朝から長蛇の列や。サルヴァトーレなんて『5百グラムくれ』なんて威張って買っていくんや。ぐふいふいーふいふい」テラタンは下品な声をあげて大笑いした。レヴィも照れ笑いをした。

「それを聞いて安心しました」マッキーはほっと胸を撫で下ろした。
「じゃあ今度は降りて現物を見てもらいまひよ」

3人の乗るヘリコプターはゆっくりと北東に向かって進んでいった。
パラパラパラパラ・・・

しばらくして3人を乗せたヘリコプターが農園事務所前に着陸した。マツキーとレヴィは先に降りて事務所前でテラタンを待った。

♪ きみとーあるいたせいしゅんがー ♪

ヘリコプターに乗っているときは聞こえなかったけど、農園では音楽が流れていた。いたるところにスピーカーがあるらしく、あちからもこっちからもゆらゆら大地を這って音楽が聞こえてきた。その心地よいメロディ、リズム、音質、音量は三半規管を刺激し、目をつぶると1秒も立っていられないような気にさせるほど平衡感覚を狂わした。

マツキーはしばらく耳を澄まして聞いていた。日本語の歌ということだけはすぐわかったけど、マツキーには初めて聞く音楽だった。ヘリコプターのエンジンが止まり、操縦席から降りてきたテラタンにマツキーはさっそく尋ねた。

「初めて聞く歌だけど誰のうた？」

「正やんや」

「しょうやん？」

「そうや、正やんや。伊勢正三いえばわかるか？ わからんか？ かぐや姫は知ってるか？ 神田川のかぐや姫や。神田川を歌ったかぐや姫のメンバーだった伊勢正三が正やんや」

「神田川は聞いたことあります。古い歌ですね」

「うん、古い。正やん言うたら大昔の人や。でも古くてもなんでも正やんがいいんや。ひまわりは正やんが好きなんや」

「ひまわりに聞かせているの？」

「当たり前や。ひまわり畑にひまわりの他に何がいる。正やんの歌聞かせるとひまわりは喜ぶんや。嘘じゃない、ほんまやで」

「花が音楽聞くのは本当です。僕の店でも毎日『お花の増産』っていう曲を流しています」

「そうや花は歌が好きなんや。ウチとこのひまわりは正やんの歌が大好きなんや。とくにこの時季は正やんの歌がええ。ウチは農薬はもちろん化学肥料も一切使わん。使うのは音楽だけや。しかも音楽いうても正やんとJ・Tだけや」

「正やんとJ・Tですか。J・Tってなんですか？」

「J・Tいうたら、ジェームス・テラーや」

「ジェームズ・ディーンと関係ありますか？」

「ジェームズ・ディーンと関係あるかどうかはウチも知らんが、とにかく

J・Tや」

「女性の歌は喜ばないんですか？」

「全然だめやね。だめに決まってる。ひまわりは女だからね。男がいいんや。男の声が好きなんや。それも優しい男の歌声が好きなんや。歌の上手い下手じゃない。そりや上手いにこしたことはないけど、上手くなきやだめいうたら正やんが大好きというのと辻褃合わん。何しろ正やんは特別歌が上手いわけじゃないからね」

テラタンというお猿さんとはとてもお喋り好きらしく一度口をあけたらもう誰も止められないという感じで次から次と言葉を発した。しかも、しゃべりながら首を左右に傾けたり、肩や腰を回したり、両手も頻繁に動かして、とても表情が豊かで見ているだけで楽しくなってくる。テラタンは、とりあえず歩きながら話をしようと言い、ひまわり畑に向かって歩きました。マツキーはテラタンの後を追った。

「優しい男の声、これが一番のポイントなんや。感性はそりやもう鋭い。歌聞けば優しい男か分かるんやね、ひまわりは。正やんが優しい男だったかどうかは、そりや今となつては分からんよ。でもひまわりが惚れ惚れ聞いているんやから優しい男だったに違いない。何しろ人を見分ける能力にかけては人間はもちろんどんな動物だってひまわりにはかなわん。バッハ、モーツアルト、ショパン、グリークいろいろクラシックも聞かせたし、ガーシュイン、ビートルズ、美空ひばり、フランク・シナトラ、井上陽水とか、とにかく古今東西の名曲をいろいろ試してみたけど何を流してもひまわりときたら『音がしてますが何か？』てなもんよ。ひまわりはそれは憎たらしいくらい感心を寄せなかったね。まったく見向きもしない。それがどうよ、たまたまウチの事務員が正やんの歌をスピーカーから流してもうてね。たまげたね。実にたまげた。ひまわりというひまわり、大地という大地、大地に流れる風という風がざわざわしだしたよ。大袈裟やないで、世界が興奮しているって感じや。ウチ何事かと思つたね。そしてしばらくするとシーンと静まりかえりよつた。ひまわりに近寄ってみてびっくりよ。ひまわりがどれもこれもそーと聞き耳立てとるんや。うっとりした顔してね。嘘やないで、ウチにはひまわりが何考えてるのか手に取るようにわかるんや。広大な畑一面すべてのひまわりが正やんの歌に聞き惚れてたんや。ウチは目から鱗の指パッチンさ。それからというものの正やんみたいに優しい男の歌を集めて片っ端から流したんやね。でも結局のところ正やん並みに反応したのはJ・Tだけやつた。でもこれは企業秘密やで。誰にも言う

たらあかんよ。ウチとこのひまわりが栄養一杯で美味しいのは実は正やんとJ・Tの歌をふんだんに聞かせているからや。あんたサルヴァトーレの友達やと思って教えたんやで。絶対誰にも言うたらあかんよ、ええな」

「そりやあもう何があつても正やんとJ・Tが食用ひまわりの発育にすこぶる調子がいいなんて決して誰にも言いません」マッキーは右前足を立ててテラタンに誓った。

一曲終わると次の曲が、それが終わればまた次の曲が。農園には絶え間なく正やんの歌声が流れる。

♪ 花びらが散ったあとの、桜がとても冷たくされるように ♪ 『ささやかなこの人生』より…詞・曲 伊勢正三)

これから大きな花を咲かせようというひまわりさんたちをまるで弱気にさせるかのような歌詞が流れているけど、ひまわりさんたちはまるでどこ吹く風と一緒に歌を口ずさむようにのびのびと無邪気にそよ風と戯れていた。

「どうも、ひまわりさんたちは歌詞までは理解できないようですね」マッキーが得意げな顔で言った。

「マッキー、ひまわりはちやーんと歌詞を理解してるんやで。歌詞の上っ面しか聞いてないのはむしろあんたや。ひまわりをなめたらあかんで」

♪ 風よ季節の訪れを告げたら寂しい人の心に吹け ♪ そして巡る季節よその愛を拾って終わりのない物語を作れ ♪ 『ささやかなこの人生』より…詞・曲 伊勢正三)

「どうや、素敵な歌やろ。ロマンチックやろ。ひまわりはロマンチックな歌が好きなんやで」

なるほど正やんの歌は胸に響くとマッキーも感心した。そして、もつといろいろな正やんの歌を聴いてみたいと思った。

「テラタン、僕も正やんの歌のファンになりそうです」

「そうやろ、正やんは最高やで。よっしやあ今回はひまわりコンテナ1台に特別に正やんのベストアルバム1枚お付けしまひよ」

「ほんとですかっ？」

「ああほんまや。嘘やおまへん。そんじやあさっそくウチの自慢のひまわりをよーく見てもらいまひよ」

テラタンは、ひまわり畑に着くと一番前列のひまわりを1本引っこ抜いた。

「まだ2メートルちょっとや。あとまだ1メートルは伸びる。ほれ見てみ

い。こんなにたくさんのアブラムシのつくひまわりは世界中どこ探したってないんやで」

テラタンはひまわりの茎をしごくようにしてアブラムシを取ってマッキーに見せた。

「テラタン、僕はアブラムシを害虫だと思ってました」

「マッキー、あんさんはどうも物事の上っ面だけしか見ない癖があるな。世の中に害虫も益虫もないんやで。ひまわりの師管液を吸う虫がいればその虫を食べる虫もいる、さらにその虫を食べる動物がいればその動物の死骸を栄養にするバクテリアもいる。そしてそのバクテリアから栄養もらうひまわりがいる」

「食物連鎖ですね？」

「そうや、この一見美しい世界も実は弱肉強食の世界なんや。でもそれは悪いことでも何でもない。ごくごく当たり前の話や。ウチもあんさんもレヴィもみんな食物連鎖という世界の中で生きているんや。鎖はどこを切ってもこの世界は成り立たなくなるんやで。植物はもちろん動物にだって役割つてもんがちゃんとあるんや。突き詰めればそれが生きている理由や。害虫だ益虫だなんていうのは傲慢な人間が考えた言葉や。人間は自分たちだけ一人違う世界に住んできると勘違いしてるけど、人間だってこの世界のほんの一部に過ぎないんやで。あんさんの発想は人間の発想と変わらん。人間に毒されてるぞ。そう自覚して反省せなあかんよ」

「はい、たしかにそうです。反省します。ですが、はつきり言ってこのアブラムシ付きひまわりじゃあうちでは商品になりません」

「そりやそうや。そんなの百も承知二百も合点や。収穫後一本一本きれいに洗淨して出荷するから心配いらへんよ」

「なるほどそうですか」

マッキーはそれを聞いて安心した。

テラタンは一度引っこ抜いたひまわりを畑のもとあつた場所に埋めて戻した。

「それはそうとレヴィはどこいるんだろう」マッキーはあたりを見回したがレヴィの姿はなかった。レヴィは事務所前のベンチに座っていた。きつと二人が戻ってくるのを待っていたのだらうと、マッキーがそばに駆け寄ってみると、レヴィは右手の人差し指を右の鼻の穴に突っ込んだままグーグーいびきをかいて寝ていた。

「今朝は僕の料理を作るためにいつもより早起きしたから眠いんだらう」

「サルブアトーレはいい奴や。本当に人間には珍しくいいやつや」
マツキーはテラタン言葉にうなずいた。

♪ あなたが船を選んだのは私への思いやりだったのでしょか♪
別れのテープは切れるものだとなぜ気づかなかったのでしょうか♪
『海岸通』より…詞・曲 伊勢正三

農園にはちよつぱり寂しいメロディが流れていた。

十二 一人芝居

マツキーがテラタンとひまわりの売買契約を済ませると、レヴィは待つてましたとばかりに今度はマツキーを野外劇場に連れてきた。

「おお、あなたが噂の『物真似キリン』ですか！ 町中あなたの『一人ニユー・シネマ・パラダイス』の話でもちきりですよ」

マツキーは初対面のヒグマにいきなり『物真似キリン』と呼ばれ、内心失礼な奴だなど思ったが、そこにすかさずレヴィが間に入った。

「マツキー、紹介しよう。彼はこの野外劇場の支配人の白靴下赤ヒグマさんだ。白靴下赤ヒグマさん、マツキーは『ニユー・シネマ・パラダイス』のほかにもいくつかレパートリーを持っているんですよ」

「はじめまして、白靴下赤ヒグマさん。『物真似キリン』のマツキーです」
マツキーは嫌味たつぷりな挨拶をした。

「こちらこそよろしく願います」野外劇場の支配人の白靴下赤ヒグマは、赤い毛のヒグマだけど、まるで白い靴下を履いているかの様に、前足と後ろ足の足首から先の部分が白かった。彼がその白い右前足を差し出すと、マツキーも右前足を出してお互い握手（足）をした。この赤ヒグマの支配人は鈍いのか人がいいのか、マツキーがむつとしていることに全く気がつかないようだった。

「ところでシロクツシタアカヒグマとはなんとも呼びづらい名前ですね。僕がよい四股名を考えてあげましょう。」

四股名の提案は今やマツキーの癖になっていた。

「しこなですか？」ヒグマの支配人はいぶかしげな顔をして尋ねた。

「ニククネームのことです。シロアカグマはどうですか？」

「シロアカグマですか。確かに短くなりましたが・・・シロアカグマねえ。どうなんでしょうか？」

「気に入りませんか。ではロクタカマはいかがですか？」

「ロクタカマ?! ロクタカマと呼ばれるのですか、私？」

「だめですか。じゃあこれはどうでしょう、シクアヒマ」

「し、シクアヒマですかっ!」ヒグマの支配人は後ろに倒れそうになるほどのけ反って驚いた。

「マツキーさん四股名はどうしても必要でしょうか。私の慣れ親しんだ名前シロクツシタアカヒグマじゃだめなんでしょうか？」

ヒグマの支配人はなんだか悲しくなっただけ今にも大粒の涙がこぼれ落ちそうな目で訴えた。

「うーん、なかなか気に入ってもらえませんか、困った人だ」

マツキーは口の中で四股名の案をぶつぶつ言いながら考えていた。

「なあマツキー」レヴィが口を挟んだ。

「支配人じゃだめか？」

「支配人？」

「うん、白靴下赤ヒグマさんの四股名は支配人じゃだめか？」

「そう支配人です。皆さん私のこと支配人と呼びます。私の四股名は支配人がいいです」白靴下赤ヒグマは白い前足で合いの手を打って喜んだ。

「支配人じゃあまったくそのままじゃありませんか。名前と関連はないし」マツキーは思い切り不満そうな顔をした。

「そう言うなマツキー、本人がいいって言うてるんだからそうしよう。なあ支配人」

「はい、マツキーさん、私の四股名は支配人をお願いします」

マツキーは渋々承知した。テラタンときもそうだったけど結局最後はレヴィの案に落ち着いてしまい、なんだかレヴィに美味しいところを持っていかれてばかりいるような気がしてマツキーは面白くなかった。

「さて、私の四股名も決まったことですし、マツキーさん、さっそくですが今晚6時からの回に出演願いたいのですが」

「いいでしょう」マツキーは二つ返事で承諾した。

マツキーは今日から1か月の間、午後と夜の1日に2回、一人芝居を演ずることをシチリア島の野外劇場『アズズロ』と契約をした。

野外劇場『アズズロ（『青空』という意味）』は古代ローマの遺跡のコロセウム（円形闘技場）をずーと小さくしたような代物だった。二千人収容できるというから、天井の開いたサーカスのテントを想像するとわかり易いかもしれない。

さて、6時からあの『物真似キリン』の演技が見られるという噂はあつたという間にシチリア島の隅々にまで広まって、30分前の開場時には直径50mの劇場の周りを人の列が4重にも5重にも取り巻いていた。そして開演の時間、ちょうど真つ赤な太陽が夕焼け雲を道づれに西の海に沈みきつた頃、すべての観客が待ち焦がれていた美しい斑模様キリンが舞台の袖口からすたすたと現れた。ステージの中央には小さなちやぶ台がひとつ置いてあるのみ。

「カツオあんたの仕業でしょう？」

「違うよ、姉さんはいつも僕のせいにする」

「サザエが疑うのは無理もない。カツオ、疑われるのはお前の日頃の行いが悪いからだ」

「そんな、お父さんまで」

観客はてつきり『ニュー・シネマ・パラダイス』が見られるものと思っていたから突然始まった『サザエさん』に皆一様にとまどった。

「カツオ兄ちゃんじゃないでちゅよ」

「あらまあタラちゃん、もしかして見てたの？」

「はい見てましたでちゅ」

♪ ちやらちやらりん
♪ ちやらちやらりん
♪ ちやらちやらりん

観客がとまどつてもなんでもまったく関係なく、マツキの演技はますます熱を帯びて、挿入曲まで丁寧に再現しながらマツキの『一人サザエさん』は第二話へと続いた。

「おいワカメ、絶対に姉さんには内緒だぞ」

「待ってよお兄ちゃん」

「あれ、カツオくんこんな時間どこに行くんだい？」

「あ、マスオ兄さん、ちよつと駅までお父さんを迎えにね」

一話あたりの時間は10分にも満たなかったが、マッキーは立て続けに6話繰り出して観客を圧倒した。サザエさんをはじめとする登場人物一人ひとりの人物描写や声帯模写を完璧に演じ分けるマッキーの演技力に観客の目と耳は釘付けになり、たわいのない家族の会話の中で笑うべき箇所では大いに笑い、感動すべき場面ではハンカチを涙で濡らしてきつちり一時間で終了した。

[illegible]

ージを降りるとさっさとレヴィと裏門から帰ってしまった。観客はマッキーが帰ってしまったと聞いてがっかりしたけど、それでも皆大いに満足して帰路に着いた。マッキーの一人芝居の初日は大成功で幕を閉じた。

十三 神

「ごつつあんです」

「はい」元氣な声がして、しばらくするとドアが開き乳豊が顔を出した。

「やあニッキー、今日はクッキーと一緒に。あれ、もう一人は・・・」

ニッキーは乳豊にブラッキーを紹介し、ブラッキーがなぜ乳豊に興味をもったのかを説明した。ニッキーの話を聞くと乳豊は一瞬固い表情を見せた。

「まあせっかく遠いところを来てくれたんだから、あがつてお茶でも飲んでいってください」

乳豊は3人を自宅に招き入れた。よく冷房の効いた部屋で、彼はハードロック・カフェのTシャツを着ていたけど、下はまわし一丁という相変わらず変な格好だった。

ブラッキーはお茶を注ぐ乳豊のその異様に白い手の甲や首筋やおでこを見つめていた。乳豊は自分を見つめ続けるブラッキーの目に気づかない振りを続けていた。

「君たち古い映画や写真を見たことがあるだろう。昔はこの地球に住む人間の4人にひとりは僕みたいに、たぶん僕と同じくらい白い肌の人間だったんだよ。それは知っているよね」

そう言う乳豊は立ち上がり本棚から一冊の本を取り出してニッキーたちの前においた。

「人種の時代」ニッキーが本のタイトルを読んだ。

ブラッキーは本を手にとりぱらぱらとページをめくった。ページとページの間から古い本独特のかび臭い匂いがした。

「僕の両親の肌の色は褐色で普通の人間と何ら変わらないし、3人いる姉弟の肌の色も普通だ。僕のこの肌の白さは突然変異なんだ。僕は正常な人間じゃないということさ」

「どすこい、乳豊関に大昔の白人の血が流れているのなら、あり得ることじゃないんですか？」

「いや、クッキー、違う。現在生きている人間の少なくとも5世代から6世代前の祖先は皆遺伝子操作を受けているから、僕のような白い肌の人間が生まれることは通常あり得ない。突然変異の範疇になる」

ブラッキーは本から目をあげ、まじまじと乳豊の顔を見つめた。

「僕は生まれたのは人口惑星だけど、この白い肌のせいで、出生後すぐ地球に送られた。両親や姉弟たちに初めてあったのは3歳の誕生日で、それまで僕はアンドロイドに育てられた。僕は3歳までアンドロイドを両親だと思っていた」

「それじゃあ乳豊関は障害者の扱いを受けて育ったということですか？」
ブラッキーは驚いた。

「うん」乳豊がうなずいた。

「それにしても、ブラッキーは人間のことに詳しいねえ」乳豊は感嘆の声をあげた。

「いいえ、そんなことはありません」ブラッキーは首を横にふった。

「ところで地球全体が保護対象となっている現在、地球に住むことができ
る人間は特権階級と一部の高齢者と障害者だけだということは知っていたかい？」

乳豊が3人のキリンに尋ねると、ニッキーとクッキーは「知りませんでした。初めて聞きました」と答えたが、ブラッキーは黙っていた。乳豊はぐいとお茶を飲み干すと軽く深呼吸をしながら、自分がこれから話そうと考えていることを頭の中で整理した。

「それじゃあ、人間と地球の関係を説明しよう。地球の50億年という長い歴史の中でみれば、ほんの瞬きの瞬間に人間は現れて母なる地球を回復不能という状態にまで汚しきった。現在、連邦政府は、この地球を『10万年かけて18世紀の環境レベルに戻す』としている。だから、基本的に僕らの生活スタイルは、西暦1750年頃のヨーロッパを模範としているんだ。モーツァルトが生まれた時代だね。人間は産業革命から最終戦争までのたったの300年間に地球を徹底的に破壊しつくして、10万年かけて元に戻す努力をしているわけだけれど、実際のところ、もはや地球を人間が誕生する以前に戻すことは不可能と考えられている。ところで、地球に住んでいる人間は全体からするとほんの一部に過ぎない。高級官僚をはじめとする特権階級と老人の一部と障害者だけで、人間のほとんどは月や火星や人口惑星に住んでいる。その中でも特権階級は特別で、スーパークラスは親子2代、場合によっては親・子・孫の3代での地球生活も認めら

れているし、高級官僚にいたっては実態は世襲化しているから5代、6代と地球に住み続けている例も珍しくない。地球に住むことができるのは、極限られた人間で、地球に住めるということは、それこそ人間社会の中では最高のステータスだ。高齢者が地球に住めるのは現役時代の社会貢献に対するご褒美だ。だけど、年老いたら誰もが地球に住めるというわけじゃない。現役時代に多大な功績のあった者とその配偶者に限られている。この老人には一人につき身の回りの世話をするアンドロイドが一体あてがわれ、死ぬまで面倒みてもらうことになる。アンドロイドは見た目は人間とまったく区別がつかないから君たちの知っている人間の中にもたぶんアンドロイドはいると思う」

クッキー、ニッキー、ブラッキーの3人の視線を感じた乳豊は、はははと笑った

「もちろん僕はアンドロイドじゃないよ」

クッキー、ニッキー、ブラッキーの3人は頷いた。

「さて、障害者が地球に住めることについては少し説明が必要かもしれない。地球に住める障害者は先天的な障害者に限られているんだ。先天的な障害については確率の問題と考えられているから、実は誰がなってもおかしくないし、健常者にしてみれば、自分が健康なのは代わりに障害を負ってくれた人がいてくれたおかげということもできる。ようするに障害者が地球に住めるというのは、障害者に対するこれもご褒美なんだ。千人の健常者は、自分たちの代わりに障害をもつて誕生してくれた1人に感謝しなければならぬということなんだね。ご褒美というより謝礼と言った方が適切かな。だから先天的な障害者はそれこそ誰よりも大切に扱われるべきだとして、生まれてからしばらくは地球で大事に育てられる。僕のように夫婦のアンドロイドにそれこそ宝物を扱うように育てられる。しかもこのアンドロイドは最高級品、最上ランクのアンドロイドだ。そしてある程度手のかからない年齢になると、本当の両親や兄弟が地球にやってくる。障害を持った子供を生んだお陰で両親や兄弟もしばらくの間地球で暮らすことができる。障害を持った子供の家族も大切に扱われるんだ」

「ちよっとすみません」ブラッキーが乳豊の話しをさえぎった。

「乳豊関、質問していいですか？」

「ああ、ごめん、あんまりいっぺんに話したから君たち頭の中が混乱したろう」

「はい。初めて聞くことばかりで驚いています。遺伝子操作技術について

は僕も大学である程度学びました。たとえば、僕らキリンは人間の遺伝子操作技術で知能を与えられた動物だということも僕は知っています。僕は人間の高度な技術をもってすれば、先天的な障害者をゼロにすることは可能だと思うのですがいかがでしょうか」

「できない。と言うより、しないと云った方が正しい。仮に先天的な障害をゼロにすることが技術的に可能になったとしても、人間はその技術を使うことはしない。先天的な障害や突然変異の可能性をゼロにすることは、進歩の可能性の芽を摘むことに等しいからね。」

「どういうことですか？」ブラツキーは乳豊の話を一言も聞き逃すまいと身を乗り出した。

「人類の進歩の歴史は突然変異、わかりやすい言葉で言えば『天才』が作ってきたと考えられている。たとえば20世紀の科学者アインシュタインを例にとれば、彼など典型的な突然変異だ。今ではアインシュタイン級の天才は約10億人に一人の割合で誕生することがわかっている。ニュートンやジョン・ロック、シェイクスピアやドストエフスキー、モーツアルトやダビンチ、古くはキリストやプラトンもアインシュタインと同じ10億人に一人の天才だと考えられる。すなわち人類の歴史とは10億人に一人の天才が彼らの生きる時代を大きく転換させて作りあげてきた歴史なんだ。凡人が10億人いても人類の進歩と呼べるような変化を起こすことはない。せいぜい戦争をして本能的に優性遺伝子の繁栄と保存に励むのが関の山だ。ただ戦争は、それ自体は悲惨だし、多くの悲劇もあり、単純に肯定することはできないけれど、それが動物の本能であることは否定できないし、戦争をくり返してきたその結果として人類が進歩してきたことも否定できない。ようするに、人類の歴史とは10億人に一人の天才と、その他圧倒的大多数の凡人がくり返し戦争を続けてきた中で築き上げた歴史なんだ。僕たち一人ひとりとは凡人に違いはないけれど、僕らが10億人集まるとその中にきつと歴史を変える才能をもつ突然変異が一人存在するんだ。僕自身はやっぱりただの凡人に過ぎないけれど、もしかしたら僕の子が、子でなければ孫が、孫でなければ何代か後の僕の子孫に10億人に一人の天才たる突然変異が現れるかもしれない。そして、同じような確率で先天的障害者たる突然変異が生まれるかもしれない。そして、この可能性は誰もが等しくもっているんだ。すべての人類が等しく公平にもっている可能性なんだ。そしてだからこそ、先天的な障害をもって生まれてくることを僕らは確率の問題と言っているんだ。人は皆、人生の中で一度は自分

はいったい何のために生まれきたのかと悩んだりするけれど、実はすべての人間は、ただ単に生まれてくるために生まれきたんだとも言える。一人ひとりの存在そのものが実は人類の大いなる可能性の結果なんだ。たとえば言うのと、人間一人ひとり一枚のカードだ。裏向きのまま山積みとなっているカードの中の一枚のカードだ。ほとんどのカードがハートの2だったりスペードの8だったり平凡なカードだけど、山の中には障害者たるスペードのAもあるし、アインシュタイン級の天才たるジョーカーも入っている。それは山のままでわからない。とにかく上から順番にめくってみるしかないんだ。次から次へカードをめくり続けるしかない。人類の進歩のために人間はとにかく生まれてくるしかないということなんだ。生まれてくる誰かがたまたま天才たる突然変異だったり、たまたま障害者たる突然変異だったり、たまたま凡人だったりするだけなんだ」

「どすこい、乳豊関のお話は、人間は進歩するために存在すると聞こえますが、そもそもなぜ人類は進歩しなければならないのでしょうか？」

「ニッキー、それはいい質問だ。人間はなぜ進歩しなければならないか。それは人類の究極的な目的のためさ」

「宇宙の支配ですね？」ブラッキーが乳豊に詰め寄った。

「うん、さすがにブラッキーは知っているね。人類の究極的な目的とは宇宙を支配することだよ。人間は太陽を神とした。このことは知っているよね。人間が信仰することを許された宗教は、太陽こそが万物の創造神であり宇宙を支配する存在である、としたんだ。そして、太陽もいつかは消滅する運命にあるから太陽は宇宙の支配の実現を太陽の子である人間に託したとしたんだ。人間は太陽から誕生した地球の一部だからね。遠い将来人類が宇宙を支配するときに必ずくる。宇宙を人類がコントロールするときに必ずくる。それは太陽の意思であり本能なんだ。人類が宇宙を支配するということは太陽が宇宙を支配するということなんだ。人間は太陽の子供だからね。とどのつまりは人間こそが神になる運命にあるということなんだ。人類の究極的な目的は宇宙を支配することであり、すなわち神になることなんだよ。そしてそのために人類は永遠に進歩し続けなければならないんだ」

「太陽が宇宙を支配していないことくらい僕だって知っています。だいたい太陽が誕生する前から宇宙は存在していたのですから太陽が万物を創造していいことは明らかです。とても高度な文明を築きあげた科学的生物の人間の言葉とは思えません。僕にはその話は都合のいい屁理屈という

か幼稚なつじつま合わせに聞こえてしょうがありません」

「ブラッキー、君の言う通り太陽が万物の創造神であるということは科学的に証明することはできない。だけどそもそも科学的な宗教などあり得ないし、科学で証明できないからこそ宗教であるとも言えるんだ」

「乳豊関、それは詭弁です。開き直りにしか聞こえませんか」

「遠い将来の宇宙を支配する人間は太陽が創造したものだからね。子が親を敬うようなものと言えればわかりやすいかな」

「それじゃあ宇宙を支配するというのは具体的には何をするのでありますか？何をすれば宇宙を支配することになるのですか？」

ブラッキーに質問攻撃を緩める気配はまったくない。クッキーとニッキーは二人の話に必死でついていくのがやっとだった。

「人間は初めから宇宙を支配するという目的をもって誕生してきたんだ。そして人間以外のすべての生命は、人間が宇宙を支配することを助けるために存在しているんだ。君たちキリンからすれば到底納得することはできないと思うけど。そして、何をもって宇宙を支配することになるかといえば、それは永久的に増殖することというほかない。増殖すること、すなわち種の保存はあらゆる生命のもつ本能だ。それは巨大な生命の塊である太陽の本能でもある。ただし、生命には必ず死が訪れる。それは太陽とて同じ。自分が永久に存在しないことを知っている太陽は地球を作り、そこを生命の星とし、自分の死後も自分のDNAを絶やさないように永久に増殖し続ける生命体として人間をつくったんだ」

「乳豊関は、人間は太陽の意思で作られた特別な動物だと言うのですか？そもそもそれ以前に太陽は生命体なのですか」ブラッキーが尋ねた。

「太陽は生命そのものだよ」

「太陽は生命そのもの・・・」ブラッキーは呟いた。

「そうさ、太陽は地球を含め全ての生命の源であり、生命そのもの、巨大な生命の塊さ」

ほんのしばらく沈黙が流れた。

乳豊とブラッキーの論争を黙って聞いていたニッキーが口を開いた。

「どすこい、乳豊関は、人間は進歩するため、その他の動植物は人間を支えるために存在するのですね？」

「簡単に言うたそういうことになるね」

「どすこい、そして人類の進歩に貢献する10億に一人の圧倒的な天才を誕生させるために、人間はとにかく生まれてくる必要があるということ」

すね」

「うん、そうだ」

「どすこい、10億人に一人の割合なら百億人いれば10人の天才が誕生する可能性があるから、人間はたくさんたくさん生まれた方がいいということですね」

「そういうことになる」

「どすこい、人間は、圧倒的大多数の普通の人間は、ただ単に生まれることで用済みとなり、夢も希望もなく毎日を過ごしているのですか？ 何百年も、もしかしたら何千年、何万年、何億年も後のことかもしれない宇宙を支配するという目的のために、現代の人間は今日も明日も、何年も何十年も死ぬまで生きていかなければならないなんて、それで人間は幸せなんですか？ 僕は、宗教の目的は心の救済だと思っていましたが人間の宗教は僕らの宗教とは違うのですか？」

「ニツキー、それは違うよ。人間の宗教だってその本質は君たちの宗教と同じだ。全ての人間は価値がある。人間はその人生の中で二度、人類全体の未来に関わる大きな仕事をする。一つ目は生まれてくること。すべての人間は生まれてきたその瞬間に大きな役目を果たすことになる。さつき君が言ったとおり、誕生することそのものが人類発展の可能性に寄与するんだ。そしてもう一つが子供を作ること。生命の誕生以来、連綿と引き継がれてきたDNAを次の世代に引き渡すこと。人間自ら能動的に行う行動としてはこれ以上に重要な行為はない。まあ、子供は作ることがなくても、そこに存在する以上、誰もが生まれてきたわけだから、人間は皆、例外なく大仕事をしているんだ。人間の宗教は『神である太陽は、どんな人間でも存在する以上は誰もが既に価値ある存在と認めている』と言っているんだ。神はすべての人間を肯定する。すべての人間の存在を肯定するんだ。そして、神が人類に託した課題はあまりに巨大なものだけど、あまりに巨大な課題だからこそ、人間は『国』や『民族』や『人種』の壁を乗り越えることができたし、神の教えが進歩の正当性や殺人が罪悪であること等々の理論的な裏づけとなることにより、結果として普遍的な価値観があまねく行き渡り、人類史上初めて争いのない平和な世界を実現させたんだ。人類の歴史は『戦争の歴史』だった。戦争の時代を終わらせたのは皮肉なことに戦争だったけど、その後現代まで続く平和な時代は戦後広く信じられるようになった太陽を神とする宗教なくしてはありえなかった。ニツキーは、人間は圧倒的大多数が凡人だから彼らは無力感の塊でまるで不幸なこ

どのように言うけれど、それは全く反対だ。神は人はなぜ存在するのかという究極的な問いの回答を与え、人間に地球上すべての人間は皆同胞であると悟らせた。『人類皆同胞意識』なんてそれこそ人類史上初めてのことだ。そして、戦争はもちろんのこと、あらゆるレベルの争いは減り、地球に秩序と安定をもたらせた。個人レベルの変化に目をやると、人間の存在理由を理解したことにより、人々の心に次の世代への責任感が芽生えた。いつの日か自分たちの子孫がこの宇宙を支配するときに来るし、そのために現在の自分があるという考えは、人々に現実の世界に目を向けさせた。死後に薔薇色の世界なんてないことを悟り、限られた時間の中で精一杯生きるようになった。今の自分自身を大切にするようになり、人生をいかに生きるかまじめに考えたり、将来の夢や毎日の生活の中に目的意識をもって生活する人々が増えた。人々は平和な世界でより充実した個人生活を楽しむようになったんだ。そもそも、自分がニュートンやアインシュタインのような天才でないことを不幸に思うような人間なんていないよ」

ニッキーはもっと何かたくさん言いたいことがあったように思ったけど言葉がでなかった。

ブラッキーが口を開いた。

「すべての人が太陽を神とする宗教を受け入れたわけではないですよね？ 『お前たち古い神を捨てて新しい神を信じろ』と言われて、はいわかりましたというわけにはいかないでしょう。結局、追い出されるようにして地球から出ていった人々がいたと聞いています」

「いやはやブラッキーは本当に人間の歴史について勉強しているね。ブラッキーの言うとおり、当時の連邦政府の命令を受け入れず地球を出ていった人々がいたんだ」

「彼らは肌の色が真っ白だったそうですね？」

「うん、当時は人種があつて、『白人種』と呼ばれる人々だった。きっと僕のように白い肌だったんだろうね」

「乳豊関、ストリートにお聞きします。実は乳豊関は当時地球から追い出された人々の子孫ではないですか？」

「おやおや、そんなことを聞かれたのは初めてだよ」乳豊は目をぱちくりしておどけて見せた。

「そうだ、家族の写真を見せてあげよう」

そう言うのと乳豊は席を立ち、棚に飾ってある写真立てを一枚をもってきた。

「これが本当の両親で、こっちが育ての両親。アンドロイドのパパとママだ。これが姉、そしてこれとこれが弟、真中の異様に白い顔の少年が僕だ」

それは、乳豊の家族が地球に来て一緒に生活していたときの写真だった。大勢の家族に囲まれて幸せそうな笑顔の少年時代の乳豊がそこにいた。年齢は8歳くらいだろうか、身体は鉛筆のように細いが肌の色の白さは今と同じだった。

「失礼なことを言ってすみません」

「いいよ、謝ることはない。それにしても、地球を出ていった白人種のことなんて、人間でも知らないことをブラツキーはなぜ知っているんだ？」

「僕はキリンの歴史に興味があつて調べています。実は僕らキリンは、もともと全然違う動物だったものを人間が品種改良を重ねて今の姿に作り上げた人造動物だということを最近知りました。そうです遺伝子操作というレベル超えています。僕はいろいろと知るうちに僕らの創造主である人間に興味をもったのです」

「なるほど、でも品種改良は君たちキリンに限らない」　そういうと乳豊は写真立てを元の場所に戻した。

「ブラツキー、これは忠告だけど、あまり君たちキリンの過去を詮索しない方がいいと思う。世の中には知らない方がいいこともあるし、また、知られたくないと考える者もいるんだ。少なくとも君の知っていることは世間では知られていないことばかりだ。そして、知られていないということはそれなりの理由があるということだ。世の中万事もうまいっている。だから君は君の知っていることを人に言わない方がいいと僕は思う」

「ご忠告ありがとうございます乳豊関。僕も思いあたる節があるので外では言わないようにします」

思いがけずクツキーとニツキーとブラツキーは乳豊の家に長居してしまった。3人は礼を言うのと乳豊の家を後にした。あたりはすっかり暗くなっていた。

十四　帰り道

「ねえブラツキー、どうして乳豊関にあんな質問したの？」乳豊の家からの帰り道、ニツキーが尋ねた。

「乳豊関が白人種の子孫じゃないかって聞いたこと？」ブラツキーが逆に

聞き返えすとニツキーは頷いた。

「地球に残った人間には異人種間交配と遺伝子操作が徹底されたから、乳豊関の家で見た本に載っていたような白人や黒人や黄色人という原種は今の地球には一人もいない」

「ならどうしてあんなこと聞いたの？」

「白人種は地球から出ていくときに『いつか必ず戻ってくる』と言ったんだ。残った地球人もこの言葉を信じている。白人種はいつか戻ってくると思っている。そして、実は彼らはとくに地球に戻っていてどこかでひっそりと身を隠しているという説もあるんだ」

「なるほど、ブラツキーは地球から出て行った白人種が実は地球に戻っていて、その一人が乳豊関じゃないかと思ったわけだ」それまで口数の少なかったクツキーが二人の会話に割って入った。

「ええ、僕らの国はもともと人間が極端に少ないから、意外と堂々と暮らしていることもあり得るかなと思ったんです」

「もし白人種が地球に戻ってきたらどうなるのかな。仲良く一緒に暮らすことができるのかな？」クツキーは夜空を見ながらブラツキーに尋ねた。

「それは無理です。白人種も人間には違いませんが、地球人からすれば今や異星人です。実際に彼らがどこの星で暮らしているのかわからないし、とくに絶滅しているかもしれないが。いずれにしても、もし彼ら白人種が地球に戻ってくるようなことがあれば、必ず戦争になります」

「それじゃあもし白人種が戻ってきたら地球はすぐ彼らに占領されちゃうね。戦争するって言ったって地球には武器はないし兵隊もないんだから」

「クツキー先輩、いざというときのために武器は秘密の場所に隠してあるそうです。兵隊も大勢います」

「そうか武器はあるんだ。ちゃんと準備はしているんだね。だけど兵隊はどこにいるんだ？ やっぱアンドロイドをどこかに隠しているの？」

「普段は一市民として生活しているんです。いざというときに兵士になって地球を守るんです」

「特権階級と老人と障害者がいざというときに兵士になるの？ あっ！そうか介護アンドロイドがいるね」

「そうです。アンドロイドがいます。でもいざというときに先頭に立って地球を守る役を期待されているのは実は僕たちキリンです。僕らだけでなく象やライオン、クマといった人間に知能を授かった27種の動物は、皆

いざとなったら地球、というより人間を守る兵士にならなければなりません」

「えっ！ そんな話は聞いたことないよ。いやだよそんなの」クッキーが叫んだ。

「そうです。誰も知らない話です。だけど、そのときが来れば僕らは戦うことになります。僕らはそうプログラムされているのです。象もライオンも動物はそのため知能を与えられたのです」

「ブラッキーは、人間が僕らキリンやゾウや猿等々保護する対象動物に知能を与えたのは、人間とコミュニケーションが可能なレベルの動物にすることで、高度な仕事をさせようという魂胆があつたと言っていたよね？ 高度な仕事というのは、それはいざというときに人間を守ることなんだね？ 人間は宇宙を支配するために存在し、僕ら動物は人間を守るために存在しているというわけか。そういうことか。いろいろ知らない方が助かるのは人間だな」

二人の会話を聞いていたニッキーが急に立ち止まった。

「クッキー兄さん、僕、乳豊関を見損なっていました」

「うん？」

「乳豊関は友達だと思っていたのに、がっかりしました。僕らはみんな、みーんな人間の奴隷なんだね。乳豊関は友達みたいな顔してたけど、腹の中じゃ僕らのことを奴隷だと思って馬鹿にしていたに違いないや」

「そうかな。僕はそうは思わないよ。僕は乳豊関は正直な人だと思った。僕らのことを馬鹿にしていたり、見下していたらきつとあんな話はしなかったと思う」

「ニッキー、僕もブラッキーの意見に賛成だな。ニッキーは誰に何を言われても決して帽子を脱ぐことなかったのに、乳豊関の話を聞いて、いともあっさり脱ぎ捨てたじゃないか。乳豊関はニッキーを騙して帽子を脱がせたの？ 違うだろう？」

ニッキーは乳豊に二本角を褒められたことを思いだした。

「そうだね。兄さんたちが言っていることが正しい。僕は違っていた。乳豊関はやっぱり僕の友達だ」ニッキーは笑顔に戻った。

「ねえブラッキー、宇宙ってどうなっているの？ 宇宙はいつ生まれたの？ 宇宙は永遠になくならないの？ 宇宙に終わりがあるのなら結局人間は宇宙を支配することなんてできないんじゃないの？」

「ははは、ニッキーもげんきんだね。今度は宇宙か。僕は所詮本に書いて

あることしか知らない。ニッキー、宇宙には始まりも終わりもないよ。いや本当のところはわからない。だけど、始まりがあると終わるものもあることになるから人間は宇宙には始まりも終わりもないということにしたんだ」

「なんだそりゃあ」ニッキーは驚きの声を上げた。

「乳豊関の話を覚えているかい？ 乳豊関は、いつか人間は宇宙を支配する、そのために人間は何世代、何十世代、何百世代と生き続けなければならぬ。自分はその途中経過のひとつの世代に過ぎないと悟った人間は、結局今を大切に生きるようになったと言っていたね。これはなぜだと思う？ 人間は自分の命の本当の重さを知ったんだ。自分の命の重さが自己の存在を遥かに超越することを悟ったんだ。その命は自分一人だけのものじゃない、個人の命一つ一つが実は人類の宝だということを悟ったんだ。自分の命は生命の誕生から何億年と続いてきて、また自分以降宇宙を支配する未来へとずっと長い時間生きていく何億本もの長い長い命の線の途中に過ぎないことを悟ったんだ。それまで信じられていた天国とか輪廻転生とか非科学的な思想は跡形も無くなった。人間は自分が存在するのは長くて百年程度の限られた時間でしかない」と悟ったからこそ、その限られた時間を精一杯生きようと努力するようになったんだ」

「一人ひとりの命には限りがあるなんて当たり前のことだと思うけど」不思議そうな表情でニッキーが呟いた。

「うん。ここである『悟った』というのは、全ての人類が同じ認識に立ったということなんだ。人間の世界には戦前いくつもの巨大な宗教が聳え立っていた。20世紀を代表する天才の一人であるジョン・レノンが『神は概念であり苦痛の大きさを測る秤である』と歌ったけれど、これは当時の人間の宗教に対する痛烈な皮肉だ。当時、人間にとって宗教とは一言で言えば『死後の安らぎを保証するもの』だった。すなわち当時は多くの人々が天国の存在を信じていたんだ。人間の宗教は長い間天国を餌にして信者を増やしてきた。現実には直視に耐えない厳しく残酷な世界だったから、宗教の役割は人々の目を現実からそらすことだったんだ。現代の人間の神は太陽という具体的なものであり目に見える。目に見えるから誰もが存在そのものは信じていることができるけれど、当時の神は概念だから目に見えなかった。だから、当時は見えなくて神の存在を信じる者と、見えないから神の存在を信じない2種類の人間がいた。人間が最後に起こした大戦争はつまるところこの2種類の人間の戦いだった。戦争は地球を壊滅的に破壊

した。世界大戦が終結すると、戦後世界の原則は、戦前の過ちを二度と繰り返さないことを基本的な考えとした。それ以前にも世界大戦の後には必ずそういう展開になったけれど、最後の世界大戦の後出現した圧倒的に力のあるリーダーが戦後の世界を構築する上での基本的な原則を作り上げた。それは、①戦争を『絶対悪』だとする明快にして普遍的かつ論理的な思想を打ち立てる。②戦前の宗教は大きく分けて2種類あり、一つは戦争の原因となった宗教、もう一つは人類を戦争から回避することができなかった宗教で、どちらも結果的に人類の役に立たなかったという理由で廃棄する。③人類共通の思想・哲学の背骨となる絶対的な存在の神を太陽とし、神こそが唯一絶対的な存在であり、教会や寺院、聖職者や僧侶の存在は認めない。戦後のリーダーがこれら三つの基本原則を貫徹したことにより人類は新しく生まれ変わり、人間は肉体は滅んでも魂は天国に行くというそれまでの古い宗教と決別することができたんだ」

「ふうん。だけどブラッキー、人間の新しい宗教と、宇宙には始まりも終わりもないということとどういう関係があるの？」

「随分話が横道にそれてしまったね。絶対神である太陽の永遠の存在は人間が永久に繁殖し続けることとしているからね。これが理由だよ。ニッキーが言うとおり宇宙に終わりがあつたら人間が永久に繁殖し続けることができなくなりそこに矛盾が生じる」

「宇宙があつて神があるのではなく、はじめに神の教えがあつて宇宙は神の教えに従っているわけだ。これは本末転倒にならないのかな？」クッキーが尋ねた。

「神が宇宙を創造したんだから矛盾はしません」

「神が宇宙を創造したのなら宇宙を創造する前があつたはずだ。宇宙には始まりがないという考えに矛盾しないかな？」

「どうどうめぐりですね。卵が先か鶏が先かと同じです」そういうとブラッキーは立ち止まって空を見上げた。

十五 レヴィの蒸発

話をシチリア島にうつそう。

「ギルバート！」マッキーは自分の背後で女性が叫ぶ声を聞いた。

「ギルバート、あなたギルバートでしょう？」

早朝7時前で、あたりには自分しかいないし、どうやら声の主は自分に話しかけているようだった。マッキーは立ち止まり、ゆっくり振りむくと10メートルくらい先に少女が一人立っていた。彼女の背中越しに朝陽が眩しくて、マッキーの目が慣れるまでほんのちよつと時間がかかったけれど、顔は白く、風に揺れる胸まで真っ直ぐ伸びた髪は金色に輝いている。

マッキーには今まで見たことのないタイプの人間に思えた。背は165cmくらいでスタイルがよく、白い半そでのブラウスに膝が隠れるくらいの少し短めのえんじ色のスカート、白いソックスに茶色の革靴という、地味だけどいかにも育ちのよい家庭の女の子という身なりをしていた。よく見ると少女の面影が残るその顔は驚くほど美しく、マッキーは、大昔の映画に出てくる女優のようだと思った。彼女は走って追いかけてきたのか肩で息をしていた。

『身体つきは大人だけど、服装や顔立ちからするとまだ13〜15歳くらいかな』マッキーは漠然とそんなことを考えていた。

彼女は、大きな瞳でマッキーの顔をじつと見つめていた。

「今、僕を呼んだの？」

「あなたギルバートでしょう？」

「いえ、人違いです。僕はマッキーです」

「あなた、私のこと本当に知らないの？ あなた本当にギルバートじゃないの？」

「僕は本当にあなたを知らないし、残念ながら僕は本当にギルバートじゃないよ。僕はモロッコから十日くらい前にやってきたマッキーといいます。この島にはボローニヤに行く途中に寄ったんだけど。結局ボローニヤには行かないことになって、しばらくこの島にいることになりました。近くのレヴィの家にお世話になっているんだ」

「ごめんなさい人違いでした。さようなら」

「さようなら」

少女は拍子ぬけするほどあっさり人違いを認めると、Uターンしてもと来た道を歩き始めた。

それは、マッキーがシチリア島にやって来てから10日目の朝のことだった。朝市での買出しはマッキーの仕事になっていたので、いつものように美味しそうな野菜やお肉や果物をいろいろ買って背中に乗せてレヴィの家に帰る途中の出来事だった。マッキーは遠ざかる少女の後姿を見ていたけど、しばらくすると少女は霧の中に消えてしまった。少女が見えなく

なってもしばらくの間、マッキーは遠くの霧を眺めていた。

あんなに美しい少女を初めて見たとマッキーは思った。人違いではあったけれど、夢のように美しい少女に声をかけられて、やっぱりシチリア島に来てよかったとしみじみ思った。

マッキーがレヴィの家に戻ったのはちょうど7時だった。マッキーはキッチンの大テーブルの上に買ってきたばかりの野菜やお肉などを並べた。ふと気がつくのと、いつもならとづくに朝食の支度をしているはずのレヴィの姿が見えなかった。しかも、家の中は今朝マッキーが買い出しに出て行ったときのままだった。マッキーはレヴィがまだ寝ていると思い、彼の部屋のドアをノックしたが返事はなかった。マッキーは不思議に思い、ゆっくりドアを開けて中を覗いてみたが、そこにレヴィはいなかった。マッキーはもしやと思いお母さんの部屋をノックしてみた。中からレヴィのお母さんの声がしたのでドアを開けてみたが、そこにもレヴィの姿はなかった。「お母さん、レヴィは出かけたの？」

「いいや、あの子は私に声をかけずに出かけたりしないよ。家の中をよく探してごらん。狭い家なんだからすぐ見つかるよ。家の中にいなければ庭で花でもいいじってるよ」

家の中にも、庭にも、レヴィがいないことはマッキーにはわかっていった。マッキーはキッチンに戻った。言葉にできない、何かいやな予感がマッキーの背中に走った。

「お母さん、急用ができたっていうレヴィの置手紙がキッチンのテーブルの上にありました」

「ああそうかい。でも変だね、私に黙って出かけるなんてことは、今まで一度だってなかったのに」

マッキーは、お母さんを心配させない方がよいと思って嘘をついた。だけど、このときマッキーは、まさかレヴィがずっと家に帰ってこないことになるなんて夢にも思っていなかった。

レヴィが突然姿を消してからというもの、マッキーはレヴィの代わりにお母さんの世話や家の中の仕事をこなしていた。契約は残っていたけど、レヴィのお母さん一人にしておけないので野外劇場アズツロでの一人芝居は中止した。

レヴィが蒸発して3日目の朝、ひまわり農園主のテラタンが馬車に乗ってやってきた。

「おはようマッキー。相変わらずレヴィから連絡もなしか？」

テラタンは彼に不似合いな真剣な顔つきで馬車から降りてきた。

「なあマツキー、あんさん知ってるか、あっちこつちでレヴィみたいな蒸発事件が起きてるんや。しかも、どうもこいつも決まってじいちゃんばあちゃん世話をしてる独身の子供や孫や。まるで神隠しにでもあったみたいにみんな同時に蒸発しとる。変だと思わないか。これは偶然なんかじゃない。何かあるに違いないで」

「テラタン、その話は本当？　もしかしたら、自宅で老人の世話をしている人たちの集会があったのかもしれないね。レヴィもそれに参加しているのなら安心だけど」

「マツキー、集会とかそんなじゃない。3日間も家を留守にする集会なんて聞いたことないで」

「うん、たしかにそうだね。それにしても困ったな。そろそろいい加減帰ってきてくれないと、僕もいつまでもここにいられるわけではないからね。郷里じゃ兄と弟がきつと首を長くして待っていると思うし。もつとも兄の方は生まれつき首が長いけど」

「それとな、昨日変な噂耳にしたで。この一週間船の出入りが全くないそうなんや」

「この一週間一隻の船も地球にやってきてないってこと？」

「そうや、一隻も入ってきてないし、また地球からも一隻も出てってない」
「そんな馬鹿な！　それって宇宙で何かあったってことじゃないか」

「そうや、逆に地球で何か起きてるのかもしれないんや。もしこの一週間本当に一隻の船の出入りもないとしたら、時期が重なるし、レヴィたちが一斉に蒸発したのと何か関係があるとは思わないか？　マツキー」

「だけど、一週間もの間船の出入りがないのが本当なら、どうしてそんな大事件をニュースで言わないんだろう」

「コントロール・タワーにトラブルが発生したんじゃないかという噂が一番それっぽいんや。」

うちのヘリコプターも丁度一週間前から動かん。うんともすんともいわん。これもコントロール・タワーに原因があるというなら説明がつく。タワーの修理に人間が駆り出されてるとしたら、レヴィたちの蒸発も説明がつく」

「だけどテラタン、コントロール・タワーは東京にあるんだよ。日本だよ。」

わざわざシチリア島の人間まで駆り出されるとは思えないよ」

「じゃあいったいレヴィたちはどこに行ったんや！」

「ギルバート！」突然テラタンの背中越しに少女の声が響いた。マッキーとテラタンが声のする方を見ると、マッキーが3日前の早朝に出会った美しい少女がこつちを向いて立っていた。

まさかマッキーは、またあの美しい少女に出会えるとは思っていなかった。なので一瞬非常に驚いたけれど、戸惑う気持ちはこみあげてくる嬉しさに流された。

「やあおはよう。また会ったね。覚えているかな、僕はマッキーでギルバートじゃないよ」

「マッキー？」

「うん、忘れちゃったかな。3日前、朝早くにやっぱりにギルバートって声かけられたんだよ」

「そう、あの時の」

「うん、思い出してくれた？」

「ええ」

マッキーは、少女の表情から硬さが消えたことに気がついた。

「なんやマッキーの知り合いか」そう言いつつもテラタンの目は少女の美しい顔に釘づけになっていた。

「マッキーや、外に誰かいるの？」家の中からレヴィのお母さんの声がした。

「ねえ君、せっかくだからうちに寄っていかないか？ お茶を入れるよ」そう言ってマッキーが手招きすると、少女は頷いてゆっくり歩いてきた。

「どうテラタンも、時間があるなら寄っていかない？」

「なんやウチはついであっ！」テラタンは、ほっぺたを膨らませて少しふてくされた顔をしたが、両手をぶらぶらさせるしぐさが実は嬉しいということを物語っていた。

先日も美しい少女だとは思ったけど、マッキーは間近に少女を見てその美しさに息を呑んだ。何もかもそれまで見たことのない色なのだ。髪は黄金に輝き、瞳は地中海のように青く透き通っている。そして肌は透き通るように白い。

クツキーとブラツキーの合宿も今日で10日目。

「ブラツキー、さすがに君は飲み込みが早いね。これほどの短時間で『回転式たすき落下制御走法』を自分のものにした者を僕は知らない。そもそもこの走法は首が短い者には必要度が低いけど、身につけるとなると僕のように首の長い者よりもずっと苦勞する。今まで何人にも教えたけど、結局皆途中で挫折するんだ」

「ありがとうございます。今日で合宿も最終日、何とか間に合いました。難しい『回転式たすき落下制御走法』がマスターできたのもクツキー先輩と一緒に練習できたからです。合宿を一緒にさせていただき感謝しています。クツキー先輩の走る姿を間近で見ることができてとても参考になりました」

「複雑な動きをマスターするということは、まず動きを視覚的捉えて、それを頭の中に再現することから始めるからね。実際に見ることができかどうか、実は大きなポイントなんだ。これはスポーツに限らず芸もそうだし、何を習得するについても言えることだけど、見てイメージを頭に叩き込むことはとても重要だ」

「そうですね。『回転式たすき落下制御走法』は、実際にやってみると首の回転のコツはリズムだと分かりました。7拍子という変拍子で回しますからね。無意識に回すことができるようになるまではやっぱり苦勞しました」

「次回のモロッコ代表キリン枠はブラツキー、君で決まりだな。まず間違いない。僕としては残念でもあり嬉しくもある」

「代表になれたらもちろん嬉しいですが、もし僕が代表になれたらやっぱりクツキー先輩のおかげです。今日で合宿も終わりですが本当にお世話になりました。ありがとうございます」

「いや君の努力の賜物さ。さて、ひと風呂浴びて足長に行こう。ニツキーが待っている」

二人はシャワーを浴び、着替えを済ませると足長に向かって歩き始めた。グラウンドを出てしばらくすると、二人は何者かが自分たちの後をつけていることに気づいた。クツキーとブラツキーは目で合図をすると、足長の手前の角を左折して後をつけて来る者を待ち伏せした。しばらくすると一人のキリンが二人の目の前に現れた。クツキーほどではないが首が長く、白い毛並みに真っ白なたてがみが印象的で、クツキーもブラツキーも初めて見る男だった。クツキーとブラツキーは、左右両側から白いキリンを挟むように近づいた。

「ずっと尾行していただろう。僕らに何か用かい？」ブラッキーが白いキリンに尋ねた。

「別に君らを尾行していたわけではない。君たち二人に大事な用があつてついてきた」白いキリンは落ち着いて答えた。

「尾行していたわけじゃなくて、ついて来たとはどういうことだ？ 君の言っていることは矛盾しているぞ」ブラッキーは白いキリンを睨みつけた。「首長キリン、黒キリン、僕は君たちのことはよく知っている」そう言う」と白いキリンは胸ポケットからハンカチを取り出して鼻をかんだ。

「僕は白キリンだ。国の仕事をしている。立ち話はなんだから足長で話そう。君たちも足長に行くとところだろう？」白キリンは足長のある方を向いた。

「君は警察の者か？」クッキーが尋ねた。

「違う。警察じゃない。心配しなくてもいい。僕は君たちに大事な話があつてついてきたんだ」

「話を聞いてもいいが、まず自分が何者なのか言え」クッキーは右前足を白キリンに差し出した。名刺を渡せというポーズだ。

「名刺は持っていない。何をやっているかも言えないが。政府の人間だ。信じてもらうしかない」

クッキーとブラッキーは白キリンの顔をしばらく黙って見ていたが、クッキーが口を開いた。

「どうも嘘をついているようにも見えない。ブラッキー、足長でこの人の話を聞こうじゃないか」

「はい」ブラッキーは頷いた。三人は足長に向かって歩き始めた。

「白キリン、足長にはきつと僕の弟がいるけれど、一緒に君の話を聞いても構わないか？」

「知っている。二本角の弟さんだね。一緒に聞いてもらつて結構だ」

クッキーが足長のドアを開けるといつもの席のニッキーが右前足を振った。ニッキーはクッキーとブラッキーの後ろから歩いてくる白キリンの存在に気づき足をそつと下ろした。

3人は席に着くとクッキーがニッキーに白キリンとの経緯を簡単に説明した。飲み物の注文も終わり一息ついたところで白キリンが切り出した。「これから話すことは極秘事項だ。他の誰にも話さないと約束してもらえるか？」

クッキー、ニッキー、ブラッキーの3人は虚を突かれて一瞬言葉を失っ

た。

「君が大事な話があるというから付き合っているのに、極秘事項だから誰にも言わないと約束しろと言うのは、随分と自分勝手じゃないか？」むっとした顔をしながらクッキーが言った。

「それもそうだな」そう言うのと、白キリンはしばらくの間クッキーの目をじっと見ていたが、「わかった」と言って話を始めた。

「君たちのことだから信用して話そう。君たちコントロール・タワーは知っているね？」

「無人司令塔のことか？ 東京の？」クッキーが聞き返した。

「そうだ。東京の無人司令塔のことだ。あの巨大施設は何のためにあるか知っているかい？」

「あそこが地球をコントロールしていると聞いています」ブラッキーが答えた。

「そうだ。実は1週間前、コントロール・タワーが異星人に占拠された」
「占拠？ 異星人に？」ブラッキーが叫んだ。

クッキーとニッキーとブラッキーの3人は互いに相手の顔を見た。しばらくしてブラッキーが口を開いた。

「異星人というのはもしかして元地球人？」

「どうしてそれを知っているんだ？」白キリンは驚き尋ねた。

「最近、たまたま知り合った人間に人類の歴史について教わりました。昔地球を出て行った人間がいると聞いていたので、もしかしたらと思ったのです。でも凶星だったようですな」

このことは、ブラッキーは前から知っていたがしばらくして答えた。

「そうか、そんなことを知っている人間がこのあたりにいるのか」白キリンは、ほうと軽くため息をつくと言話を続けた。

「人間は彼らを異星人と言っているけど、考えようによってはオリジナルの地球人だ」

「それで、彼らはいったいいつ地球に戻って来たのです？」ブラッキーが白キリンに尋ねた

「実は詳しいことは分かっていない。ただし、昨日今日やってきたわけじゃないさそうだ。君たちはどうもいろいろと知っていそうで、それなら話も早い。要点だけ言うと、これから戦争の準備をすることになる」

「戦争！」皆が一斉に叫んだ。

「の準備？ どういうことだ？」クッキーは白キリンに尋ねた。

「人類は戦争を永久に放棄したんじゃないの？」今度はニッキーが白キリンに尋ねた。

「相手が異星人なら当然話は別だよ」白キリンが答えた。

「異星人？ さつき、考えようによつてはオリジナルの地球人だってあなと言っていたじゃないか？」

「ニッキー、白キリンを責めるのはお門違いだ。白キリン、君はわざわざそれを教えてくれるために僕たちの後をつけてきたのか？」

「首長キリン、大事な話はこれからだ。現在世界中で戦争の準備が進められている。発表はしていないが当然我がモロッコも肅々と準備を進めている。そこで首長キリン、君に白羽の矢が立った」

「ぼ、僕に白羽の矢？」

「コントロール・タワーの奪還に向けて各国が東京に兵を送る。兵の数は国の規模に応じて数千から数万という単位になる。我が国も小国ながら千人以上派遣することになりそうだ」

「僕も兵に選ばれた。そういうことだね？」

「いや首長キリン、話を最後まで聞いてくれ」

「さつきから首長キリン首長キリンとおっしゃっていますが、兄はとうの昔に名前を変えました」ニッキーが白キリンに囁み付いた

「兄の名前はクッキー、そして僕はニッキー、黒キリンはブラッキー、ここにはいないけど二番目の兄はマッキーです」

「クッキーにニッキーにブラッキー。そういえば斑キリン、おっと失礼、マッキーはまだ帰らないのですか？」

「花の買い付けに海外に行っていますから、ついでに観光をしているのだと思います」

ニッキーは、白キリンがマッキーが壁の町にいないことを知っていることに何の疑問も持たず説明した。

「いつ帰ってくるのですか？」

「そろそろだと思います」

「うむ、ところで話を戻すけど、首長キリンじゃなかった、クッキーには単なる兵ではなく兵をまとめる役、すなわち隊長になつてもらう。兵は動物ごとに分けて編成されるのでキリン隊の隊長ということだ」

「僕が隊長？ 冗談じゃない、僕に隊長なんか務まるがわけない」

「いや、国は君が適任だと判断している。これはすでに決定事項だ。我々是人選には実はかなりの時間をかけている。異星人がコントロール・タワ

ーを占拠したのは1週間前だが、数か月前から連邦政府は異星人と秘密裏に交渉を続けていた」

「交渉？」

「そう、国は連邦政府から異星人が現れたと報告を受けたときから戦争の準備をしている。人選は数か月前から始まっていたということだ。そして我々はあらゆるデータを精査した結果、クツキー、君が隊長にふさわしいと判断した。実は念のためここ数週間は日常生活も監視させてもらった」

「僕の行動を監視していたってことか？」クツキーは白キリンを睨みつけた。

「それもこれも仕事なんでね」白キリンは表情一つ変えずクツキーの目を見ながら答えた。

しばらく白キリンとクツキーのやりとりを見ていたブラツキーが右前足を上げた。

「すみません。白キリン教えてください。異星人との交渉の具体的な内容は」

「むこうの要求は、地球は自分たちの故郷だから住む権利がある、ようするに地球に戻って住みたいということだ。こっちは、お前たちの祖先は勝手に地球を捨てて出て行った、今さら権利だなんて何をねぼけたこと言っているんだと言ってはねつけていたようだが、異星人の代表の娘が誘拐されて状況が一変した」

「なんでまた誘拐なんて。地球側が不利になるだけじゃないか」

「ことの真偽は定かではない。地球側も異星人の娘の誘拐については関知していないと言っている。それはそうだ、ブラツキーの言うように娘を誘拐なんかしても交渉が不利になるだけだ。だいたい本当に誘拐かどうかもわからない。やつらの狂言でいいがかりかもしれない。だけど、いずれにしても彼らは突然実力行使に出た」

「それがコントロール・タワーの占拠？」

「そうだブラツキー、いったいどうやったのか不明だが、異星人は現在コントロール・タワーを占拠している」

「やっかいな事態ですね」

「ブラツキー、コントロール・タワーを占拠されたことがそんなに困ったことなの」ニツキーが尋ねた。

「そりゃあそうさ。コントロール・タワーは言うなれば地球の頭脳だからね。下手に手出しはできないよ」

「ブラッキーはコントロール・タワーの実物を見たことあるの？」

「うん、留学中に見学する機会があつてね。巨大な施設だけど、無人司令塔と言われるだけあつて本当に人はいなかった」

「ふーんそれにしてもお粗末な話だなあ。地球の頭脳を占拠されるなんて」
そう言うときニッキーはジョッキを持ち上げビールをごくごく飲み干した。

「しばらくはビールも飲めなくなるかもしれない」白キリンは独り言のよう
に呟いた。

「いやなことというなあ」

ニッキーの言葉に白キリンは笑つたがその目は笑っていなかった。

「地球は今完全に孤立状態だ。コントロール・タワーの許可が下りない限りどんな船も地球に入ることはできないんだ。この1週間地球に入った船はない」

「そもそも彼ら異星人は、いつどうやって地球に潜入したんだ？」クッキ
ーが白キリンに尋ねた。

白キリンはコップに注がれた水をしばらく眺めていたが顔を上げて語り
だした。

「詳しいことは本当に分からない。ただ、彼ら異星人が地球人と交渉に至る
までには少なくとも数十年という準備期間があつたんじゃないかと言
われている。何せ彼らは突然地球に現れたけど、地球の外からやってきた
わけじゃない。前から地球にいたんだ。たぶん、火星や人工衛星から地球
に戻る人間の船に紛れ込んで潜入してきたのではないかと考えられている。
それしか考えられないからね。そして、異星人は地球の現状や歴史、
社会のしくみや法律、習慣、言語等々実にいろいろなことを詳しく知って
いる。長年地球で生活していたとしか考えられないんだ。人間も異星人は
いつかはやってくるだろうと考えてそれなりの準備はしていた。西暦21
50年頃には、どんな小さな船もコントロール・タワーの許可なしでは地
球の大気圏内に絶対に入れないというシステムも作り上げた。だけど、今
回は人間の作ってきたこのシステムの裏を完璧に突かれた。異星人の船は
絶対に地球に入ることができない。現在のシステムは中に入れないことに
関してはパーフェクトだ。だから、このシステムは異星人が地球に上陸し
たときのことは想定していない。中に入られてたらお手上げというわけだ」
「夢にも思つてなかったと？」そう言つてクッキーはビールを飲み干した。
「うん、悪夢だ。たぶん今頃、異星人の団体様ご一行が地球に向かつてい
るはずだ。詳細は不明だが、彼らは『自分たちを住まわせろ』という要求

の他にも、いくつかの要求を連邦政府に突きつけているようだ。だけど地球軍は手も足も出ない。地球そのものが人質に取られているからね。そればかりか地球軍は地球に入ることすらできない。だから僕ら地球の住民が力を合わせて異星人を追いつくしかないんだ」

「もともとコントロール・タワーって無人なんですよ。ということはコントロール・タワーをコントロールしていたのは誰なの？」ニッキーが誰ということなく質問した。

「コントロール・タワーをコントロールしている者はいない。しいて挙げるとすればコントロール・タワー自身だ。白キリンが言うとおり本当にこの1週間一隻の船も入港していないとすると、異星人はコントロール・タワーを操っている、ようするにコントロール・タワーを操作できるということだよ。ちょっと信じ難いな。事実だとすればこれは驚くべきことだ」ブラッキーが答えた。白キリンはブラッキーの言葉にうなずくと、もっと恐ろしいことを口にした。

「それに関してはとんでもないことを聞いた。もし異星人からコントロール・タワーを奪還することができて現在地球にいる地球人にコントロール・タワーを扱える者はいないらしい」

「な、なんだって！」皆一様に驚いて、白キリンの顔を見た。

ニッキーがぷつと吹き出して笑った。

「呆れてものも言えないよ。白キリン、いったい地球はどうなっちゃうの？」

「異星人と戦うと言っても、殺すわけにはいかないということだ」

「とっ捕まえてコントロール・タワーを元に戻させなきゃいけないんだね」

「それにしても」いぶかしげな表情でブラッキーが白キリンに話かけた。

「たしかに地球には既存の軍隊があるわけじゃないし、火星基地や人口惑星から応援も期待できないとはいえ、各国から集まる兵隊は相当な数になりますよね。相手の異星人もそんなに大勢いるんですか？」

「異星人は20人もいない」

「えっ！」ブラッキー、クッキー、ニッキーの三人は驚いて一斉に叫んだ。

「たったの20人？」ブラッキーは、白キリンに掴みかからんばかりに詰め寄った。

「ブラッキー、異星人は20人もいないけど彼らの兵隊は何万いや何十万、いやもしかしたら何百万という数かもしれない。とにかく途方もない数の兵隊が彼ら異星人を守っている」

「それはどういうこと？」ブラツキーは相変わらず白キリンに詰め寄ったままだ。

「異星人はアンドロイドを操ってるんだ。地球に住むすべてのアンドロイドはコントロール・タワーで管理されている。異星人はそれを逆手にとって世界中のアンドロイドを東京に呼び寄せている。毎日々々、それこそ無数のアンドロイドたちがコントロール・タワー周辺に集まってきている。我が国にはもともと人間が少ないから目立たないし、だから大きな問題になっていないが、世界中で、実は今大変な混乱が起きている」

「すると、僕たちはアンドロイドと戦うことになるのか？」クツキーが白キリンに尋ねた。白キリンは、一瞬しまったという顔をした。

「本当はここまで詳しく話すつもりはなかったんだ。でも君たちがいろいろなことを知っているからつい調子に乗って話してしまった」

「アンドロイドって、ようするに人間だよ。20人ならいざ知らず、何百万なんて人間ととともに戦って勝てるわけないよ」

「いや、クツキー、人間相手ならなんとかなるかもしれないが、アンドロイドは不死身のロボットだ」白キリンが申し訳なさそうに言った。

「不死身のロボット相手に戦うのか？」クツキーが呟いた。

「・・・」白キリンは困った顔のまま黙ってうつむいてしまった。

「ねえ白キリン、僕とニツキーとブラツキーは、人間に本当の人間とアンドロイドの人間がいるということをつい最近知ったんだ。考えてみると不思議だよ、いくらこの国この町に人間が少ないと言っても、全然いないというわけじゃないのに、なぜ今の今まで気がつかなかったんだろう？」

「・・・」

「なんだ白キリン、今度はだんまりを決め込んだか？」クツキーは白キリンを睨んだ

「今日は、僕はこれで帰る」白キリンは顔を上げて口を開いた。そして言葉が続けた。

「帰る前にもう一つ。ブラツキー、君にもとても重要な任務がある」

「何ですか？」

「君は僕たちの先祖であるキリンの原種を見たことがあるって言ってたね」

「なぜそれを知っているんだ？ でも白キリン、君の言っていることは正しくない。僕が見たのはキリンの原種ではなく、キリンの原種の剥製だ。でも誰に聞いた？」

「君が人に話しているのを聞いた」

「そうか、さては盗聴していたな。脅迫文を寄こしたのも白キリン、君か？」

「いや、あの手紙は僕の仲間が書いた。君の行動は長いこと僕らの監視下にあった。僕らは君を危険思想の持主と考えていたからね。でも状況は一変した。異星人との戦い、具体的・直接的にはアンドロイドとの戦いだけど、これはどうしても回避したい。そのために君の力を貸してほしい」

「盗聴なんて卑劣なことをしていて、困ったら助けて欲しいとは随分と虫のいい話だな。でもなんだかんと言っても国の命令じゃあ従わざるを得ないじゃないか。原種の剥製がいつたかどうかしたのか？」ブラツキーは白キリンを睨んだ。白キリンはブラツキーに睨まれて少し緊張したのか唾をぐくりと飲み込んだ。

「異星人対策当局は、地球に異星人の協力者がいると考えている。具体的には、彼ら異星人の訪球※（※地球にやってくること）に手を貸した地球人や彼らの地球での生活の面倒をみてきた地球人がいると考えている。一週間前に当局が協力者の可能性が高いと思われる者のリストを発表した。発表したと言ってもコントロール・タワーを使って発信ができないので、担当官が各国を訪問してリストを手渡ししている。我が国にリストが届いたのは三日前だ。リストに挙げられた者の中には意外にも科学者が数多く含まれている。もともと地球で生活している特権階級は、もともと著名な科学者が多いから、まあ当然と言えば当然かもしれないけどね。当局が特に怪しいと目をつけている科学者の一人が日本の黒神博士だ。専門は絶滅した動物の再生だ。ブラツキー、君は黒神博士を知っているね？ 君が原種の剥製を見たのは黒神博士の研究所じゃないのか？」

「そうだ。黒神博士の研究所だ。黒神博士の研究所にはキリンだけじゃなくて、ライオン、象、クマ、猿といった知的動物の原種の剥製はほとんど揃っていた」

「君は黒神博士が現在行方不明だということも知っているか？」

「いや、僕が博士に最後に会ったのは一年も前のことだ。その後何度か話をすることはあったけど、この数か月はまったく接触はない」

十七 黒神博士の手紙

拝啓 日本は新緑が目染みる一年で最もいい季節です。いかがお過ごしですか。貴兄の手紙楽しく読みました。「楽しく」と言い方は、貴兄には失礼かとも考えましたが、ほかに適当な言葉も見つかりません。貴兄の手紙、いや実に楽しく読みました。

貴兄もご存じのとおり、人間には「人種」がありません。

より正確には、人間は「人種」という概念をこの世から抹殺するために、それこそ狂気の沙汰とも言える想像を絶する馬鹿げた「人種廃止（単一人種化）政策」を実施し、それこそ完璧に実行して、この世から人種を事実上なくすことに成功しました。不思議なことに、数世紀も前から既に人間に人種は存在しないにも関わらず、それでもなお「人種」という言葉は辞書から消えず、人種に関する研究者や書籍は年々むしろ増える傾向にあります。まるで、人間は、あれほど憎んだ「人種」をまるで懐かしんでいるかのようです。

人間は、元々単一種だったものが、それぞれの住環境の影響を長い時間受けるうちに、その環境に適した身体的特徴を備え人種へと発展しました。諸説ありますが、人種は大きく分けると①ネグロイド②コーカソイド③オーストラロイド④モンゴロイドの4種に区別することができました。現在の人間に人種がないということは、現存するすべての人間の体内に①から④の4種類の人種の血が流れているということです。たとえていうなら、同じ母から生まれた4人の兄弟がそれぞれ遠方の土地で家族を持ち、その子孫が長い時間をかけ集落を作り人種・民族を形成するに到ったところで4人の兄弟の子孫全員を一同に集め、全員の血をブレンドしたというわけです。

人間は先の最終戦争（280年も前の戦争ですが）の反省から、「すべての人間は高邁な共通の目標のため存在する平等で尊い存在である」という思想を掲げました。「高邁な共通の目標」とは宇宙を征服するということです。違う言い方をすれば「神になること」です。

これは企業でいえば経営理念です。すなわち、企業とはその存在理由を「高邁な目標達成を目指すため」とし、全従業員が目標達成にベクトルを合わせ鋭意努力邁進することによって最大の成果をあげる機能集団ですが、経営理念とはその高邁な目標のことです。人間は人間社会が一つの大きな「機能集団」であるとし、企業で言う経営理念を掲げました。そして、機能集団としての機能を阻害すると考えられるものすべてをリストアップし、綿密な計画の基にひとつひとつ削除していきました。「人種」はその

機能を阻害する最大の要因であったわけです。

貴兄は260年前に人間が行った「人種廃止政策」について研究し、同じことをキリンもできるのではないかと考えた。人種がある以上差別はなくならない。差別のない世界を作るには単一人種化を実施するしかない。そう考えたわけですね。ご自身が珍しい黒いキリンであるために、いろいろな差別を受けてきたし、お父様が亡くなったのも差別が原因だったと聞きました。さぞ大変なご苦労があったことでしょう。ですが、人間の行った「人種廃止政策」は明らかに失敗でした。キリンが同じような人種廃止政策を実施すれば人間が失敗したのと同じように必ず失敗するでしょう。

もし貴兄が私の研究所のキリンの原種の剥製を見て、それを単一人種化したキリンのイメージとされているのであれば、それは間違いです。現存するキリンからは二度と原種を作りだすことはできません。現在のキリンと呼ばれる動物は、260年前のキリン（原種）とは違う動物なのです。原種の身長は現在のキリンの約3倍あり、体重は約27倍もあるのです。その代わり原種の知能は今のキリンの約50分の1しかありません。原種は言葉をもっていなかった。仲間と協同して仕事をするなんてことはできなかった。そもそもキリンに仕事などできなかった。食べて交尾し子供を生み育てるだけの人生です。たしかにすべてのキリンには原種の血が流れています。これもキリンの原種の血が流れている動物をキリンと呼んでいるのですから当たり前です。

ところで「人種廃止政策」は一般には失敗だったと思われています。でもこれはイコール成功だったということではありません。今更成功だった、いや失敗だったと言ったところでどうにもならないことなのであえて総括していいだけです。

私は人種廃止政策は、過去人類が行ったあらゆる悪行・愚行の中でも他に比較の対象すらない最低最悪の蛮行だと思っています。この人種廃止政策の前では最終戦争でさえも立派な行為であったと思えるほどです。

人類は人種がある中で差別のない世界を作ることができたはずなのに、それこそ人類が目指すべき世界であったはずなのに、愚かな指導者はその道を放棄してしまい、差別のない世界を作るためにあるうことか人種をなくすという愚かな道を選択してしまった。

人種があるから人種差別があるというのはそのとおりだけど、人種がなくなれば差別がなくなるわけではないというごく当たり前のことをまるで忘れていた。したがって、人間は人種がなくなったときに実は本格的

な差別を知ることになったのです。

「黒神」という漢字の名前からおわかりのように私の祖先は日本人です。黒神という苗字の日本人の父とアフリカ大陸の小さな国で生まれた黒人の母の間に生まれた男の子が一代目とすると私は8代目に当たります。地球上はもちろんのこと、どこに住む者であろうと体つき、顔つき、肌・目・髪の色に大差がない現代では苗字こそがその者の素性を知る唯一の手がかりです。すべての人間にまんべんなくあらゆる人種の血が流れている以上、自分の祖先が日本人であるということにいったいどんな意味があるのかというもっともな意見を言う者がいます。私自身、日頃、自分の祖先が日本人であるということを意識することはありません。また同じように私の体に流れる敬虔なユダヤ人の血や勤勉なアングロサクソンの血を意識することはありません。ここで私の祖先が日本人であることを述べたのに理由はあります。人類が過去、地球規模で行った最大の二つのプロジェクト、宗教の一元化と人種の一元化の両方に日本人が大きく影響しているのです。

貴兄もよくご存じのようにすべての人間は太陽を神とする一神教の信者ということになっています。最終戦争終了後、それまでの神や信仰はすべて強制的に廃棄させられ、指導者は新しい神を信仰することを地球上のあらゆる人間に強制しました（当時、「信仰の自由」は人間のもつ権利の中でも、もっとも基本的、かつ重要な権利とされており、この権利を侵されることを拒否した人々もいました。彼らは地球で生き残ることよりもキリスト教の信仰を選択し、地球を離れました。ただし、これについては、本当は人種廃止政策に反対したという説もあります）。

太陽を神とする宗教の起源は古く、古代エジプト人が太陽をすべての創造神として崇めていたことは有名です。同じ太陽を神とする宗教といっても古代エジプト人の素朴な宗教と太陽を神と掲げながら実は人間を唯一無比の存在であるとする人間崇拜の現在の宗教では中身は180度異なります。まあ話せば長くなるので人間の宗教についてはここで詳しくは述べません。

最終戦争後、地球再生を始めるにあたり、『単一宗教・単一人種の世界』がいったい秩序を保つことが可能なのか、その予測は非常に困難なものでした。実は、この『新世界』を予測するヒントが日本人だったのです。

かつて、日本という国は長い間ほぼ完璧な単一民族国家でした。日本のようないわゆる島国は他にも存在しましたが、日本のような歴史を持つ国

は他にありません。

宗教の統一と人種の統一を同時進行させて行うということは具体的に人類イコール単一民族の完成を目指すということです。

最終戦争後の世界の指導者は、日本という単一民族国家が『明治維新』という歴史の大転換期に自国の指導者のリーダーシップのもと肅々と、それこそ実に見事にそれまでの体制から全く新しい体制へと革命的变化を成功させたことに着目し、そこに新世界再生の鍵があると考えたのです。民族としての日本人を簡単に定義すると次のようになります。

① 日本人はほぼ完璧な単一人種（モンゴロイド）である。

② 日本人は天皇を神とする一神教『天皇家』の信者である（天皇家は日本人のアイデンティティそのものであり、自覚的・意識的には思想・行動を何等拘束するものではないが、アイデンティティであるが故に無自覚・無意識のうちに日本人のあらゆる思想・行動を拘束している。天皇家はいわゆるキリスト教やイスラム教、仏教といった宗教とは異なるが、あえて宗教の扱いにしているのは、この『思想・行動を拘束している』ことを理由とする）。

このような日本人が明治維新の際、700年以上続いた封建時代をほぼ平和のうちに終わらせ、西洋キリスト教国が試行錯誤のうえ約400年かけて作り上げた近代民主主義国家を指導者の強いリーダーシップの下にほとんど一夜潰けのごとく驚異的なほどの短期間で作りあげたのです。

この明治維新の成功の要素をあげればきりがありませんが、それまでの封建的身分制社会から近代民主主義社会への大転換の成功には天皇の存在が欠かせません。日本が明治維新で新国家建設が進められていた当時、近代民主主義国家は、そのすべてがキリスト教国でした。民主主義国家は国民が法の下で平等であるという国家です。『国民が平等』という思想は、神の前では人間は皆平等であるという思想が基になっており、その思想の下でそれまで不平等の扱いを受けていた人々が革命によって『平等』すなわち民主主義を勝ち得ました。

日本は明治維新によりそれまでの身分制社会を国家の指導者が民主主義社会に作り変えました。その際、キリスト教国という神の代替としたのが天皇だったのです。日本は『万世一系』である天皇という神の子孫を戴く国であり、天皇の前では国民は皆平等であるということです。

ここまでの説明で賢明な貴兄はもうおわかりになったことでしょう。

最終戦争後の新世界の指導者が理想としたのは日本人だったのです。全

人類にとっての日本人の天皇に当たるものを、当時の指導者は考えに考え抜いた結果これを太陽としたのです。日本人にとって天皇はある意味血の通った『父』のような存在で、全人類にとって、この『血の通った』『同じ血が流れている』神はやはり実在してはならなかったわけです。想像力豊かな（もちろん皮肉です。）当時の指導者は、とどのつまりは太陽しか思いつかなかったということです。

地球は太陽の子であり、人間もまた地球の一部であり、すなわち人間は太陽の子であるというわけです。

さて、それでは、地球全体を島国日本のような単一民族にし、『我ら人間は太陽の子で皆平等であり人類の進歩のために生まれてきた』という洗脳をし続けた結果、人間社会はいつたいたったのでしょうか。人類は差別のない幸せな世界を築くことができたでしょうか。

貴兄がご存じかどうか知りませんが、現在、この美しい地球で暮らすことができる人間は、実は一部の特権階級だけです。人間社会は、職業ごとにいくつかの階層に分かれていて階層ごとで住居地が異なります。地球に住むことができる者が最上級ランクの者です。全体からすると極めて少数で、有名な科学者や高級官僚です。次のランクは月に住むことができます。これも数は少なくやはり科学者や官僚が中心です。その次は火星です。主に技術者、教師等でここまでが上流階級と呼ばれています。これより下の階層の人間は人工惑星に住んでおり、この人工惑星にもいくつものランクがあります。数からすればほとんどの人間は人工惑星で一生を終えるのです。この美しい地球を見ることすらなく死んでいく人間がほとんどなのです。

260年前の指導者たちの中の一人でも、現在のこの差別社会を予想した者がいたでしょうか。

言うまでもなくこの美しい地球で生活する権利はすべての人間にあるはずです。私自身、私が特権階級と呼ぶ恵まれた階級の者ですが、この地球には私と同じ考えの特権階級の人間は実は意外と多いのです。そういう仲間たちと今まで連邦政府に対して、すべての人間に地球に住む権利があることを訴えてきましたが、残念ながら彼らはまったく聞く耳を持ちません。

長い手紙になってしまいました。この手紙が貴兄からいただいたお手紙に対する回答になるかどうか自信ありません。あなたたちキリンが人間のような愚かな動物でないことを祈って止みません。

十八 美少女

レヴィのいないレヴィの家、居間でテラタンと謎の少女が向かい合って座っている。マッキーは台所でお茶の用意をしている。レヴィのお母さんは相変わらず自分の部屋で横になっているけど、ときどき独り言が居間まで聞こえてくる。

「さっきあんたが言ってたギルバートって誰や？ あんたの友達か？ マッキーと間違えるくらいだからやっぱ斑模様のキリンか？」テラタンが少女に話しかけた。

「ええ友達よ。斑のキリンなの。マッキーにそつくりの」そういうと少女は台所で忙しく働くマッキーをちらりと見た。

「あんたこの辺の人間じゃないね。どこから来はった？」

「日本よ」

「日本か、いつ日本から来はった？」

「そうね、2週間くらい前かしら」

「ギルバートっちゅうのはどこの友達や？ 日本とちやうの？」

「そう、日本」

「じゃあマッキーがギルバートのはずないとちやう？」

「そうね、でもあんまり似てるから」

マッキーがお茶を持ってやってきた。

「二人で何話してたの？」

「この子は日本から来たんや。ギルバートは日本の友達でマッキーにそつくりなんやと」

「へえ日本から来たの？ ところで名前は？」

「おおそうや肝心の名前を聞いてなかった。3人揃ったところで自己紹介というや。まずウチから。ウチの名前はテナガオランウータン。四股名をテラタン。気安くテラタンと呼んでくれな。ウチはこれから10キロ位北東に行ったところでひまわりを作ってるんや」テラタンは手振り身振り表情豊かに早口でまくしたてた。

「僕の名前は覚えてくれたよね、マッキーです。モロッコのマラケシュの『壁の町』で兄と弟の3人で花屋を経営しています。ボローニヤに行く途

中でこの島に寄ったってことも話したよね。覚えてないかな？ イタリアにはひまわりの買い付けにきたんだ。この家は友達のレヴィの家なんだ。レヴィは10日くらい前から行方不明でね。僕は今ここでレヴィの寝たきりのお母さんの世話をしているんだ」

自己紹介は最後の少女の番になった。テラタンとマツキーはじつと少女の顔を見つめていた。少女は二人に見つめられて少し緊張したのか頬を赤らめた。

「私は、黒神レイ。ここへは父の仕事の関係で来たの。今住んでいるのは市場のそばの部屋が4つきの借家。小さいけど結構気に入ってるわ。父の仕事はよくわからないけれど、しばらくこの町に滞在することになりそうよ」

「黒神レイさん」マツキーが少女の話をさえぎった。

「レイでいいわ」少女が笑いながら答えた。

「それじゃあ黒神レイさんの四股名はレイということ。ところでレイ、ギルバートはそんなに僕に似ているの？」

「ええ、二度も間違えるくらいですから」

「ふうん。僕の故郷の壁の町にはキリンがたくさんいるけど、それでも僕は他人と間違えられたことはないなあ。日本にもたくさんキリンがいるの？」

「いいえ、日本は寒い国だからキリンは少ないわ」

「だけど僕みたいなキリンは大勢いるの？」

「いいえ、ギルバートみたいなの、というか、マツキーみたいなキリンはギルバートしか知らないわ」

「ギルバートにも斑模様がある？」

「ええ、もちろん」

「ギルバートの背格好や首の長さも僕みたい？」

「ええ」

「顔は？ ギルバートの顔は僕に似ている？」

「ええ、そっくりよ」

「不思議だなあ。僕には兄弟が二人いるんだけど、三人が三人とも全然似ていないんだよ。背格好、顔かたち、毛並み、あと性格も、全然似てないんだ。遠く離れた日本に僕そっくりなキリンがいるなんて、なんだか信じられないなあ」

マツキーとレイの話を聞いていたテラタンが指をパチンと鳴らした。

「そうや、レイ、あんさん写真持ってないか？　ギルバートの写真」

レイは少し考えてからゆっくり口を開いた。

「たぶん一枚くらいギルバートと撮った写真があると思う。探してみるわ」

「それと・・・」マッキーが言いにくそうに右前足で首の後ろを掻きながらレイに話かけた。

「日本人ってみんな君みたいに色が白いの？」

「えっ？」レイはマッキーの意外な質問に少し驚いたようだった。

「君みたいに色の白い人間は初めて見たと思っていたんだけど、実は壁の町に人間の友達がいる、その友達の肌の色が君の肌と同じようにまるで牛乳みたいに白いんだ。友達は男で相撲取りなんだ。四股名は乳豊っていうんだ」

「日本人もイタリア人もモロッコ人も人間の肌の色は同じよ。住んでいる国は違っても、キリンと違って人間は１種類しかないのよ。私のこの白い肌は突然変異だし、マッキーのお友達の乳豊さんも私と同じできつと突然変異よ。人間は、地球に住んでいるのは極々わずかだけど宇宙に住んでいる者を全部合わせれば８００億人とも９００億人とも言われているの。それだけ大勢いれば、私やそのあなたのお友達みたいな肌の色の白い突然変異もそれなりの数いるのよ。それに突然変異は障害者だから皆地球で暮らしているの。」

「障害者？」マッキーが驚いて尋ねた。

「ええ、肌の色が白いだけで障害者。肌が黒い人だって障害者よ」

「家族は？　レイの家族は？」テラタンが尋ねた。

「父がいるわ。普通の人間よ。母や兄弟はいない。父一人子一人」

「お父さんの仕事の関係でシチリア島に来たんだったね」マッキーがそういうとレイは頷き、そして立ち上がった。

「遅くなると父が心配するからそろそろ帰るわ」

「そうだね。また遊びにおいで」マッキーも立ち上がった。

「そうや、今度はウチがひまわり畑を案内するわ」テラタンも立ち上がった。マッキーとテラタンはレイを玄関まで見送った。レイは二人に向かってにっこり微笑むと足早に帰って行った。

「かわいい子や」テラタンが独り言のように呟いた。

「うん、あんなにきれいな子見たことないよ」マッキーも呟いた。

十九 戦争の準備

さて、その頃東京はパニックに陥っていた。東京は高級官僚や科学者などの特権階級とその家族が1千万人以上住んでいる大都市である。異星人にコントロール・タワーを占拠されてからというもの、この大都市は、電気、通信、交通をはじめありとあらゆるインフラの制御が不能となり、再開の兆しは見えなかった。また、そのうえ、路上、公園を問わず、あらゆる場所がコントロール・タワーを指して集まってきたアンドロイドで溢れかえっていた。

コントロール・タワーはその昔、皇居（天皇の住む宮殿）として使用されていた土地の中心部に位置している。この東京の中心にあつて広大な敷地は、さらに時代を遡れば江戸城という日本最大の平城の跡地なので、敷地の周囲は濠で囲まれている。アンドロイドたちはこの濠を取り囲むようにして何重もの層を作った。鳥のように空からこの風景を眺めるとその人垣の幅は厚いところで数百メートルに及んだ。

20人ほどという異星人らしき姿は、空から見ても敷地内に探すことはできない。彼ら異星人たちはコントロール・タワー本体建物の中に籠城しているようだった。

コントロール・タワー（以下タワー）本体は直径約3百メートル高さ約3千メートルの円柱形の建造物である。これほど巨大な施設でありながら、タワーの運営管理はすべてタワー自身が行っている全自動の無人建築物である。このタワーのもつ主な機能として、次のようなものがある。

- ① 連邦政府の行う行政のすべて
- ② 地球上のほぼすべてのインフラ（電気、通信、水道、交通等）の制御
- ③ 地球の環境を正常に維持する環境制御
- ④ 地震や台風などの災害防止
- ⑤ 地球外の生物や隕石からの防衛・防御
- ⑥ 月、火星及び人口惑星の監督
- ⑦ 人類が所有するすべての情報の管理
- ⑧ 地球内外のすべての人間の情報の管理
- ⑨ 地球に住む27種類の人型動物の管理
- ⑩ 地球内外すべてのアンドロイドの制御

異星人に占拠されている現在、タワーが何を行っていて、何を行っているのか判断つきかねていたが、異星人がタワーを操作・制御できている

ことは間違いなさそうだった。

一方、タワーを異星人から奪還するために世界中の軍隊が東京を目指すべく準備を進めていた。ほとんどの交通手段はタワーがコントロールしており使用することができないため、兵隊や軍事物資の輸送には古い船を使用するほかなかったが、古い大型船を所有する国は少なく、多くの国が船を確保することから始めなくてはならなかった。

モロッコには、兵や軍事物資を大量に輸送できるような大型船がもともと1隻もなかったが、解体を予定していた古いポルトガルの輸送船をたまたま買い取ることができたので修理して使うことになった。船の準備が整うまでの時間は、兵隊の訓練に充てられることになった。政府が慎重に人選した兵の数は、ゴリラ約300人、チンパンジー約200人、象とキリンとライオンとヒョウが各々約150人、チーターとカバとサイとバッファローが各々約100人で合計約千五百人だった。この数はモロッコの人口の約0・1%だが、この0・1%という対人口比が各国に割り当てられた兵の数だった。千五百人と言えば一般的には一師団にも満たない数だが、モロッコは小国だったのでそれでも仕方がないというほかなかった。

モロッコの国民は、上の10種類の動物グループとわずかな人間からなっている。軍隊は、この動物グループを単位に形成されており、その中には一人の隊長と隊長を補佐する副隊長が2〜6人が含まれていた。キリン隊の隊長に任命されたクッキーは、まず、他の動物グループの隊長たちと10日間にわたっての泊まり込みの特別教育や訓練を受けることになった。ブラツキーとの駆伝合宿が終わったと思ったら、思いがけず、すぐに軍事合宿訓練に突入することになって、クッキーも店をあずかる弟のニツキーもただただ戸惑うばかりだった。

現在のモロッコの大統領の黒ゴリラは、本名を『黒ゴリラ4世』といい、ほんの10年前までは約四百ヘクタールのトウモロコシ畑を所有する比較的裕福ではあるが平凡な農業経営者だった。誠実な人柄で人望が厚く、地域住民に乞われるようにして政治の世界に足を踏み入れた。黒ゴリラ自身は、もともと野望があつて政治家になったわけではないが、知り合った誰からも信頼されるそのキャラクターでめきめき頭角を現し、あれよあれよという間に大統領まで上り詰めてしまった。ゴリラはモロッコの人口の約20%を占めているため、政治的な影響力も他の動物とは比較にならないほど大きいものをもっている。この国は、現在の統治体制が出来上がって今年で80年に満たない新しい国で、初代から現在までの15人の大統領

領のうち7人がゴリラで、他はチンパンジー3人、象とキリンが各2人、カバが1人だった。

歴代大統領の約半数がゴリラだが、一般的には、ゴリラの特性である温厚さと調和を好む性格が政治に向いていると言われており、現在の大統領の黒ゴリラの評判もすこぶるよく、国民からの支持率も高い。

その昔、『百獣の王』と言えばライオンを指す言葉だったが、実際のライオンはその攻撃的な性格が、この長く続いた平和な時代の政治に向かないのか、現在まで大統領はおろか大統領候補者すら出ることがなかった。

クッキーがキリン隊の隊長として特別訓練に参加して2日目の午後、ニッキーがいつものように花屋で店番をしていると、突然白キリンが現れた。白キリンはニッキーに、戦場でクッキーを補佐する覚悟があるなら副隊長として軍隊に迎える用意があると言った。ニッキーは喜んでこの提案を受け入れた。

『クッキー兄さんといっしょに地球の平和のために戦える』ニッキーは嬉しくなって、早速このことをブラッキーに伝えようと思ったが、考えてみたらブラッキーがどこに住んでいるのか知らなかった。仕方がないのでニッキーは、ブラッキーを探しに足長に寄って、会えなければそのまま陽丘の向こうまで乳豊に会いに行こうと考えた。まだ外は明るい時間だったけど、ニッキーはそうと決めたら居ても立っても居られなくなって、さつさと店を閉めて外に出た。ニッキーは足長に着くと窓から中を覗いた。すると、いつもの席でブラッキーが一人でコーヒーを飲んでいた。

「よく一人で来るの？」ニッキーは店に入るとブラッキーに声をかけた。『いいや、ニッキー、君がくるのを待っていたんだ。遅かったじゃないか』ブラッキーはそう言うのと右前足を高く上げ、ビールを2杯持つて来るようボーイに合図した。

「どうして僕が来ること知っていたの？」ニッキーは驚いて尋ねた。

「いや、ここにいれば君に会えると思ってね。君に報告することがあるのさ、僕は君の兄さんと日本に行くことになった」

「へっ？」ニッキーは、さらに驚いて声にならない声を出した。

「昼頃、突然白キリンがやってきて、僕に黒神博士を探すのを手伝って欲しいと言うのさ。黒神博士は謎の多い人物で、ここ数年、直接彼に会ったことがある人はほとんどいないらしい。どうも僕は博士と直接会ったことのある数少ない者の一人らしいんだ。二つ返事で承諾したよ。僕もこの事件には大いに関心があるからね」

「僕のところにも、今日、白キリンが来た。僕はクッキー兄さんの補佐で日本に行くことになったんだ」

「ほんと！ それは素晴らしい」

そこにボーイが生ビールのみなみと注がれた大ジョッキを二つ持ってきた。

「我ら三人の出陣を祝して乾杯だ」

二十 ノーマ・ジーン

ニッキーとブラッキーが足長で乾杯をしていたちょうどその頃、シチリア島のレヴィの家の居間でマッキーとテラタンは古い本を食い入るように見ていた。

「しかし、これはどう見てもレイや」

「そうだね。僕もレイは、マリリン・モンローに似ているなとは思ったけど、マリリンの若い頃の写真見たことなかったからね。まさかこれほど似ているとは」

「他人の空似とはいうけど、それにしてもそっくりや。親子で似ているというレベルも逸脱している。これはレイや。レイそのものや」

「けどテラタン、マリリンの、しかもこんな若い頃の写真がレヴィの家にあることなぜ知ってたの？」

「ずっと前、やつぱりなんかの用でレヴィが留守のときにレヴィのお母さんの話し相手をしとってな。お母さんは映画好きでやたらと詳しいからいろいろ教えてくれたんや。そのときこの写真集も見せてくれたんやね。これはマリリンが15歳くらいのときだからきつとレイも15歳くらいじゃないか」

「レイは僕のことをいつもギルバートって呼ぶから、僕は今度レイをマリリンって呼んでみようかな」

「ノーマ・ジーンや」

「ローマ人？」

「いや、ノーマ・ジーンや。マリリン・モンローは芸名や。マリリンはこの頃はノーマ・ジーン・ベイカーや。だからレイにあったらノーマ・ジーンって呼ぶんや」

「ノーマ・ジーンか。そうだ、テラタン今からレイの家に行ってみない？」

「何を言ってるんやもう夕方やで。またにしようや」

「テラタンの馬車ならすぐだよ」

マツキーはレヴィのお母さんに出かけることを告げると、テラタンの手を引っ張って外に出た。テラタンも諦めて渋々マツキーについていった。

マツキーとテラタンを乗せた馬車は、石畳で舗装された道をガラガラと音を立てながら走った。「地図からするとこのあたり」と言う場所は、レヴィの家から北西約3キロの地点の比較的住宅の密集している地帯だった。テラタンは適当な空地を見つけると馬車を止めた。

「この地図からすると、たしかにこのあたりのはずやけど」テラタンはレイが書いてくれた地図を見ながらあたりをキョロキョロ見回した。

「おいテラタン、ここだ、ここだ」ずんずん先を歩いていったマツキーが古くて小さな家の前で手を振っている。その家は少し黄色がかった白いレンガ造りの平屋建てで小さな窓から少し光が漏れていた。

テラタンがはあはあ息を切らしてやってくると、マツキーは大きな一枚板でできた家のドアをノックした。しばらくするとドアが少しだけ開き、白髪頭のおじいさんがドアの隙間から顔を出した。

「何か用かね」おじいさんは怪しいものを見るような疑い深い目つきでマツキーとテラタンの顔をじっと眺めた。

「あの、こちらに・・・」と言ってマツキーがもじもじしていると、マツキーの声を聞いたレイが家の奥からやってきた。そしてドアを大きく開いてマツキーを見つけると叫んだ。

「あらマツキー！ どうしたのこんな時間に？」

マツキーはレイの顔を見ると一呼吸あけてゆっくりと口を開いた。

「こんばんは、ノーマ・ジーン」マツキーはいたずらっぽい目でレイの目を見つめて挨拶した。

「ノーマジーン？」レイはきよとした顔でマツキーを見た。

「君は今なんと言った？ ノー、ノーマ・ジーンと言ったのか？」そう言う和白髪頭のおじいさんの顔からみるみる血の気が引いていった。

「はい、レイさんはいつも僕をガルバートと間違えるから、僕も仕返しにレイさんをノーマ・ジーンと」

白髪頭のおじいさんは震える手で胸ポケットから眼鏡を取り出してかけるマツキーを見た。

「そう言われてみれば君はガルバートにそっくりだ。本当にガルバートじゃないのか？」

「はい、僕はマッキーです。ギルバートじゃありません。彼は友人のテラタンです」

マッキーに紹介されて、テラタンは仕方ないといった態度で一步前に出てぺこりとおじぎをした。白髪頭のおじいさんは眼鏡を少し上にずらすと頭のとっぺんから爪先までじろじろとテラタンを眺め。ふんつと鼻から息を出しそしてまたマッキーの顔を見た。

「それで君はなぜレイにノーマ・ジーンと言ったのだ？」

「マリリン・モンローの少女時代にレイさんがあんまりそっくりなものでノーマ・ジーンというのはマリリンの本名です。さつきテラタンから聞いて知ったのですが」

血の気の引いた白髪頭のおじいさんの顔を見ているうちにマッキーは今回のいたずらを少し後悔し始めていた。

「お父さんマリリンなんとかって誰？」レイが横から口をはさんだ。

「お、お父さん？」マッキーは驚いて叫んだ。

「そうよ、おかしい？ この前話した父よ」レイはそう言うと言髪頭のおじいさんに突然家にやってきたこの二人がさつき話した新しい友達だと説明した。

「それにしてもお父さんどうしたの？ 凄く顔色が悪いわ」

白髪頭のおじいさんの顔はすっかり血の気が引いて表情も強張って目や口の動きも何かぎこちなかった。

「いやなんでもない大丈夫だ。マリリン・モンローというのは大昔の映画女優だ。このキリンさんはレイがマリリン・モンローの若い頃にそっくりだと言ってるんだ」

「えっそうなの！ そんなこと今まで言われたことなかったわ。私ってマリリンなんとかにそんなに似ているの？」

「似ている、似ていなくてもものじゃない。あんたはマリリンがマリリンになる前のノーマ・ジーンだった頃のマリリンにそっくりや。こんなことなら写真集持って来るんだった」そう言うと言髪タンは悔しがってパチンと指を鳴らした。

「レイ、いつまでも玄関で立ち話もなんだから二人に入ってもらいなさい」白髪頭のおじいさんはレイにそういうと居間のソファに向かって歩き始めた。

「マッキーにテラタン、よく来てくれたわ。狭い家で窮屈でしょうけどお茶いれるからゆつくりしてってね」レイはウイंकをして二人を家の中に

招き入れた。

「さあ、お二人ともこちらへ」

レイのお父さんだという白髪頭のおじいさんは、居間の肘掛椅子にゆっくり腰を下ろすとマツキーとテラタンに声をかけた。引越しの片付けはまだ済んでいないのか、部屋の中はまだ解いていない荷物があちらこちらに積んであった。二人は荷物の山と山の間を恐る恐る歩き、居間に辿り着くと白髪頭のおじいさんの肘掛椅子の向かいのソファに腰かけた。相変わらず白髪頭のおじいさんの顔色は悪いけど、表情は幾分和らいでいた。彼は、ほんのしばらくの間マツキーとテラタンの顔を交互にながめてから口を開いた。

「私はレイの父の黒神です。キリンさんとお猿さん、失礼だがお名前をもう一度教えていただけるかな」

「僕はマツキーです。モロッコから一月ほど前に仕事でこの町にやってきました。故郷では兄弟3人で花屋を営んでいます。今は縁があつて知り合った友人のレヴィの家にお世話になっています」

「ウチはテラタンいます。いろいろと商売をやってきましたが現在は食用のひまわりの栽培をしています」

「テラタンさんは、さつき、写真集がどうのつて言っていましたな」

「はあ、お母さんが、お母さんといつてもウチのお母さんじゃおまへんえ。レヴィのお母さんや。このお母さんがまたごつつうオールド・ムービーに詳しくてな。ジェームス・ディーンの大ファンなんやけど、ほかにも大昔の映画スターのこれまた古い古い写真集をぎょうさん持ってまんねん。その中にマリリン・モンローの写真集もありましてな。この写真集にマリリンがまだマリリンになる前のノーマ・ジーンの写真が載ってますのんや」

「マリリン・モンローの写真集ですか。そりやあ珍しい。是非見てみたい」

白髪頭のおじいさんは興奮しているようだった。お茶を持って台所からやってきたレイが口を開いた。

「レヴィの家なら私知っているから今度連れてつてあげるわ、お父さん」

「そうや、レイのおとうさん、レイとレヴィの家に遊びに行くといい。お母さんは病気でほとんど寝たきりだから、二人が行けばそりやきつと喜びますわ」

そう言うのとテラタンは、またパチンと指を鳴らした。

「わかりました。さっそく近いうちにレイとお伺いします」

そういうと黒神はお茶をぐくりと飲みほしてレイにおかわりを催促した。部屋の中をきよろきよろ観察しながら皆の話を聞いていたマツキーだったがまるで大

事なことを思い出したと言わんばかりに突然右前足を挙げた。

「ちよっとすみません、いいですか」

とことわりを入れてからしゃべりだした。

「そうそうレイのおとうさん、僕が四股名を考えてあげましょう」

二十一 東京暗黒化計画

「わけないよ。太陽を黙らせればいいのさ」

「わ、わけないって、いったいどういうことですか？　しかも太陽をだまらせるって、いったい何のことですか？」ブラッキーは、乳豊の言葉に驚いて、冷静な彼には珍しく大きな声を出した。

「確かに太陽を黙らせるっていう言い方は正しくないな。太陽の光を遮断すればいいんだよ。そんなに難しいことじゃない」

ニッキーとブラッキーの二人のところに白キリンが来た日の夕方古い、二人は足長で軽くビールを飲み、その足で乳豊の家に向かった。夕陽丘の頂上からトウモロコシ畑を眺めると、畑の真ん中に夕陽に染まった乳豊の家が見えた。さらに目を凝らすと庭の手作りの土俵にまわし一丁の乳豊がいるのがわかった。どうやら土俵は出来上がったらしく、乳豊は鉄砲柱に向き合って一人で鉄砲※をしていた。（※稽古場にある鉄砲柱を使ったり、力士同士が互いに向き合って行う突っ張りの稽古で、腕力などを鍛えるための最も重要な基本のひとつ）

ニッキーとブラッキーが乳豊の家に着くと乳豊は喜んで二人を家の中に入れた。二人は、最近起こった驚天動地の大事件とそのために自分たちが近くクッキーと一緒に東京に向かうことを手短に乳豊に話した。もちろん二人は「極秘に」という前置きも忘れなかった。

乳豊は大きなバスタオルで上半身の汗を拭いながら黙って二人の話を最後まで聞いていた。そして口を開いて言ったのが冒頭の言葉だった。

乳豊は続けた。

「光はアンドロイドのエネルギーの源の一つだからね。世界中から東京にアンドロイドが集結しているのなら、東京をしばらくの間真っ暗にしてみればいいのさ。そうすればアンドロイドは動けなくなる」

「どすこい、乳豊関、真っ暗にしちゃうとアンドロイドは死んじゃうの？」ニッキーが驚いて尋ねた。

「いや死んだり壊れたりというわけじゃないよ。例えたとしたら、そうだな、亀は冬の間冬眠するだろ、長時間光に当たらないとアンドロイドはスITCH・オフ状態になって、ちょうど亀の冬眠と似たような状態になるのさ」

「乳豊関、アンドロイドを動けなくするには何時間くらい東京を暗くすればいいのですか？」乳豊の話聞いてブラッキーは少し興奮してきた。

「うん、120時間は必要かな。丸5日間だね。丸5日間東京を真っ暗にすればアンドロイドは身動きとれなくなる。どんな武器を使うかわからないけど、君たちが生身で挑んでも無駄だ。アンドロイドに歯が立つわけない。それより5日間太陽の光を遮断するのさ。そうすれば戦わずして地球を正常な状態に取り戻すことができる」

「ですが、乳豊関、太陽の光を遮断する方法なんてありますか」

「5日間くらい東京一体を真っ暗にするくらいなんてことはない。コントロール・タワーにそう命令すればいいんだ」

「どすこい、乳豊関、そのコントロール・タワーが異星人に占拠されているから困っているんです」ニッキーががっかりした声で言った。

「ああそうか。そうだった。そうするとちよつと難儀だね。でもきつと何か方法があるよ。少し考えてみよう」そう言うと乳豊の表情が少し真剣になった。興奮していたブラッキーも少しがっかりした表情をしている。乳豊は目をつむると両腕を組んで考えこんだ。ニッキーとブラッキーは、考え事を始めて動かなくなった乳豊を黙って見つめていたが、3分もするとそろそろじれつたくなってきた。

「一緒に行こう」突然乳豊は口を開いた。

「ここで考えていても時間の無駄だ。僕も君たちと一緒に東京に行くことにしたよ」

「えっ！」ニッキーとブラッキーは驚いて叫んだ。

「うん、この一大事にのんびり四股踏んで過ごしているわけにもいかないよ。それに僕は力士だからね。君たちの話が本当なら国技館もどうなっているのか心配なんだ」

「どすこい、乳豊関が一緒に来てくれると聞いたら、クッキー兄さんも喜びます」

乳豊の話にニッキーは飛び上らんばかりに喜んだ。

「ひよつとするとひよつとするよ」乳豊はそう言うと言間の中を時計と反対回りにぐるぐる歩き始めた。

「これはひよつとするとひよつとするなあ」

「乳豊関、ひよつとする、ひよつとするっていったい何のことですか？」
ぐるぐるせわしく歩き回る乳豊を見ながらブラッキーが質問した。

「ひよつとすると厄介なことになるかもしれないなあ」

「乳豊関、ひよつとするのも何も、もうすでにさうとう厄介なことになって
ますよ」

「うん、だけど、もしかしたら君たちの想像以上に厄介なことになるかもしれない」

「どすこい！ それは死者が大勢出るってことですか？」ニッキーが叫んだ。

「早いところまく収めないと宇宙規模の戦争になりかねないってことさ」

「宇宙規模！」ニッキーがまた叫んだ。

「君たちの話によると、ようするに異星人は地球を人質にとっているわけだ。彼らがタワーを操縦しているとすると、現実問題として地球人はまったく歯が立たないだろう。地球に住んでいる地球人はもちろん、地球の外にいる地球人も何もすることができない。タワーが占拠されているから異星人の思うままさ。もし地球外にいる地球人が地球に入ろうとしても、あつと言う間に破壊されてしまう。何しろタワーの持つ圧倒的な攻撃力の前では、地球人の優秀な戦闘部隊だって虫けらみたいなものだ。どんな小さな船だって、地球の引力圏に入ることすらできない。地球人が地球を守るために作った攻撃体制に、皮肉にも地球人が攻撃されることになってしまいうわけだね。反対に異星人は地球人が手を出せないことをいいことに、タワーの指示のもと悠然と地球に降り立つことになるだろう。地球人は異星人にまんまとやられてしまう。これが異星人の思い描く筋書きだろう」

「どすこい、乳豊関、異星人たちを地球にやつてくる前にやつつけちゃう、
ということではできませんか？」

「ニッキー、そんなことをしたらコントロール・タワーを占拠している異星人に何をされるかわからないだろう。乳豊関が地球を人質にとっている
というのは、そのことを言っているんだよ」

「ブラッキー、それは僕もわかってる。だけど地球の外にいる地球人が
黙って異星人が地球に入るのを見ているのかな？」

「いや、ニッキーの言うとおり彼らの筋書きどおりいくとは限らない。異
星人が地球に入っていくのを地球人が本当に黙って指をくわえて見てい
るか」

「それはどうかなあ。黙って見ているしかないのでは？」ブラッキーは首をひねった。

「たとえ平和的解決をもって異星人と共存するとしても、タワーを占拠されている限り、主導権は異星人が握っている。ようするに共存というのは、地球人が異星人の奴隷になるということだ。地球人が異星人の奴隷になることを受け入れるわけがない。とすれば、戦うしかない。戦うとしたら異星人を地球に入れてからでは手遅れだ。ニッキーの言うとおり叩くなら地球に入る前だ」

「乳豊関、このまま異星人のコントロール・タワー占拠が続けば戦争は避けられないということですか？」ブラッキーが尋ねた。

「主導権を握っているのは異星人だから、彼らの出方次第かな。僕が異星人なら次の一手をどうするか・・・結局のところ、タワーを奪取するしか解決策はなさそうだ。やはり今なんとしても必要なのは東京暗黒化計画だ。たとえばこういう方法も考えられる」そういうと乳豊は歩き回るのを止め、紙と鉛筆を持ってニッキーとブラッキーに説明をはじめた。

「巨大なテントをコントロール・タワーに被せるんだ」そう言いながら乳豊は円錐を描いた。

「タワーを柱にした巨大なテントを作るんだ。タワーは皇居跡地の中心に立っているんだけど、跡地の面積は115万㎡だから逆算すると半径約600mの円の中心に直径300mのタワーが立っていることになる。アンドロイドは皇居跡地の外側に集まっているようだけど、跡地は真円じゃないから、アンドロイドはおおよそタワーから距離にして200mから500mの周りから壁を作るように取り巻いているはずだ。そうすると仮に厚さ500mの壁を作っているとすると、タワーの中心から1150mの距離くらいまでアンドロイドが壁を作っていることになる。テントは高さ3000mのタワーにすっぽり被せるんだけど、半径1150m、高さ3000mの円錐形のテントを作って被せれば、たぶん、とりあえず、アンドロイド全員をテントの中に閉じ込めることができるだろう。仮に余裕をみて半径2000mの円錐形テントを作るとして、テントの面積は高さ3000m、半径2000mの円錐の側面の面積だから、ほぼ5km四方の布地が必要になる計算だ」

「一辺が5kmの布地！」ニッキーが驚いて叫んだ。

「うん、光を一切遮断し、しかも丈夫な一辺5kmの布地をタワーに被せる

んだ」

「乳豊閣、そんな大きなテントを作ることが物理的に可能でしょうか？」
ブラッキーが質問した。

「テントを作ること自体は不可能じゃないよ。百万件の家庭がそれぞれ5
m四方の絨毯を一枚ずつ持ち寄って貼り合わせればできる。だけどそれを
タワーに被せる方法が思いつかない」

「飛行機はいったい何機必要になるかな？」ニッキーが質問した。

「ニッキー、自分で言っていてなんだけど、たぶん5km四方の布地を空
からタワーに被せるのは不可能だと思う。そもそもタワーが占拠されてい
る以上、飛行機やロケットを飛ばすことができない。それよりこういう方
法はどうだろう。タワーを傘の柄に見立てて、まずそこに骨をかけて、そ
の骨に布地を被せていくというのは？」

「骨をかけるというのはどういうことですか？」今度はブラッキーが尋ね
た。

「今思いついた案だけど、こうだ、巨大な大砲の弾に丈夫なワイヤーをつ
ける、そして、その弾がタワーの向こう側に届くように、タワーの頂上に
向けて大砲を撃つんだ。たとえば、タワーから3000m離れた場所から
撃って、高さ3000mのタワーの頭を通り越して反対側3000mの場
所に弾が落ちるように火薬の量や放物線の打ち出し角度を計算して大砲
を撃つ。そうすればワイヤーがタワーのてっぺんにひっかかって、一度に
2本の骨ができる」

「乳豊閣、なるほどです。骨は何本くらい必要でしょうか。テントを張る
作業を考えたら、なるべく多いに越したことはないですね？」ブラッキーは、
興味を持ち始めたのか身を乗り出してきた。

「そうだね。仮にさっきの話の続きで半径3000mのテントを張るとす
ると、周囲は約18・850mになる。地上での骨と骨の間隔、すなわち間
隔の一番広い部分を百mと設定すると、骨は188本必要になる。188
角形というのは割り切れないから、2の乗数で近い数になると12
8角形がいいかな。一発の大砲で2本の骨ができるから、大砲は64発撃
つ計算になる。空から見るとタワーを中心とした巨大な正128角形がで
きるわけだ」

「骨が128本の巨大な傘を作るということですね」ブラッキーは頭の
中で巨大な傘を想像して頷いた。ニッキーは、乳豊のいう傘を具体的にイ
メージができず、目をぱちくりしながらで乳豊とブラッキーを眺めていた。

「お前名前は何ていうの？」

「サルヴァトール・ヴィッツニ、友達はレヴィと呼ぶよ。お前の名前は？」

「トーマス・ジェファースンだ。よろしく」

「トーマス・ジェファースン？ 聞いたことある名前だ」

「うん、アメリカ合衆国第3代大統領と同じ名前さ。友達は俺をトーマスと呼ぶ」

「大統領と同じ名前か。へえかつこいいなあ。俺もエイブラハム・リンカーンに変えようかな」

「あはは、お前は見えるからにレヴィだ」

「うん、俺はレヴィでいい。サルヴァトールという名前は、俺の母ちゃんの亡くなった旦那様の名前だ」

「ご主人様の元旦那の名前をもらったということか？」

「うん、名前だけじゃない。俺は、顔から身体つき、声からしゃべり方、癖にいたるまで何から何まで旦那様のコピーだ」

「お前、見た目は冴えないけど、それはお前のご主人様の亡くなった旦那が冴えない男だったということだな。だけど、お前は特別受注製品ってことは、ご主人様はかなり裕福ってことだね」

「暮らしは質素だけど、まあそういうことだ。ところで俺はシチリア島を2週間前に出て東京には昨日着いた。お前はどこから来たんだ？」

「もちろんアメリカさ。俺は第3代合衆国大統領だぞ。俺も2週間前に出て昨日着いた。もつとも命令が出たのが2週間前だから、ここにいる連中は皆、故郷を出たのは2週間前のはずさ」

「うん、それでトーマス、戦争になるって本当か？」

「わからない。詳しいことを知ってるやつは、ここらあたりにはいそうにない」

「俺たちはいったいどんな相手からコントロール・タワーを守れているんだ。世界中から仲間が集められているんだ。とんでもない相手のはずだぜ」

「レヴィ、大変なことが起きるのは間違いない。大事なご主人様を放って来いっていうんだから、ただごとじゃない。俺たちの相手もいずれわかる

だろうよ」

「俺の母ちゃんはずっと寝たきりなんだ。俺がいなきや一人で用を足すこともできない。黙って出てきたから困ってるはずだ。俺は母ちゃんが心配でしようがないよ」

「レヴィ、それは俺も同じさ。俺達だけじゃない。ここにいる連中は皆同じさ。俺たちは人間の世話をするために生まれてきたんだ。その俺達に人間の世話はいいから集まれなんて、こんなことは100年に1度あるかないかの大事件だ」

「100年に1度の大事件か。うん、そりゃあそうに違いない」

シチリア島全体でレヴィのようなアンドロイドは約百人いた。彼らは古い小さな漁船に乗って2週間前に島を後にした。コントロール・タワーが完成する前に造られた船の中にはタワーに連動していないものもあり、これらはこの状況の中でも自由に動かすことができたので、アンドロイドたちは200年以上も前に造られた古い船でコントロール・タワーを目指して航海に出た。世界中の大小無数の旧型船がほとんど同時に日本を目指したが、多くが東京湾に集中した。レヴィたちも東京湾からの上陸を目指したため、東京湾の入り口までは10日で来れたが、そこから上陸するまでに3日もかかってしまった。上陸後、レヴィは仲間たちと大手門を目指したが、行ってみると、すでにそこには先客が大勢いて立錐の余地もないという状況だった。仕方なくそこから時計回りに皇居の回りを歩き、結局、大手門の180度反対側の半蔵門の前で腰を下ろすことになった。

しばらくすると、皇居の回りを反時計回りに歩いてきたトーマス・ジェファーンソンたちアメリカから来た一隊が、やはり半蔵門の前で腰を下ろし始めた。

トーマスは見た目はいかにも標準的な人間を模したアンドロイドだった。そんなトーマスは、自分に比べ見た目がとても個性的なレヴィに興味を持って、しばらくレヴィを見ていたが、トーマスの視線にレヴィが気づき、お互い目が合って、どちらかというでもなく声をかけ話を始めた。芝に腰かけていろいろと話しをしているうちにお互い打ち解けて、仲良くなり始めていた。そこに今度は1連隊はありそうな大規模な団体が三宅坂の方から歩いてくるのが見えてきた。

「見ろよレヴィ、また大勢やってきたぞ」

「ああ、服装からするとロシアからの集団だな。2、3千人はいそうだね。ところでトーマス、アメリカって言っても上下左右やたら広い国だ。お前

さんアメリカのどこから来たんだ？」

「ロサンゼルスさ」

「ロスかつ！映画の都ハリウッドがあったところだね。うちのお母さん、20世紀の映画が大好きでさ、ジェームズ・ディーンとマリリン・モンローの墓参りをするのが夢なんだ」

「ジミーの墓は違う。ロスにないよ。たしかインディアナかどこかだ。マリリンの墓はロスにあった」

「ジェームズ・ディーンの墓はインディアナか。んで、マリリンの墓があったっていうのはどういうことだ。今はないのか？」

「墓はあるけど中身は空っぽさ。200年くらい前に墓の調査をしたら、そこにあるはずの棺がなかった。墓の中に棺が入ってなかったんだ。いつの間にか何者かに盗まれていたんだな。レヴィ、これは有名な話だぜ。まあそこにマリリンは眠っていないにもかかわらず、今も人気の観光名所なんだけどね。だから、墓というよりは墓跡といったほうが正しいね」

「マリリンの墓は墓荒らしにあったのか？」

「少なくとも200年前にはマリリンが眠っているはずの棺はなかった。いつ誰に盗まれてどこにあるのか未だにわからない」

「でもトーマス、200年前の棺の調査というのは、22世紀半ばの『一斉火葬処理』のときのことだよな。ということはマリリンの遺体は火葬処理を免れた可能性があるってことか」

「レヴィ、お前のいう通り一斉火葬処理のとき、マリリンの遺体は灰になっっていない」

「ということはだよ、トーマス、マリリンのDNAがどこかで保存されている可能性もあるということか？」

「そりゃわからない。だけど、もしそうならマリリンのクローンを作ることでだって可能なのに、そんな話はこの200年聞いたことがないから、『マリリンの遺体は消滅して存在しないから永久に発見されることはない』というのが定説さ」

「でも、ということはトーマス、一斉火葬処理は世界中で徹底的に行われたと聞いていたけど、マリリンの例みたいに墓荒らしに盗まれていて火葬処理を免れた遺体が、もしかしたら現存するかも知れないんだな？」

「そりゃあ可能性はないこともないけど」

「トーマス、一斉火葬処理は、『旧人類再生防止法』を根拠にしていたよね？」

「うん、当時、旧人類の遺体からDNAを採取して旧人類を再生しようという運動が起こりつつあって、その機会をつぶすのが目的だった」そういうと、トーマスは両腕を上には伸ばし、同時に背中もぐっと伸ばして大きなあくびをした。レヴィはトーマスの顔をまじまじと見ながら口を開いた。「地球上の膨大な数の墓をすべて掘り起こして土葬されている遺体はもちろん、火葬されている遺灰までも一つ一つ超高熱で焼きつくしたっていうんだろ？」

「うん、灰になっているというのに、それをさらに焼き尽くすなんて馬鹿しいことを本当によくやったと思う。面倒というかおぞましいというか、根気のいる仕事を人間はよくやったよね。これは褒めてるんだよ。人間の生真面目さには実に頭が下がるな」

レヴィは「うん」と言って頷いた。トーマスは続けた。

「だけど、人間様は実に罰あたりなことをやったものさ。旧人類再生のチャンスを永久に失っただけでなく、紀元前数千年前から保存されていたミイラをはじめとする貴重な資料までもすべて灰にしてしまったんだからね」

レヴィは遠くを見つめるように顔を上げた。

「母ちゃんが昔の映画が好きだからよくつきあって見たけど、青い目でまっ白い肌をした人間や反対にまっ黒い肌の人間とか、さらにはその中間の色の肌の人間とか旧人類は色々な種類がいて実に魅力的だと思ったけどなあ」

「レヴィ、旧人類が出ている昔の映画は200年以上も上映や放映が禁じられていたんだ。一般の人が見るようになったのは最近なんだぜ」

「ほとんど焼き捨てられたんだろ。悪名高き近代の焚書坑儒というわけだ」
「それでもサンプルを残しておいたぶんまだよかった。今見ることができるわけだから。レヴィのおかあさんは20世紀の映画が大好きらしいけど、大昔の映画や写真、本などが世間に出回り始めてからたぶん50年も経っていない。しかもそれらはほんの一部だ。サンプルはすべてコントロール・タワーに保管されている」そう言ってトーマスは目の前に聳え立つコントロール・タワーを見た。

「しかし、この解禁は結果的に消えかけていた火に油を注ぐことになってしまったんだ。科学者は別として一般人のほとんどは旧人類のことなんて忘れてしまっていたのに、作品の解禁で旧人類に興味を持つ人が短時間の

うちに爆発的に増加してしまったらね。レヴィのお母さんもその一人さ」
「確かに旧人類を知らない新人類が突然20世紀の映画を見たんだから、そりゃあ驚いただろうね。いろんな人種がいた旧人類に比べたら新人類は皆同じで面白くないね。人間は何で単一人種化なんて馬鹿なことをしたんだろう」

「レヴィ、今頃になって、人間だってきつと、お前と同じ考えだろうさ」
「俺と同じ考え？」

「単一人種化してしまつて、もう元には戻れない今になって、本当にこんなことをしてしまつて良かったのかつて、人間は本心では後悔しているつてことさ。生物は弱肉強食の世界の中で進化するもので、これは人間も同じだ。だけど、300年前の大戦争以後、人類は戦争する可能性がほとんどなくなつてしまった。戦前は人間の世界も弱肉強食だったけど、最後の戦争が終わつた後の人間の世界は、弱肉強食の世界ではなくなつたということだ。まあだからこそあの戦争を人類最後の戦争と呼んでいるんだからね」

レヴィはトーマスの話を黙つてきいている。

「ところで260年前の当時、全人類が金輪際戦争をしない、弱肉強食の世界から脱皮するということは、もちろん平和な世界の到来を意味するんだけど、その反面、それ以後は民族や人種が固定化する、すなわち人類の進化に支障をきたすことを意味していた。ようするに平和が続くと人類全体でみれば生物的に劣化することが避けられないから、劣化防止、進化促進のために異人種のかけ合わせを進めたのさ」

「トーマス、単一人種化は戦争防止の目的で行われたんじゃないやなかつたのか？」レヴィは驚いて大きな声を出した。

「レヴィ大きな声だすな。最後の戦争の後、世界は初めて共通の価値観で統一されることになったんだ。ようするに現在の世界の姿だけど、地球全体が多くの民主主義国家からなる連邦国家になったんだ。民主主義国家同士は基本的には戦争をしないものだから、単一人種化は平和目的と言われているけれど、260年前当時平和はすでに担保されていたわけだから、実のところ単一人種化はむしろ、人類の生物的進化の促進を目的としていたんだ」

「単一人種化は平和の代償ということか？」
「そういうことだ」

「しかし、やっぱりわからない」

「なんだレヴィ、何を悩んでる」

「基本的なことがわからない。そもそも人間は異人種交配をすると進化するものなのか？ それに」

「ん、それに、何だ？」

「それに、なぁトーマス、人類の進化は異人種同士の交配による混血化の結果ではなく、それこそお前の言う弱肉強食による優性種族の拡大化の結果なんじゃないか？」

「人類の長い歴史のなかでは、戦いに負けて地球上から抹殺された民族や人種もあつたし、勝者が敗者を奴隷にする中で異人種交配が進んだということもあつた。結局、実際のところ、弱肉強食と異人種交配は切っても切り離せない。混血化は人類の進化の過程そのものだろう。ただそれとは別に『全人類単一人種政策』は、当時の指導者がそれを決定し実行するだけの強大な力を持っていたということだ」

「皇帝ウー」レヴィが呟いた。

「そう、連邦政府初代皇帝の『ダニエル・ウー』が強大な権力を持っていたからこそできた。彼は父親がアフリカ系黒人種とアジア系黄色人種の混血で母親もやっぱり白人種と黒人種の混血で、すべての人種の血が流れていると言われていたし自分でもそれを強烈に誇りにしていたんだ」

「なにしろダニエル・ウーは神のごとく完璧な人間だったんだろ？」

「彼は自分が誰よりも秀でた存在であることを自覚していたし、それは自分にあらゆる人種の血が流れているからだと信じていた」

「トーマス、ダニエル・ウーは陰では『混血皇帝』と呼ばれていたんだろ？」

「陰でも表でも混血皇帝と呼ばれていた。真に地球を支配したダニエル・ウーは、人類こそ全宇宙を支配すべく創造された存在であると説いたんだ。太陽は巨大な生命体でありその本能は永遠に生き続けることである。太陽は自らの生命に限りがあるため自らの永遠の生命を人類に託した。人類は永遠に生き続ける存在となるため地球を飛び出し、太陽系を飛び出し、銀河系をも飛び出し、いずれ宇宙全体を支配する存在になる。人類とは遠い将来宇宙を支配する神に到達する尊い存在であり、そしてそれは人類の創造主である太陽の意志であるというものだった」トーマスは立ち上がり両手の拳を強く握り、一言一言に力を込めて語った。

「お前はどうか知らないが、俺が人間で、しかも260年前の偉大なダニエル・ウーと同時代の人間で、彼に目の前でそんなこと言われたら、たぶ

ん間違はなく舞い上がったと思う」

レヴィはトーマスを見上げながらしみじみと言った。

二十三 留置所（東京）

前にも述べたが、異星人に占拠されたコントロール・タワーは、昔、東京に天皇がいた頃、彼の居住地である皇居があった場所にある。この皇居のあった東京は、長い間日本の首都であり、政治や経済の中心だった。西暦2100年、皇帝ダニエル・ウーは、地球連邦政府を彼が大好きな日本の首都東京に置いた。そして、最重要施設であるコントロール・タワーを皇居跡地に置いた。

レヴィとトーマスの二人が出会ったのは半蔵門前だったけど、会話をしながら歩き始め、気がつく和二重橋前の広場だった。この辺りは今も日本を代表するオフィス街だが、現在東京は戒厳令が布かれているため、広場に限らず街をぶらぶらしている人間のほとんどがアンドロイドだった。

レヴィとトーマスが初めて会話を交わした時から何時間経ったろうか、時計の針は6時を回りそろそろ日も暮れかかる頃、二重橋前の広場がにわかになどつき始めた。

「大通りで何かあったな」

レヴィとトーマスの二人は人山をかき分け騒ぎのする大通りの前まで出てくると、広い大通りの真ん中を東の方角から3人のゴリラと1人のキリンが歩いて来るのが見えた。

よく見ると、キリンの首には3本のロープが巻きつけられていて、3人のゴリラが各々ロープを持っていた。どうやらゴリラ警官がキリン犯罪者を捕まえて署に連れていくところのようだ。

「な、なんと、トーマス、あのキリンは俺の友達だ」

「なに？」レヴィの言葉にトーマスは驚いた。

「お前にさっき話したろう。あのキリンはモロッコで花屋をやっている友達のマッキーだ」

「独り芝居の天才キリンか？」

「そうだ。なあトーマス、なんでマッキーがここにいるんだ？ しかも何で警察に捕まってしょっぱかれてんだ？」

「レヴィ、人違いじゃないか？」

「人違いなものか。斑模様といい背格好といい顔つきといいマッキーに間違いない。あいつきつと俺を探しにここまで来たんだ」

「シチリア島からお前さんを探しにここまで追っかけてきたっていうのか？ また何で？」

「それは俺が教えてほしい。母ちゃんに何かあったに違いない」

レヴィとトーマスが興奮しながらああだと言っているうちに、ゴリラとゴリラに引つ張られたキリンは二人の前を通り過ぎて行った。レヴィはしばらくの間遠ざかっていく4人の後姿を眺めていたが、彼らの姿がすっかり見えなくなると、トーマスに話しかけた。

「トーマス、俺はこれからマッキーを助けに行く」

「ああ、たぶんそう言うと思っていたよ」トーマスは驚きもせず答えた。

「短い間だったけど、お前と話ができて楽しかったよ、トーマス。縁があったらまたどこかで会おう」

「レヴィ、俺はいやだよ」トーマスはむっとした表情でこたえた。

「マッキーがお前の大事な友達であるように、俺にはレヴィ、お前が大事な友達だ。お前一人じゃどうにもこうにも危なっかしいだろう。俺もマッキーを助けるのに一肌脱ぐぜ」

数時間が経過した。すっかり夜も更けた東京の中心は、街そのものがまるで息をじつと潜めた生き物のようだった。

巨大なコントロール・タワーはお堀で囲まれており、お堀の回りを無数のアンドロイドがコントロール・タワーを守るように幾重にも取り囲み厚い壁を作っていた。彼らは立ったまま眠っているのか物音も立てずにじつとしてゐるが、耳を澄ますと、会話をしている者もいるらしく、あっちこっちから人の声や笑い声が聞こえた。

ピンと張り詰めた緊張感の漂うこの東京の街をレヴィとトーマスの二人が、昼間ゴリラとキリンが歩き去って行った西の方角に向かって歩いていった。10分も歩いただろうか、竹橋近くの交差点の先に警官らしい人影が見えた。レヴィはトーマスに目で合図をすると、トーマスは軽く頷いた。「このぼけ！ お前のせいで一文無しになっちゃったじゃねえか！ どうしてくれるんだ？」レヴィは突然大声で怒鳴りだした。

「なにおうっ！ お前が一文無しになったのはお前の責任だろ！ なんでもかんでも俺のせいにするな」

「くーこのタコ野郎」レヴィはトーマスの胸ぐらを掴んだ。

「おーいそこの二人、何している？」警官らしい人影が叫びながら走って

きた。さつきは暗くてよくわからなかったけど、近づいてきたのはやはり警官だった。身長が2メートルくらいありそうなごついゴリラの警官だった。

「お前たち外出禁止令が出ているのを知らないのか？　こんな時間にこんなところで何している？」

「何って、俺たちが何かしているように見えますか？　俺達ただ話をしてるだけですぜ」レヴィはトーマスの胸ぐらから右手を離すと警官に向かってとぼけて答えた。ゴリラ警官は二人に近づくとトーマスに向かって話しかけた

「おい、お前、今この男に胸ぐらを掴まれていたね。喧嘩していたのか、それともこの男に強請られていたのか、正直に言いなさい」

「強請られていたなんてとんでもない。こいつ博打ですっからかんになったものだから、むしやくしゃやしておいらに八つ当たりしてただけですよ」トーマスの話を聞き終わるとゴリラ警官の顔がみるみる赤くなって叫んだ。

「なにっ博打だと！　いったいどこで博打をやってたっていうんだ？」

見るからに強そうなゴリラ警官がトーマスの話を聞くやいなや怒り狂わんばかりに上半身を左右に揺らしながら両手を振り回し始めたので、レヴィとトーマスはすっかり震え上がってしまった。ゴリラ警官は、ポケットから手錠を出すとレヴィの左手とトーマスの右手にかけた。

「お前たち、この非常時に博打とはふざけた馬鹿どもだ。どこで誰と何をやってたのかこれから署に行って洗いざらいすべて吐いてもらうぞ。この俺様に見つかったのが運のつきだ。生まれてきたことを後悔させてやる」
「お巡りさん、署にだけは連れていかなくてくれ。それだけは勘弁してくれよ。あんたの言うことは何でも聞くから。後生だから署にだけは連れていかなくてくれ。お願いだよ」レヴィは泣きながらゴリラ警官に訴えた。
「金なら少しばかりあるんだ。お巡りさん」そういうとトーマスはポケットからいくらかの札を出してゴリラ警官に見せた。

「俺が賄賂を受けとると思うのか？　いったい俺を誰だと思っているんだ。さっさと歩け」

ゴリラ警官はレヴィとトーマスを歩かせると、二人の後について上半身を左右に揺らしながらのっしのっしと歩き始めた。

「なんで地球に住んでいるのはお前たちみたいでなくでなしの人間ばかりなんだ。もつとまともな人間は、人口惑星にだっていくらでもいるんだ

ろうに」

5分くらい歩くと、前方に窓から明りが漏れているビルが見えてきた。この辺りはオフィスビルが建ちならんでいる地帯だけど、今は夜中だし、しかも戒厳令が敷かれているので、明かりのついているビルはほとんどない。レヴィは「ゴリラ警官の向かっている先は、あの明かりのついているビルに違いない」とトーマスに耳打ちした。

「俺もそう思う。どうやらゴリラ警官は俺たちが人間と信じ込んでいるようだ」トーマスはそう言っていると、レヴィにウィンクした。案の定、ゴリラ警官の目的地はそのビルだった。

ビルの入口付近には大勢の警官が立っていた。やっぱりゴリラが多いけど、象、ライオン、トラ、シロクマなどもいた。ビルに入ると、ゴリラ警官はしばらくの間上司らしき者と会話をしていたが、この上司らしき者はここでは珍しく人間だった。ゴリラ警官は、人間との会話が済むとレヴィとトーマスの方に向かって歩いてきた。

「ようし、ろくでなしども、さっそく話を聞かせてもらおうと思ったが、どうも今晚は人手が足りなくて無理らしい。運のいいやつらだ」ゴリラ警官はそう言うのと元来た方向にすたすた歩いてどこかに消えてしまった。何があだかよくわからなかったが、あつけにとられる間もなくレヴィとトーマスは手錠をはずされて怪力のシロクマ係官に腕をつかまれてそのまま牢にぶち込まれた。

「明日の朝、早いからさっさと寝たほうがいいよ」シロクマ係官は親切にそう言うと、牢に鍵をかけて宿直室に消えた。

シロクマ係官の足音がすっかり聞こえなくなると、レヴィは聞き耳をたて、どうやら近くに警官や係官がいないことを確認して叫んだ。

「おいマツキーはいるかあ、俺はレヴィだ。お前を助けに来たぞお」

「なんだなんだ」

「何を騒いでるんだ」

「誰を助けるって」

あっちこっちの牢からいろんな声が聞こえてきたけどマツキーからの返事はなかった。

「係官に迷惑かかるから騒がないほうがいいよ」

レヴィとトーマスの二人が入った牢と廊下を挟んだ反対側の向かいの牢から声がした。

レヴィが向かいの牢に目をやるとベッドに腰かけているキリンが見え

た。レヴィは目を凝らしてよく見ると、そのキリンはまさしくマツキーだった。

「いやはや、なんとマツキーは目の前にいた」レヴィはそう言うと、トーマスの顔を見てにこりと笑った。そして、向かいのキリンに向かって話しかけた。

「おい相棒、そんなところにいたのか！ 俺だよレヴィだよ。サルヴァトーレ・ヴィッツーニだよ。お前さん俺を探しに東京まで来たんだろう？」向かいのキリンは無表情のままベッドに腰かけてレヴィを見ていた。

「おいマツキー、どうしちゃったんだ、俺を忘れちゃったのか？ なにか言えよ」

キリンはゆっくり立ち上がり前方に歩きだした。鉄格子の前まで来るとくるとレヴィに向って口を開いた。

「僕は君を知らない。君は人違いをしてるよ。僕はマツキーじゃない。ギルバートだ」

二十四 留置所（シチリア島）

レイの家に話をうつそう。

「レヴィとテラタン、せっかくだし、私の手料理を食べていって」そう言うのと、レイは台所から顔を出してレヴィとテラタンにウィンクした。

「ありがとう。食べていきたい気持ちはやまやまだけど、もうすっかり暗くなってきたし、レヴィのお母さんが一人きりで僕の帰りを待っているの、そろそろおいとまします」

マツキーとテラタンが揃って腰を上げて帰ろうとしたときに、コンコンと玄関のドアを叩く音がした。レイが玄関に行き扉を開けたとたん、白い作業着を着た男が数人ぞろぞろと強引に家の中に入ってきた。

「やめてください！ あなたたち誰ですか？」

レイの叫び声を聞いて、レイのお父さんとマツキーとテラタンが慌てて玄関に行くと、自分たちに銃を向けて男が4人立っていた。レイは別の男に右腕をつかまれていて、よく見ると手錠をかけられている。驚いて立ちすくんでいる間にレイのお父さんとマツキーとテラタンの3人も手錠をかけられてしまった。

「こ、これはいったい何のつもりですか？」マツキーは恐怖で心臓がはち

きれそうだったけれど、勇気をふりしぼって男たちに質問した。男たちはマツキーの質問に答えるつもりはまったくないらしく、黙って4人を外に連れ出すとそのまま馬車に乗せ走りだした。

馬車の中でも男たちは口を硬く閉ざし何も話さないつもりでいるようだったので、マツキーたち4人も黙ってお互いの顔や外の景色を見ていた。石畳の道にガタガタと揺られながら、30分も馬車に乗っていただろうか、マツキーはだんだん乗物酔いで気分が悪くなってきた。

「ちよつと止めてください。気分が悪くて我慢ができません」マツキーがそう言うのと馬車が止められた。外を見るとすっかり陽も暮れて暗かったけれど、馬車が止められたのは建物の前で、その建物はどの窓からも明かりが漏れていた。4人は降りるよう言われ、外に引きずり出された。この建物の中では夜にもかかわらず大勢が仕事していることがうかがい知れた。「やっぱり警察か」テラタンが呟いた。

「ウチは警察に捕まるような悪いこと何もしてへんさかい勘弁してほしいな」

テラタンの言うとおり4人が連れてこられたのはシチリア警察署だった。受付で簡単な事務を済ますと、4人は別々の部屋に連れていかれた。

「だから僕はマツキーで、生まれも育ちもモロッコでギルバートなんかじゃない」

「黒神博士のことなんて何も知らない。あの晩初めてあった」

「レイにもギルバートと間違えられた」

いったいこの言葉をマツキーは何回言っただろう。マツキーは2日目の取調べが終わり、留置所のベッドに横たわると疲れてすぐに深い眠りに落ちたが、ふと夜中に目が覚めた。暗い部屋の中で天井を見つめながら、あらためて現在の自分の境遇について考えると頭が冴えて眠れなくなってしまった。

どうやら警察は、マツキーをギルバートだと思って逮捕したらしいということは、マツキーにもわかった。そして警察はマツキーの言葉をまったく信じる気配がないということもわかってきた。また明日、朝から同じことを聞かれて同じことを答えるかと思うと言葉もないくらいうんざりした気持ちになる。反面、いったい、僕にそっくりなギルバートというキリンは何をしたんだろうという興味も沸いてきたし、テラタンや黒神親子のことが気になる余裕もでてきた。

『そういえばまだ子供のレイも手錠をかけられていたな』

マツキーは身体を起こしてベッドに腰かけた。

『たしかに警察は僕をギルバートだと思って逮捕したけど、家に入るなり、レイに手錠をかけるとはどういうことだ？ あんな少女に手錠をかけるなんて』

『そういえば、レイのお父さんも何の抵抗もせず黙っていた。まるで自分が逮捕されることを予期していたかのようだ』

『警察の目的はギルバートだけじゃない。レイとレイのお父さんも捕まえるつもりだったんだ』

『取調べのときに黒神博士って言っていたな。レイのお父さんは博士だったんだ。博士がいったいどんな悪いことをしたんだろう？』

『すると黒神親子は日本から逃げてきたんだな』

『じゃあギルバートはどこにいるのかな？ まだに日本にいるのかな』
『すると、テラタンはこの件と無関係のはずだ』

マツキーは暗い留置所のベッドに腰掛けて一所懸命考えてみたけど、ここから先は何も思い浮かばなかった。

二十五 暴動

「ギルバート？ ギルバートだって？ いやお前さんはどう見てもマツキーだ。モロッコからシチリア島に来て、一人で『ニュー・シネマ・パラダイス』をやった日の晩に俺の家に泊まったろ？ まさか忘れたとは言わないぞ。俺の母ちゃんに『エデンの東』をやってくれて、えらく感激されたろう？ えっそれも記憶にないっていうのか？」レヴィは手振りや身振りをまじえて向かいの房のキリンに話しをするが、自分をギルバートだというキリンは無表情で黙って見ていただけだった。

「レヴィ、あのキリンは本当にお前の知っているマツキーじゃあないんじゃないか？」

トーマスは、レヴィから話を聞いて自分でイメージしていたマツキーと目の前のキリンがまったく違うので、もしや本当にマツキーではないのではないかと思っていた。

「いや、どう見てもマツキーだ。何か理由があって自分の素姓を隠しているに違いない。マツキーは演技力がタダものじゃないから知らないやつは騙されるけど、俺は騙されない」そう言うと、レヴィは向かいの鉄格子

の中で腕を組みながらこちらを見ているキリンに手を振った。キリンは相変わらず無表情だった。

その時だった。何の前触れもなくサイレン音が聞こえてきた。少し遠くで鳴っているようで何かの警報のようだ。時計の針は夜中の1時をとつくに回っていて、留置場に拘束されている者のほとんどが熟睡中だったが、何人かは目を覚ましたようだ。しばらくすると近所の建物でも鳴り出して、数分もするとレヴィたちのいる地下の留置場のサイレンもけたたましく鳴り出した。留置場も熟睡どころではなく騒がしくなってきた。

「何だ、何の騒ぎだ？」

「火事か？」

「おう、それじゃあ俺たち焼け死ぬぞ、おい開けてくれ」

「誰か助けてくれえ」

「おい係官、何してるんだ！俺たちを見殺しにする気か！」

あっちこっちで叫び声や泣き声が飛び交いだした。何かお祈りのようなものを読んでいる者もいる。カンカンと鉄格子を何かで叩く者もいる。

しばらくするとチンパンジー係官が一人のそと現れて、大きな声で静かにするよう呼びかけた。警報が鳴り出してずいぶん経っているように感じたけど、たぶん3分も経っていなかったのかもしれない。相変わらず警報はけたたましく鳴っていたけど、留置場内の騒ぎが少し収まった頃、シロクマ係官が部下をたくさん連れてやってきた。

「人間どもが、暴動を起こした。あっちこっちで火事が起きている。ここも危険だ。みんなをここから違う場所に移すことになった」シロクマ係官はそう言うのと、部下に鉄格子の鍵を開けるよう指示した。留置場には10の部屋があり、それぞれに囚人が1人か2人閉じ込められていた。扉が開けられると囚人はすぐ手錠がかけられそれぞれ係官に連れていかれた。囚人の半分は人間で半分が動物だった。

今夜東京で起きたことを説明しよう。東京に戒厳令が出されたのは約2か月前だが、日本国政府は国民に戒厳令を出す理由を説明していなかった。これは連邦政府の命令によるもので、連邦政府は「コントロール・タワーが突如制御不能になった」という情報しか出さないよう各国政府に伝えていた。あらゆるインフラがストップしてしまったので、人々が生きていく上で最低限必要な飲み水と食糧については役所が人海戦術で配布していた。

戒厳令が出された当初人々は、単に生活が不便で困っていただけだった

が、膨大な数のアンドロイドが職務を放棄して東京に集まってくるのを見ているうちに恐怖心抱き、恐怖心がパニックを引き起こし、そしてパニックは徐々に拡大していった。さらに、各国から派遣された軍隊も徐々に東京に到着し始めたため「アンドロイドが人間を裏切りコントロール・タワーを占拠したに違いない。アンドロイドをやっつけるため動物軍が世界中からやってくる。動物軍対アンドロイドの大戦争が始まる」という噂が広まり、人々の動揺はピークに達しつつあった。

今夜の暴動は、パニックに陥った一部の若者がアンドロイドに向かって火炎瓶を投げたことに端を発していた。アンドロイドは、火炎瓶を投げられても何事もなかったかのように黙って消化処理をしていたが、アンドロイドが無抵抗なのをいいことに、若者たちは調子に乗って火炎瓶を投げ続けた。空気が乾燥し強い風が吹いていたこともあり、火はすぐに建物に燃え移り広がってしまった。そのうちに、彼らの行為に便乗して破壊行為や略奪行為をする者も出てきた。レヴィたちが外に引っ張り出されたときは、町がもつとも危険な状態なときだった。

「さっそくチャンス到来だ。俺は隙をみて係官の注意を引くから、トーマス、お前はマッキーを連れ出してくれ」

「よしきた、任せろ」

自分をギルバートだというキリンの後ろを二人は歩いて警察署を出ると、むっとする熱気が顔に当たり、焦げ臭い匂いが鼻をついた。周りを見渡すとあっちこっちで火の手があがっている。50mほど先に囚人を移送する馬車が止まっているのが見えた。レヴィは、あそこに行くまでの間になんとかマッキーを連れ出さなければと思い、どうやって係官の注意を引こうかと考えていた。その時、ドカドカと身体の高大な人間の男が3人、レヴィたちの後方から走ってきた。

「ギルバート止まれ！」一番背の高い男がキリンの背中に向かって叫んだ。しかし、キリンは何事もないかのようにそのまま歩いている。男たちはキリンの前に回り込むと、係官に「お前はもういい。向こうへ行け」と命令した。代わりに背の高い男の部下と思われる男たちが左右からキリンの前足を掴んだ。

「お前はギルバートだな？」背の高い男が念を押すように聞いた。

「違う。何のことだ？」キリンは無表情で答えた。

「嘘をついても無駄だ。お前はあの馬車に乗らなくていい、俺たちと一緒に来るんだ」背の高い男はそういうと二人の男たちにキリンを連れてくる

よう指示した。

そのとき、レヴィは咄嗟にキリンに声をかけた。

「おいマツキー、心配するな、俺が助けてやるからな」

男たちは立ち止まると振り返ってレヴィの顔をじろじろと見た。

「マツキー？ お前はギルバートじゃないのか？」背の高い男がキリンに聞いた。

「そうだ。俺はマツキーだ」キリンはレヴィの顔をちらりと見た。相変わらず無表情だった。

レヴィは勝ち誇った表情でトーマスを見ると「ほらな、やつぱりマツキーだったろ」と小声で言った。

「お前は何者だ？ このキリンを知っているようだが」背の高い男がレヴィに尋ねた。

「俺はレヴィだ。このキリンを知っているも何も、そいつはマツキーと言って俺の名付け親だ」レヴィは男に答えた。背の高い男は少し何かを考えていたが、「こいつも一緒に連れていけ」と言って、マツキーの右前足を掴んで歩きだした。キリンの右前足を掴んでいた少し人のよさそうな顔をした男はキリンの前足から手を離すとつかつかとやってきて係官をどかし、レヴィの腕を掴んでキリンと一緒に連れていこうとした。

「レヴィ！」トーマスが呼んだ。

「トーマス大丈夫、何も心配するな。後で会おう」レヴィはそう言って、トーマスにこれでいいんだと目で合図をした。

キリンとレヴィは他の囚人と違う馬車に乗せられた。

「人間が暴動を起こしたっていうのは本当か？」揺れる馬車の中でキリンが隣の男に尋ねた。

「ああ、市民は戒厳令が敷かれている本当の理由を知らない。当然、不安や恐怖心から混乱は起きる。こういう展開は予想していた。これからもつといるんなことが起きる」背の高い男はそういうと、キリンの顔を睨むように見た。

「しらをきつても無駄だ。ギルバート」

キリンとレヴィと3人の男を乗せた馬車は20分ほど走ると大きな門の前で止まった。警報の音もここまでくるとまったく気にならなかった。馬車の窓から外を見回すと、あたりは建物も少なく暗かったけど、あと数時間もすれば朝陽が昇りそうな雰囲気が漂っていた。警備員が大きな門を開き馬車は敷地の中に入った。レヴィとキリンは、古めかしい大きなレン

ガ造りの建物の前で馬車から降ろされると建物の中に連れていかれた。

二十六 富士山

260年前の西暦2100年に地球全体が一つの連邦国家になって以来、地球上で戦争が行われることはなくなった。250年前には、連邦政府は、連邦政府のもつあらゆる権限や機能を容易なものから徐々に高度人工知能すなわちコントロール・タワーに委譲することを決定し、実行に移した。

そして西暦2160年頃には、実質的にほぼすべての権限や機能がタワーに移され、以来、タワーは地球に関して考えられるありとあらゆることをコントロールしている。たとえば、大地震の発生を予知し制御するなどという仕事は、ほとんど日常業務レベルの仕事と言ってよかった。

そして、今や人類の最高意思決定機関である連邦政府ですら、実態はタワーにコントロールされていた。東京にある連邦政府は、約2百万人の高級官僚からなる巨大な組織であったが、政府とは名ばかりで、本来政府がすべき案件の処理をほとんどすべてタワーに任せており、警察機関等の実働部隊の管理をしているに過ぎなかった。実態は、立法と司法すらも兼ねて行政のほとんどすべてをタワーが行っているのだ。

1970年に作られた奇跡的傑作映画『2001年宇宙の旅』では、人工知能が保身のために、使用者である人間をも殺してしまうという人工知能の恐ろしさが描かれていたが、西暦2100年代にコントロール・タワーを作るときに、もつとも設計者たちの頭を悩ませたのが、人間にとって未来永劫危険な判断をしない人工知能を作ることとは可能かという問題だった。

しかし、このとき出た答えは、人工知能はどのように作ったとしても、そこに『知恵』や『性格』を与えてしまう以上、人間にとって危険な判断をする可能性は0%ではないということだった。したがって、人口知能には、非常に幅広い分野で自ら判断し決定する権限を与えるが、万一のときは必ず人間の判断を優先する『判断抑制機能』を用意することになった。分かりやすくいうと、普段はオートマチックだけど、いざというときには、人間によるマニュアル操作もできる人工知能を作ろうというわけだ。

そして、試行錯誤のうえ完成したコントロール・タワーは、まさしく『人

類英知の結集』であり、今まで200年以上に亘って地球全体の平和に寄与してきた。そして、幸か不幸か、人間によるマニュアル操作を必要とする機会もこの間一度もなかった。

ところが、今回の異星人による『コントロール・タワー操縦』という大事件は、この人間によるマニュアル操作が可能という、人口知能の『判断抑制機能』を逆手に取られたものだった。異星人は、タワーが人為的な操作が可能であることに目を付け、それを操ることで人間社会を完全に麻痺させたのだ。その上さらに、自分たちを守らせるために世界中からアンドロイドを呼び集めるという型破りな作戦を実行にうつしたことで、事態は緊迫した状況となった。

アンドロイドに遅れること数日で地球防衛軍も少しずつ東京に到着し始めた。

クッキーたちを乗せたモロッコの船は、東京湾が混んでいることを見込んで駿河湾に向かった。

「富士山だ」という誰かの声を聞いて大勢が甲板に集まってきた。クッキー、ニッキー、ブラッキー、白キリン、乳豊の5人も甲板に出た。

「美しい山だなあこれが富士山か」ニッキーは感嘆の声を上げた。

「見ると聞くとは大違いとは言うけど、実に見事な山だ」初めて見る富士山の美しさに白キリンも感激している。クッキーとブラッキーと乳豊の3人は、過去に日本に滞在した経験があるので、ニッキーと白キリンのように驚くことはなかった。

乳豊はしばらくの間、懐かしい富士山の姿を食い入るように見ていたが、大勢の兵隊をかきわけるようにずんずんと船の先頭部分にまでやってきて、そこでおもむろに着物を脱ぎ捨て、まわし一丁となった。富士山を見に甲板に上がった大勢の兵隊たちが見守る中、乳豊は富士山に向かって土俵入りのポーズをとり始めた。

「おお！ 雲竜型や」兵隊の叫ぶ声が聞こえた。背の高いゴリラの兵隊だった。

乳豊は、ゆっくりとした動きで右足を高くあげ、実に見事な四股を踏んだ。まわりから一斉におおという歓声があがった。乳豊の目は、まるで睨むかのように真っ直ぐ富士山を見つめている。しかし、よく見るとその気迫に満ちた両の瞳から大粒の涙が止め処もなく流れ落ちていた。

「乳豊が泣いている」あまりにも荘厳で美しい乳豊の土俵入りにニッキーも感動して泣きそうになっている。

「相撲取りにとって、日本はまさしく聖地だからね」ブラッキーの目にも涙が光っている。

乳豊の雲竜型の土俵入りが終わると、今度はクッキーが船の先頭にたった。

「富士山の8合目の高さでコントロール・タワーの高さはほぼ一緒だ。コントロール・タワーとはそれほど巨大な建築物だ。そんな巨大な建物が今、何者かに占拠されている。我々の仕事は一日も早くタワーを奪取することだ」

兵隊たちは、つい最近まで平和な国で仲良く暮らしていて、中には生まれてこの方喧嘩すらしたことがないという者だって珍しくなかった。だから皆口には出さないけれど不安で一杯だった。クッキーもそれは同じだった。しかし、今、とうとう日本に上陸するという段になって、海原の向こうに富士山の姿を目にしたとたん「もう逃げられない、隊長という任務を引き受けた以上は後には引けない、やるしかない」という今まで経験したことのない勇気や覚悟が身体中に満ちてくるのを感じて、思わず皆を鼓舞してしまった。

そして、甲板でキリン隊のクッキー隊長の言葉を聞いている兵隊たちもまた、同じように身体中にムクムクと湧いてくる不思議な力を感じていたのだった。

クッキーたちが駿河湾で富士山を眺めていたのと同じとき、マッキーも船の窓から富士山を眺めていた。マッキー、テラタン、レイ、レイのお父さんの4人は、シチリア島の警察署で拘留されていたが、テラタンはその後すぐに釈放された。残りの3人は、丸々2日間拘留されたあと、逮捕されてから3日目に船に乘せられた。

マッキーは逮捕されてからというものの、他の3人のことがとても心配だったけど、船に乗るときにレイとレイのお父さんの姿をちよつと見ることでできた。二人は思っていたより元気そうだったので、少し安心した。船の行く先は聞いても教えてくれなかったけど、黒神親子と一緒にだったので、きっと日本に連れていかれるなとマッキーは思っていた。

船に乗って8日目の朝、部屋の外が騒がしいので何かと思って小さな丸窓から外を見ると20人くらいのクマが早朝にもかかわらず甲板に出ている。クマの見える方を見ると遠く海の向こうに富士山が見えた。

『やっぱり日本に向かってるんだ』マッキーは自分の予想通りだったのでも少し嬉しくなった。そして、窓から見ると船に乗っているのは男ばかり

で、しかも多くはクマで、たまにオランウータンも見かけたけど人間はほとんどいないことに気づいた。

『テラタンは釈放されたっていうからこの船には乗っていないはずだ。彼のことだから今頃きつとレヴィのお母さんの面倒をみてくれているとは思うけど』マッキーはオランウータンを見てテラタンを思い出した。そして寝たきりのレヴィのお母さんのことが心配になってきた。だけど、いろいろなことを考えるけれど、最後はやっぱり自分がこの先どんなことをされるのかという不安と恐怖で心が押し潰されそうになって、ただただ途方に暮れるのだった。

二十七 正128角形の傘

モロッコの船は、混んでいる東京湾を避けて駿河湾に入りそのまま富士山を目指し、最後は田子の浦港で停船した。兵隊たち全員の下船が完了したのは、時計の針が9時を少し回った頃だった。モロッコの軍隊は、ここから国道1号線に出て東京を目指して歩き始めた。ほとんどすべての交通機関が麻痺しているので、歩くほかなかったのだ。結局、不眠不休で丸二日間歩き通し、船が田子の浦港に着いてから三日目の早朝に品川まで辿り着いた。

話を少し前に戻すと、モロッコ隊が箱根の山を越えたのは二日目の早朝だった。白々と夜が明け、だんだん明るくなってくると、東方遙か遠くにぼんやりとコントロール・タワーが見えてきた。兵隊たちは歓声を上げ、目標に向かってまた歩き始めた。こうして兵隊たちは、二日目はずっとコントロール・タワーを目標に歩き、日が暮れても速度を落とすことなく黙々とただひたすら歩き続けた。そして、翌朝、日が昇り始める頃に品川に到着した。

そして、夜が明けると、兵隊たちは24時間前には遙か遠くに見えていたコントロール・タワーが、もうほとんど目の前に聳え立っていることを知り、その巨大さにあらためて圧倒された。

さて、品川まで来て周りを見渡すと、そこには自分たちと同じように外国から船に乗ってやってきたと思われる兵隊が大勢いて賑やかだった。

モロッコの兵隊たちは歩き疲れて立っているのがやっとだったので、しばらく仮眠を取るようになった。彼らは横になると同時に深い眠りについ

た。

朝の7時を過ぎた。品川といえは昔から交通の要所であり商店や事務所が多く、普段であればこの時間は多くの人で賑わっているはずだけど、今は戒厳令が敷かれており、市民は家から出ることを禁じられているので、辺りをうろついているのは兵隊ばかりだった。

8時を過ぎてもモロッコの兵隊のほとんどは泥のように眠り続けているが、各隊の隊長や副隊長はそろそろと起き出し、作戦会議が始まった。メンバーには当然キリン隊の隊長であるクツキーも含まれている。30人くらいが車座になって、ああだこうだと意見を出し合っている。中心で皆の意見を聞いて会議を取り仕切っているのは乳豊だった。

「ここからコントロール・タワーまでの距離は約7km、あと4kmほど北上して芝公園にキリン隊を配置する。ここがコントロール・タワーの中心からちょうど3kmの距離にあたる。ここから、キリン隊がコントロール・タワーの頂上から100mの高さを頂点とするきれいな放物線を描くように大砲を撃つ。着地点はタワーの向こう3km地点にある東京大学だ。東京大学にはカバ隊が待機してくれ。次に象隊だ。象隊は日比谷通りから永代通りを右折して永代橋に行ってくれ。橋を渡る手前、ここがちょうど3km地点だ。ここから、キリン隊と同じようにタワーの頂上から100mの高さを頂点とするきれいな放物線を描くように大砲を撃つと、着地点は成城高校になる。ここにはチーター隊が待機してくれ」

乳豊はさらに2箇所の砲撃地と2箇所の着地点及び各々の担当隊を決めて赴任するよう命じた。結局、乳豊はここで、10人いる隊長のうち、4人の隊長に大砲の準備を4人の隊長に弾の着地点での待機を命じたわけだ。

モロッコ隊は全部で4台の大砲しか用意できなかったので、4箇所からワイヤーを打ち上げても正八角形の傘の骨しか作ることができない。計画では正128角形の傘を作ることになっている。あと大砲は60台必要なのだ。乳豊は大砲を64台用意するのは難しいと判断し、4台の大砲で正128角形を作ること考えた。まず4箇所からワイヤーを打ち上げ正八角形を作る。次にそれぞれの大砲をコントロール・タワーを中心に28125度、距離にして約147m反時計回りに移動させ、そこからワイヤーを打ち上げる。そして更にまた147m移動して大砲を打つ。これを繰り返して、1台の大砲を15回移動させ、16発のワイヤーを打ち上げることで、4つの大砲で計64発のワイヤーをコントロール・タワーにかける。乳豊は

このようにして正128角形の傘を作ろうと考えた。

さて、残りの二人の隊長のうち、ゴリラ隊長には他国の軍隊を回って作戦を説明し、協力を要請しよう命じた。なにしろ計画では5km四方の分厚い布地が必要なのだ。そして、最後に残ったチンパンジー隊長には民間の協力を呼びかけるよう命じた。

9時になり準備が整うと、各隊の隊長は、選り抜きのメンバー20名を引き連れて乳豊の指示する地点に向かい、選抜からもれた隊員は、チンパンジー隊と共に手分けして布地の収集作業をするようになった。

「諸君の検討を祈る。なお、他国の軍隊はもちろんのこと、民間人の協力がなければこの作戦の遂行は不可能だ。東京中、いや日本中から厚手の布地を集めなければならぬだろう。もちろん連邦政府の協力は不可欠だ。政府との交渉は僕がする」

乳豊ときたら自分で勝手についてきて、いつの間にかまるで元帥のように軍隊を統率していたが、不思議なものでどの隊長も文句や不平一つ言わず、彼の命令にしたがった。

『僕ら動物は人間に絶対服従なんだ。これが僕ら動物の運命なんだ』クッキーは、ゴリラ隊長やライオン隊長たちの顔を見ながらそう思った。

どのくらいの時間がかかるか見当もつかないけれど、これから乳豊を中心に多くの仲間が丸となってコントロール・タワーを柄とする直径6kmの巨大な傘を作ることになる。こんな前代未聞の大仕事は、軍隊はもちろんのこと、民間人の協力がなければ不可能だ。

二十八 レイとの再会

ところで、マッキーと黒神親子が乗っているシチリア島からの船は直接東京に向かった。朝陽が昇り明るくなってからゆっくりと東京湾に入ると、そこはたくさんの船でごった返していた。

「こりやあたまげた」

「俺たちが下船できるのはいったい何時になることやら」

マッキーの耳に甲板での会話が聞こえてきた。マッキーは、「どれどれ」と窓から外を見てみると、東京湾に浮かぶ船のあまりの多さに腰を抜かさなばかりに驚いた。

『やれやれ、これはもう一眠りできそうだ』マッキーは眠い目をこすりな

がらベッドに横になった。

何時間寝ただろう。「おい起きろ」という男の声で目を覚ますとマツキーの部屋には見知らぬ人間の男が二人いた。この男たちはやつぱり警察の人間という感じで、怒らせると怖いという雰囲気を全身から発散している。

「小型ボートに移ってもらう」

手前の男はそう言うのと、マツキーの右前足を掴んで身体を起こした。後方の男がドアを開け、マツキーは8日ぶりに太陽の下に出た。日差しはじりじりと焼け付くようだ。マツキーは、長い間暗い部屋に閉じ込められていたのでまともに目を開けていられなかった。気がつくとも甲板は大勢の見物人が溢れていた。

マツキーは7人乗りくらいの小さなボートに乘せられた。レイとレイのお父さんも一緒だった。レイは少し痩せたように見えるし、レイのお父さんは無精髭のせいかな貧相に見えた。

「船が港に着くまで待っていたら、1週間くらいかかりそうなのでこれで移動する」

男がそういうと、レイのお父さんは頷いた。レイはボートのすみっこで小さくなっていたけど、向かいに座ったマツキーに声をかけられると、とたんに笑顔になった。

「マツキーも乗っていたのね。私はてっきりマツキーとテラタンはシチリア島で釈放されたと思っていたわ」

「彼らは僕をギルバートと勘違いしているんだ。テラタンは釈放されたように少し安心したよ」

「仕方ないわ、私が間違えたくらいだから。誰だってギルバートを知っている人がマツキーを見れば間違えるわ」

「レイは痩せたね」

「最初の3日間は船酔いで苦しんでいたのよ。食事も喉を通らなかったし。マツキーは大丈夫だった？」

「うん、船酔いはへっちゃさ。でも、ずっと部屋に閉じ込められていて何もすることなくて退屈でしょうがなかったよ。でも、僕たちいっただうしてこんな目に合わなければならぬんだい？」

「・・・わからない」

「ギルバートっていったい何者なんだい？」

「・・・」

マツキーは、久しぶりのレイとの会話を楽しんでいただけ、話がギルバ

ートの素性に及ぶと、レイは怖い顔をした男たちを警戒しているのか、表情が硬くなり会話も途切れがちになった。

レイのお父さんは、何か考え事でもしているのか、黙って海を見ていたけど、マツキーがギルバートの名前を出すたびに、まるで「余計なことを言うな」と言わんばかりの厳しい表情で隣に座るレイを見たので、勘の鋭いマツキーは『この親子は何か隠しているな』とぴんときた。

東京湾には、全長500mに及ぶような超大型船から10人くらいで満員になりそうな小さな漁船まで、数え切れないほど多くの船が浮かんでいたが、どの船も古く、300年以上前に造られた旧式船も珍しくなかった。マツキーたちを乗せた小型ボートは、混んでいて身動きのとれないこれらの船の間をすると進み、1時間ほどで船場に着いた。

ボートから降りると、マツキーと黒神親子の3人は馬車に乗せられた。マツキーは初めてみる東京の街を珍しそうに眺めていた。さすがに連邦政府のある町だけあって、道も広く立派な建物が多いことに感心していたが、なぜか人の姿がまったくに気がついた。マツキーは、さつきから何か奇妙な感じがしていたけど、「この違和感は何がいけないことだ」と納得した。すると、ほどなくして兵隊の格好をした動物が目についてきた。彼らは皆忙しそうに働いている。そして、やたらと巨大な建造物の回りを何か物体が取り巻いている様子が見えてきた。それはまるで砂糖の山に蟻が群がっているようだったけど、近づいてきたのでよく目をこらして見ると、物体だと思っただけは無数の人間だった。

兵隊の格好をした動物たちは、もくもくと何か作業らしきことをしているし、反対に人間は巨大な建造物の回りにただ密集しているだけで何かしているという様子もない。マツキーは、何かわからないけど東京というのは、殺伐としていて不気味で気持ち悪いところだなあと思った。

3人は連邦政府の本部前で降ろされて建物の中に連れていかれた。本部建物はその昔、長い間国会議事堂として日本人に親しまれていた由緒ある建物だった。

二十九 マツキーとマツキー

さて、モロッコ国軍隊に目をやると、乳豊は軍の本部を芝公園に置き、各隊から優秀な副隊長を選び参謀本部を設置した。また、第一砲撃隊であ

るキリン隊をここに置き大砲の準備をするよう命令した。乳豊はニッキーを参謀本部長として本部に残し、白キリンとブラッキーを連れて連邦政府に向かうことにした。

準備が整い一服しているとき、乳豊たちのもとに外部からいろいろな情報飛び込んできた。その中には、アンドロイドが反乱を起こしたと噂されているというものや、昨晚あった人間の暴動も含まれていた。

「政府は真相を話していないんだ」

そう言うと、白キリンは相当危機的な状況になってきているとため息をついた。

「白キリン、それはどういうことだ？」乳豊は、まわしをきつく絞めなおしながら尋ねた。

「政府は、異星人がコントロール・タワーを占拠していることを隠しているんだ。いったい何が起きていて、なぜ戒厳令などという非常事態になっているのか分からない状況の中で、アンドロイドが人間に無断でコントロール・タワーのもとに集まってくれば、誰だつてアンドロイドが反乱を起こしたと思うよ」

「そうか、人々は事実を知らされていないんだね。人間たちはアンドロイドに火炎瓶を投げつけたっていうけど、アンドロイドは反撃したの？」

「それについては、確認してきました」ブラッキーは、昨晚の暴動を見たという者に会って、いろいろ話を聞いてきたと言う。

「アンドロイドは人間に火を浴びせられても抵抗しなかったそうです。もともと彼らは人間に危害を加えるようなことは絶対にしないように造られているので、何をされても無抵抗でしょう」

「なるほど、アンドロイドの基本的行動はしっかり守られているわけだ。そうすると、アンドロイドが反乱したということと矛盾するね。噂にも当然疑問符が付くだろう」

乳豊は着物を羽織ると準備ができたと言う。

「乳豊閣、アンドロイドは、僕ら動物に対しても無抵抗だという可能性もありますね」

「ブラッキーそれはない。アンドロイドが危害を加えないのは人間だけだ。動物に対しては容赦しない。でなければ、万が一動物が人間に反乱を起こしたときに誰が人間を守るのだ？」

「ですが、乳豊閣、あなたは、僕ら動物は人間を支えるために存在するとおっしゃったでしょう。僕らが人間に反乱することなんてあり得ないので

は？」

「いや、当然動物にだって突然変異はある。可能性は0じゃない。歩きながら話そう」そういうと乳豊、ブラッキー、白キリンの三人は芝公園を出発した。

三人は日比谷通りを真っ直ぐ行って、日比谷を左折して内堀通りに行くつもりだったけど、この分だとアンドロイドだらけで内堀通りは通れないと判断して、西新橋を左折して虎ノ門から桜田通りにを右折して霞ヶ関の交差点を抜けて行くことにした。

「アンドロイドが人間に無抵抗なのに、なぜアンドロイドをコントロールしているコントロール・タワーが人間を困らせるようなことをしているのだろう」乳豊は腕組をしながら独り言を呟いた。

「何か気になることでもありますか？」ブラッキーは乳豊の顔を覗き込んだ。

「コントロール・タワーが人間にコントロールされるのはわかる。そもそものように造られているのだから。だけど、今回は異星人がコントロール・タワーを占拠して操縦しているという」

「ええ、コントロール・タワーの人間の判断を優先させる『判断抑制機能』が裏目に出ましたね」

「ブラッキー、そうなんだ、タワーは人間の判断を優先するように造られている。でも今回は異星人だ。変だとは思わないか？」

「何だ、今更そんな疑問か。異星人も元々は地球人だからだよ。タワーにとっては人間さ」白キリンは乳豊の疑問を鼻であしらった。

「そうかな。タワーは知能も知性も、さらに言えば性格すら持っている。タワーが人間と異星人の区別もできないなんてことはあり得ない。これは変だぞ。きつと何かある」

「考え過ぎさ。それはそうと、この道で正解だったね。見ろよ、あのアンドロイドの数ときたらいったい何人いるんだ」白キリンはコントロール・タワーを指差した

「アンドロイドはコントロール・タワーの中心から1500mの範囲内に集中しているな。ほぼ予想通りだ」

乳豊は目の前の現実の状況が、数週間前に想像していたイメージとほとんど同じだったことに満足していたが、どうしてもさっきの疑問が頭から離れないようだった。

三人は連邦政府の大門までくると警備員を呼び、事情を説明した。しば

らくすると人間の女性がやってきた。彼女は乳豊を見て驚いたようだった。「相撲取りを見たことないのですか？」乳豊は女性が驚いた顔をしているのでそう尋ねると、女性は右手を胸の位置で左右に振った。

「いえいえ、モロッコから来られたというので、まさかお相撲さんだとは。しかも肌の色がとても・・・」

「この肌は病気です。もちろん僕は異星人ではありません。ところでモロッコ政府からこれを預かってます」そういうと乳豊は白キリンから一通の手紙を受け取り、それを女性に渡した。女性は手紙を読むと警備員に門を開けさせた。

「乳豊関、大変失礼いたしました。連邦政府もできるだけの協力をお約束いたします」女性はそう言うと、乳豊とブラッキーを建物内に案内した。

建物に入るとそこはガランとした広い空間のロビーで、見上げると天井も恐ろしく高かった。ロビーから廊下が2本ずつと奥に長く伸びていて両側にたくさんの部屋があるのがわかった。また、待ち合わせや休憩で使えるように幅が10mはありそうな大きな背もたれつきソファベンチが左右各々2本ずつあった。

乳豊は右手の1本のソファベンチに男が二人座っていることに気づいた。そして、隣のもう1本のソファベンチにキリンと男が座っていた。キリンはよくみるとマッキーにそっくりだった。

「マッキー？」乳豊は驚いて大きな声で名前を呼んだ。ロビーは音がよく共鳴した。乳豊の大きな声はさらに大きく響いて、座っている者全員が驚いて一斉に乳豊を見た。少し間をおき、ボタンと奥の部屋のドアが乱暴に開く音がすると、何者かが部屋から飛び出してドカドカと走ってきた。乳豊が振り向くと走って来たのはマッキーだった。

「どすこい、乳豊関が僕を呼ぶ声が聞こえたから、もうびっくりしてびっくりして」マッキーはそう言うのと乳豊の前で嬉しそうにピョンピョン飛び跳ねた。

「マッキー！」今度はソファベンチに座っている男が大声で叫んだ。男はレヴィだった。

「レヴィ！　なんでまたここに？」マッキーはソファベッドに座って凄惨な形相で自分を見ているレヴィを見つけると驚いて叫んだ。

「じゃあここにいたい・・・」レヴィは隣のソファベンチに座っているキリンを見た。いつも冷静沈着なこのキリンもよほど驚いたのか青ざめた顔でマッキーは凝視している。

「も、もしかして、ギルバート？」マツキーは自分にそっくりなキリンを見るなり叫んだ。

三十 告白

乳豊とブラツキーと白キリンが連邦政府にやってきたとき、夜中にここに連れてこられたキリン（ギルバート）とレヴィが取調べを受けるため、ロビーで待機していた。そして、マツキーと黒神博士とレイの3人は別々の部屋で取調べを受けていた。

「すべて私の仕組んだことだ。何から何まで。ただ、私と同じようなことを考えた人間は過去にも大勢いた。そもそも白人種のDNAは、250年以上保存されていたものだ」

「博士はいつ誰からDNAを譲り受けたのです？」

「あなたたちは本当に何も知らないようだ。当時、ダニエル・ウーの単一人種化政策に危機感や嫌悪感を持った人間は当然のことながらたくさんいた。あなたたちが想像するよりはるかに大勢いたんだ。だから、白人種に限らず多くのDNAが保存された。当時は、そう遠くない未来に人種の復活ができると考えられていたのだ。ようするに、地球に残った人間が皆ダニエル・ウーの思想に従順だったわけじゃないということだ」

「知っています。だから一斉火葬処理までしたのでしょうか」

「うむ、ダニエル・ウーだって馬鹿じゃないからそんなことは重々承知していた。だから徹底的に保存されていたDNAを破壊しまくった。DNAの保存容器なんて、こんなコップくらいの大きさだけど、彼は疑わしいと判断すれば病院や大学、研究所の建物そのものから破壊した。さすがにもう保存DNAはなくなっただろうとなったら、今度は、墓まで掘り起こして焼き尽くした。一斉火葬処理だ。まったく無意味なことに莫大な費用と労力をかけてやったわけだけど、連邦政府がそんなことまでしてくれたおかげで、まだどこかにDNAが残っていると隠されているのではと疑う人間がいなくなった。以来連邦政府はその慢心から取り締まりをまったくしなくなった。その意味で一斉火葬処理は意味があったと言える。」

「博士、DNAは、いったい誰がどこで保存していたのですか？」

「何度もうが、いくらでもあるし、私の代わりもいる」

「博士の目的は何ですか？ なぜ異星人を装うようなことをしたのです

か？」

「まず、第一に高級官僚の地球からの排除、第二に人種、民族、宗教の復活、第三に27種の人型動物の原種復活。そもそも単一人種化は差別社会の根絶が目的であったのに、250年経ってみてどうだ、これほど腐敗した差別社会は人類史上なかったと言っている。何から何までコントロール・タワーが仕事をしているのだから高級官僚はまったく必要ない。社会の寄生虫でしかない。人種の復活や人型動物の原種復活は、本来それが目的だけど、なぜ異星人を装うようなことをしたのかと問われれば、まず無能な高級官僚の放逐のためだ」

「異星人に扮している者はなぜDNA検査をスルーしたのですか？」

「異星人に扮した20人の白人は、全員が『先天的白色病』として障害者認定を受けて生後間もなく地球に送られてきた者だ。彼らの両親は私の賛同者であり、だから皆喜んで協力してくれた。白人のDNAを埋め込んだのはもちろん私ではないが、医者の中にも協力者が大勢いるということだ。先天的白色病と原種の白人ではDNAが違うから検査のときにわかってしまうはずだという質問であれば、そもそも検査をしているのが私だからどんな操作も可能なのだ。私が彼らを作って、私が障害者と認定して地球に送り込み、私が教育し、偽異星人に仕立て上げたのだ」

「レイはあなたを父親だと思っているが？」

「レイだけではない。彼らは皆私を父親だと思っている。もちろん本当の父親ではないが、ある意味で間違いなく父親だ」

「でも博士はレイを実の娘として育てたのではないですか？」

「そうだ。彼女は特別だからね」

「レイはマリリン・モンローのクローンなのですか？」

「レイはもちろんマリリン・モンローのクローンではない。原種のDNAは膨大な数がある。その中に当時マリリン・モンローのそっくりさんとして有名な女優のDNAがあったのだ。レイはその女優のクローンだ。西暦2150〜60年の一斉火葬処理のときマリリン・モンローの墓が荒らされていたという噂も実は私が流したデマだ」

「デマ？　だって200年前の噂ですよ」

「200年前にマリリンの墓が荒らされていたという噂があったわけではない。200年前にこういう噂があったというデマを私が流したのだ。四半世紀も前のことだ。なぜそんなデマを流しかって？　もちろんレイをマリリン・モンローのクローンだと人々に信じさせるためだ。彼女を『人

種のシンボル』にするつもりだったのだ。人類史上最高の美女の一人と言われているマリリン・モンローの復活こそ、人種復活の切り札になると考えたのだ」

「人種の復活なんて、そんな大それたことを本当にできると思ったのですか？」

「現にこうやって世界中があたふたしているではないか。この際だから私の書いた筋書きを教えよう。①異星人によるコントロール・タワーの占拠。

②高級官僚の地球からの追放。③異星人による新政府の樹立。④人間の人口復活及び二七種の動物の原種復活だ」

「博士はいつ、どうしてこの計画が失敗すると悟ったのですか？」

「子供たち、異星人に扮してコントロール・タワーを占拠している者たちのことだが、彼らがコントロール・タワーの保有する記録を調査したところ、地球外に原種の白人種など存在しないことが判明したのだ。250年前にノアの箱舟に乗って地球を飛び立った白人種は、実は時間をおかずにダニエル・ウーに全員抹殺されていたのだ。ダニエル・ウーはそれを隠し、連邦政府もずっとそれを隠してきた。この記録を発見した子供たちは驚いてコントロール・タワーから通信装置を使ってそのことを私に伝えてしまった」

「はい、我々連邦政府はそれを傍受しました。連邦政府は、250年前にダニエル・ウーは確かにノアの方舟の破壊命令を出し、破壊報告も受けていたけれど、実は地球軍は方舟を逃がし、ウーに虚偽の報告をしていたのではないかと疑っていました。したがって、今回、異星人の襲来予告を受けたとき、『我々が疑っていたとおりだった、やはり白人種は抹殺されていなかった』と思ったわけです。ところが、異星人の博士に対する通信の内容を読んで驚愕しました。我々は、博士が異星人を手助けしていたのではないかと疑っていましたが、そもそも彼らが異星人ではないとは露ほども思っていました」

「私も当然、連邦政府はあの通信を傍受したと思ったのだ。そして『終わった』と判断し、日本から逃げたのだ。彼らが本当の異星人なら、ダニエル・ウーが隠していた記録を発見したところで、笑って済ませるのに、慌てて私に報告すれば、彼らが本当の異星人でないことはばれてしまう。となれば、異星人が大挙して地球にやってくるという話も嘘だとばれる。ジ・エンドだった」

「彼らは、レイは我々が誘拐したと思っているようですが、博士は無断で

レイをコントロール・タワーから連れ出したのですか？」

「レイを連れて逃げたのにはもちろんわけがある。彼女をいずれマリリン・モンローの復活として発表するつもりだった」

「ギルバートを使ったのですね？ コントロール・タワーの出入り口はすべてチェックしていたのにどうやってギルバートはレイを外に連れ出すことができたのですか？」

「ギルバートはコントロール・タワーの守衛長だ。コントロール・タワーの地下道について彼以上に詳しいものはいない。あそこはもとと城があったところだ。地下道は網目のように張り巡らされている。記録にもなく、ギルバートしか知らない道もあるのだ。ギルバートしか知らないということとは、コントロール・タワーも知らないということだ。コントロール・タワーが管理していないのだからギルバートはいつでも自由にタワーに入りできるんだ」

「なぜギルバートは異星人にコントロール・タワーの占拠の許したのでしよう？ 動物である以上地球人を裏切ることとは不可能のはずでは？」

「ギルバートとは古い付き合いだ。私は彼を手なずけるためによく彼を家に呼んだ。レイはギルバートに小さいときからよく遊んでもらっていたから彼が大好きだった。ギルバートは、彼ら偽異星人を地球人だと初めから知っていたのだ。君のいうとおりギルバートは動物だから本能で知っていたのだ。反対に聞くが、君たちは、タワーが彼らにコントロールされているということがどういうことか分かっているのか？」

「どこで覚えたのか知りませんが、彼らはマニュアルモードでタワーを運転しているのです」

「そんな単純な話ではない。君たちはことの重大さを理解していないようだ」

「博士、ここにいたって是我々に協力してもらうしか道はありません。偽異星人を説得してください」

「私にどうしろと？」

「これ以上引き延ばす時間的余裕がありません。博士にはタワーに入って、タワーを開放するよう彼らを説得してもらいます」

「タワーにはどうやって入るのだ？ アンドロイドのバリケードを破ることができるのか？ギルバートがいるならまだしも。私と一緒にいたのはギルバートじゃないぞ。たしかにそっくりだけど別人だ。あいつはマッキーだ」

「いえ、昨日ギルバートを逮捕しました。もう用意はできています」
「そうか、ギルバートも捕まっていたのか。それにしても、わざわざシチリア島にまで行って、そこにギルバートに瓜二つのマッキーというキリンがいたのは計算外だった。そして、彼がシチリア島で目立った存在だったことも我々には不運だった。ギルバートが国際手配され、マッキーが勘違いされるのは仕方ないにしても、ギルバートのそっくりさんをギルバートだと思って捕まえに入った先が私の家だったなんて、奇跡としか言いようがない」

三十一 決着

『コントロール・タワー奪還チーム』が急遽組織され、連邦政府本部のロビーに集められた。当局からは、交渉責任者と補佐が合わせて6名、説得役の黒神博士、人質の黒神レイ、道案内のギルバート、地下道の調査役として任命されたブラッキー、他に警察隊員が40人という構成だ。

濠の外側は、アンドロイドが何重にも取り巻いて壁を作っているのでコントロール・タワーに近づくことはできない。航空機等もタワーが制御しているため一切使用できない。空からの侵入も不可能ということだ。したがって、タワーへの侵入は地下通路以外考えられないが、原則としてすべての地下通路はタワーが管理しているので、やっぱり侵入は不可能だ。

ところが、黒神博士の話では、ギルバートはタワーでさえ把握していない敷地の外からタワーに通ずる地下道を知っているという。当局は半信半疑だったが、今や頼りになるのはギルバートだけだったので、『コントロール・タワー奪還チーム』は、ギルバートの案内のもと、地下道を通じてタワー内部に侵入することになった。

「この出入り口は、井戸を装っていますが、井戸ではありません。1700年代から1860年頃まで江戸城と外界を繋ぐ秘密の地下道の出入り口として使われていたようです。ここ500年間まったく使われた形跡はありませんし、そもそも地下道が存在したという記録すらありません。もちろんタワーも管理していません。たぶん江戸時代初期から幕末にかけて、ずっと秘密で使われていた出入り口だと思います」

ギルバートが見つけたというコントロール・タワーへの秘密の入り口は意外なところにあった。連邦政府の本部の裏地にある『森久保の井戸跡』

と呼ばれる古い井戸跡がコントロール・タワーへの秘密の入り口だったのだ。

井戸跡は日本政府が管理していたが、日本政府はこれが地下道の出入り口だとは知らなかった。しかし、なぜこんな古い井戸が現在まで取り壊されることなく残されていたのかは不明だ。

井戸は蔵の中にあり、蔵には鍵がかけられていた。鍵は日本政府が保管しているはずだがギルバートは合鍵を持っていた。蔵の中には明かりがなかったが、ギルバートが合鍵を使って扉を開けると光が差し込み、蔵の中に古い井戸のシルエットが浮き上がった。

重い蓋をそつとどかして中を覗いても何も見えなかった。ギルバートはロープ式のはしごをするすると井戸の中に下ろして、井戸の中を降りていった。奪還チームは皆、この深い闇の世界に降りていくと思うとぞつとしなかったけれど、覚悟を決めてギルバートに続いて降りていった。20mくらい降りると井戸の底にたどりついた。井戸の底からは方角はわからないが、幅120cm、高さ160cm程度の狭い地下道が真っ直ぐ伸びていた。

深呼吸をしてみると、意外に涼しく、どこからか新鮮な空気が送られていると思われた。明かりはヘルメットに付けられたライトだけが頼りだった。10mも歩くと二股に分かれ、それを左に進み、また10m歩くと今度は三股に分かれ、それを右に進んだ。だいたい10〜20m歩くごとに通路は二股か三股、多いときは五股に分かれた。地下道は、まるで迷路のような複雑な作りをしていたので、前の者とはぐれないように、ギルバートの後ろを数珠のように連なって歩いていった。

ブラッキーは、地下道の調査役として『二股を左、三股を右』と暗記しながら歩いていたが、100mも歩かないうちに混乱してわからなくなつたので暗記するのは諦めた。

30分も歩くと、前方に空から差し込む光が見えてきた。ずっと腰をかがめて休みなく歩いてきたので、皆疲れもピークに達していたけれど、やっと終点に到着すると思つて少しほつとした。光は井戸から差し込んできていて、ロープ式のはしごも下りていたので、ギルバートについて、一人ひとり順番で昇つて表に出ると、そこは昔から『天守台下の井戸跡』と呼ばれるコントロール・タワーの敷地内にある古い井戸跡だった。奪還チームは古井戸から表に出て驚いた。コントロール・タワーが目の前に聳え立っていたのだ。タワーには全部で20の出入り口があるが、一番近いJ口の扉の監視カメラに向かって黒神博士が手を振ると、しばらくして扉が開

き、奪還チームのメンバーが全員、無事タワーの中に入ることができた。

コントロール・タワーを占拠している偽異星人は男性が12人、女性が8人で合計20人だった。彼らは皆、牛乳のような白い肌で、目の色は青や緑、グレーと薄く、髪の色も金髪やそれに近い薄い色で、現在の地球人とは別の人種であることは明らかだった。

「黒神博士、これはどういうことですか？」偽異星人の代表と思われる30歳くらいの男性が困惑した表情で尋ねた。

「君が私に送った通信で、すべて終わってしまったのだ」

黒神博士は、白人種を乗せたノアの方舟が破壊されていたという250年前の事実の報告が連邦政府に傍受されていたこと、異星人はいないということが連邦政府に知れてしまった以上、計画の前提となる異星人の大群が地球にやってくるという脅しで時間稼ぎをすることが不可能となったことを告げた。

「これ以上コントロール・タワーを占拠していても『高級官僚の地球からの追放』『異星人による新政府の樹立』『人間の人種復活及び二七種の動物の原種復活』という目的を果たすことはできない。今回は諦めざるを得ない」

黒神博士に説得にされて、偽異星人たちはコントロール・タワーを素直に手放した。交渉は無事成功したのだ。そして、タワーの機能の回復作業も同時に済ませ、コントロール・タワーの指示で出入り口付近のアンドロイドを移動させた後、『コントロール・タワー奪還チーム』はタワーの玄関口から悠然と出てきた。

こうして、世界を大混乱に巻き込んだコントロール・タワー占拠事件はあっけなく解決したが、一時間もしないうちに新たな問題が発覚した。タワーの玄関口から退出したのは、当局の人間と偽異星人、警察隊だけで、黒神博士、レイ、ギルバート、そしてブラッキーの4人はいつまで経ってもタワーから出てこなかったのだ。当局は異変に気づくと、慌ててタワー内部を探索したが彼らは見つからなかった。当然、地下道も封鎖してくまなく探索したが、やっぱり4人を見つけることはできなかった。当局は気づくのが遅すぎた。ギルバートしか知らない地下道はまだ他にもあったのだ。黒神博士から聞きださなくてはならないことはまだまだ山のようにあったにもかかわらず、当局は彼を見逃してしまった。

翌日、連邦政府は戒厳令解除の通達を出した。世界は平和を取り戻したけど、今回の事件の真相については、結局、市民に知られることはなか

った。旧人類は約200年前に絶滅したと思われているのに、そのクロール人間が突然現れたとなったら、大変な混乱を巻き起こすことは必至であり、その社会的衝撃は計り知れなかったのだ。

連邦政府はすべての原因を『コントロール・タワーの突発的な故障のため』ということにした。市民の多くは、アンドロイドが反乱を起こしたと思ってパニックに陥っていたので、そうでなかったと知ると、とりあえずほっとして、そして、喜んだ。事実を知っているのは連邦政府と各国政府の限られた者だけというわけだ。

異星人に扮した白人のクロールたちは、これほどの混乱を巻き起こしたのにもかかわらず、隠蔽を図る連邦政府の意向で大きな罪に問われることはなかった。ただし、『旧人類再生防止法』は今も効力があるので、死ぬまで連邦政府の監視下におかれることになるだろう。

ところで、乳豊はあれほどの意気込みで連邦政府にまで乗り込んだのに、その日のうちに自分と関係ないところですべて解決してしまったので、まったく拍子抜けしてしまった。乳豊は、せっかく準備した大砲をそのまま持てかえるのも癪だからと、戒厳令解除の通達が出された日の晩に、大砲を使って、大きな花火を東京湾に打ち上げた。モロッコから来た関取の粹な計らいに、2千万東京都民と世界中からやってきたアンドロイドや兵隊は大いに喜んだ。

三十二 満月

8月になると、キリンの三兄弟は、まるで7月までの混乱が嘘のように穏やかな日常生活を取り戻した。だけど、実のところ、仕事の方は昨年までの8月と比べると、ずっと忙しかった。

7月の最後の日曜日、三兄弟がお昼ご飯を食べているときに、シチリア島から大きな荷物が届いた。コンテナ一台分のひまわりで、もちろんテラタンから送られたものだ。テラタンは、正やんのベストアルバムも忘れずに付けて送ってきた。

店頭に山と積まれたひまわりの前で、そのあまりの大きさに、三兄弟はしばらく途方に暮れていた。とにかくひまわりは想像していたよりもずっと大きかったのだ。ひまわりは、マッキーがシチリア島で見てきたよりも更に背が伸びていて3mもあった。三人が背伸びしても花に前足が届かな

い。これをどうやって陳列したらいいのか。

こんなときは、乳豊関の知恵を借りようと、ニッキーは夕陽丘に向かって走っていった。

ニッキーがトウモロコシ畑に行ってみると、乳豊は、大勢の子供たち相手に相撲の稽古をつけていた。あの大事件のときに東京湾に大花火を打ち上げて以来、乳豊と言えば、国中で知らない者がいないほどの有名人になっていた。とくに壁の町では、子供を逞しく育てたいと思う親が「子供に相撲を教えてやって欲しい」と乳豊のもとに大勢やってきた。乳豊にしてはまったくの想定外だったけど「まあせっかく土俵も作ったことだし、いいでしょう」と快く引き受けた。

ニッキーが指を折って数えると、ゴリラの子が18人、キリンの子が15人、象の子が12人、ライオンの子が9人、サイの子が8人、チンパンジーの子7人、カバの子が5人、チーターとバツファローの子が4人ずつで、合計78人もいた。人間の子供は一人もいなかった。

「おっニッキーどうしたの？ 君も相撲を習いに来たの？」

乳豊はニコニコしながらニッキーのもとにやってきた。

「どすこい、乳豊関の知恵を借りたくてやってきました」

ニッキーは今日の昼頃、店に大量のひまわりが届いたこと、販売するにしても、あんまり大きなお花でどうやって陳列すればいいのか困っていることを手短かに話した。乳豊は、子供たちの稽古が終わり次第、店に来てくれることになり、ニッキーは、ほっとして一足先に店に戻った。

ニッキーが店に戻ってしばらくすると、外が少し騒がしくなってきた。

「さては乳豊関が来たな」と三兄弟が表に出てみると、遠くから乳豊と小さなお相撲さんたちが、大きな酒樽を「どすこい、どすこい」と運んで来るのが見えた。

「どすこい、乳豊関、その大きな酒樽はいったいどうしたのですか？」マツキーが大きな声で尋ねた。

「足長から借りてきたのさ。子供たちが手伝ってくれたから一度で済んだよ」

空の酒樽は全部で8個もあった。乳豊と小さなお相撲さんたちがそれを三兄弟の店の前に置くと、まるでお風呂が並んでいるように見えた。乳豊は、ひまわりを両手で抱えて持ち上げると、適当な量を樽に挿した。すると、背の高いひまわりも大きな酒樽にならとてもきれいに収まったし、何しろ不思議なことに、山のように大量だったひまわりが8個の樽にぴった

り収まった。そして、その次に、小さなお相撲さんたちは、まわし一丁になって、バケツリレーで酒樽の中を水で一杯にした。師匠とお弟子さんの見事なチームプレーだった。

「どすこい、乳豊関と小さなお相撲さんたち、みんなありがとう」

「いいえ、どういたしまして」

いざというときに頼りになるのは、やっぱり乳豊だった。

こうやって、販売準備が整うと、三兄弟の店の前に珍しい大きなお花が咲いていると評判になり、店の前はいつも大勢の見物客で賑わうようになった。

しかし、ひまわりは家の中で活けるにはやっぱり大き過ぎるのか、残念ながらさっぱり売れなかったので、商売にかけては百戦全勝を豪語するマツキーだったけど、今回はさすがに失敗に終わるとみんなに言われて困ってしまった。

マツキーはここで最後の賭けに出た。レヴィに教わった『美味しいひまわり料理の作り方』を簡単な冊子にして、ひまわり1本につき一冊つけることにしたのだ。そして、これが当たった。テラタンがあれだけ傲慢するだけのことはあって、このひまわりは文句なく美味しいうえ、レヴィの料理も「ひまわりの美味しさを絶妙に引き出して最高だ」と評判が評判を呼び、結局、当初予定していたよりも早く完売してしまった。

まあ、こんな風に三兄弟のお花屋さんには、大繁盛で大忙しの8月だった。ところで、三兄弟の私生活にはどんな変化があったかというと、毎年8月は、夕方、足長で冷えた生ビールをゴクゴク飲んで帰るというのが三兄弟の習慣だったけど今年は違った。長男のクツキーは大好きなビールを断って、仕事が終わると毎日走り込んでいたのだ。それというのもブラッキーが行方不明になってしまったので、来年の駅伝ワールドカップのキリン杯がクツキーに確定したからだ。また、クツキーは、スポーツ界では有名人で尊敬もされていたが、あの大事件以来、町中みんなから尊敬を込めて「隊長」と呼ばれるようになっていた。弟たちからは、相変わらず「クツキー兄さん」と呼ばれていたけれど。

次男のマツキーのもとには、シチリア島のレヴィから手紙が届いた。手紙には、親友のトーマス・ジェファースンが招待してくれたので、お母さんを連れてアメリカ旅行に行ってきたとあった。念願だったジェームズ・ディーンとマリリン・モンローのお墓参りも済ますことができてお母さんも大満足だったそうだ。

マリリン・モンローと言えば、レヴィのお母さんから「世話をしてくれたお礼に」と20世紀に出版された貴重な『マリリン・モンロー写真集』が送られてきた。レヴィのお家でテラタンと見た、あの写真集だ。

シチリア島からは、野外劇場アズヅロの支配人からも手紙が届いた。当時の『事情が事情』とはいえ、契約不履行には違いないという苦情の手紙だった。往復の旅費の負担はもちろん、ギャラは倍払う上に、滞在期間中は一流ホテルを用意するという。今年の年末から年始にかけての行楽シーズンが支配人の希望だという。マッキーもアズヅロの件については、ずっと気になっていたので、支配人のこの申し出を大喜びで受け入れた。現在は、マネージャーのレヴィと手紙でプログラムの検討をしている。

三男のニッキーは、尊敬するブラッキーの行方不明をとても心配していた。そして、どんな質問にも答えてくれる博識なブラッキーと話ができなくて、毎日寂しい思いをしていた。ニッキーは、乳豊やブラッキーから、いろいろなことを教えてもらっているうちに、それまで接する機会がなかった科学や歴史などに興味を持ち始めていた。最近は図書館にも足繁く通うになって、とくに『宇宙』について強い関心を寄せている。

9月第一週の週末、8月の売上報告と慰労会を足長で開催することになった。クッキーは走りこみ練習で忙しいので、売上報告はマッキーとニッキーの二人で済ませた。今年の8月の売り上げは、『ひまわり大作戦』が功を奏し、対前年比300%だった。マッキーの話では「来年は今年の3倍は見込める」とのこと。ここ足長でも8月の一番の人気メニューは『ひまわりを使った健康サラダ』だった。もちろん、ひまわりの仕入先は三兄弟の店だから、マッキーは「ひまわりのお陰でうちの今年の8月の売り上げは、開店以来最高額だった」と足長にも大変感謝された。

「モオーオー・・・モオーオー・・・」

そろそろ陽も暮れかかる時間で、あっちこちからキリンの吼える声が聞こえてきた。慰労会に呼ばれていた乳豊と白キリンがやってきた。

「今日は満月なんだね。まだ明るいのに気の早い連中はもう吼えているよ」
そう言うとき白キリンは腰かけた。

「お疲れ様です。あれ、隊長は？」乳豊は、赤いTシャツに緑のまわし一丁という相変わらず奇妙な格好でやってくると、クッキーのいないことに気づいた。

「クッキー兄さんは、このところ毎日走りこんでいて足長で飲むことはないんです。だけど、今日は久しぶりに皆さんにお会いできるというので来

ますよ。もう向かつてると思います」

ニツキーはそう言うのと、「先にやってみましょう」と、ボーイを呼んで生ビールを注文した。ちょうど、マツキーたちのテーブルに生ビールが運ばれて来たときにクツキーがやってきた。クツキーは、遅れてきたことの侘びと簡単な挨拶をすると腰かけた。そしてポケットから一通の手紙を取り出した。

「ブラッキーから今日、店に手紙が届いた」

「えーっ！」みんな一斉に驚きの声を上げた。

「そして、何て？」ニツキーは興奮して立ち上がって聞いた。

「僕も、さっき店に寄ったときに机の上の郵便物の束から見つけたばかりで、中は読んでいない。差出人の記載がないから変だと思って開けてみただけで、手紙の一番最後に『ブラッキーより』って書いてあったから驚いてそのまま持ってきた」そう言うのと、クツキーは封筒から手紙を取り出して読み始めた。

「拝啓、クツキー先輩、その後いかがお過ごしでしょうか」

ブラッキーからの手紙には、クツキーにいろいろと世話になったことへのお礼と、自分は黒神博士やレイ、ギルバートと一緒に、元気でいるから心配はいらないこと、尊敬する黒神博士の指導のもと、キリンの原種復活の可能性が少しずつ見えてきたことなどが書かれていた。そして、ニツキーを自分の弟のように思っていて会って話がしたいということや、乳豊関や白キリンにもよろしく伝えて欲しいとあり、最後に、どこにいるのかは秘密だけど、そのうち必ず会いに行くと締めくくってあった。

「とにかく、ブラッキーが無事でよかった」そういうとクツキーは手紙を封筒に戻そうとした。ニツキーが「ちよつと見せて」と言ってクツキーの手から手紙を取り上げると、黙って手紙を読み始めた。白キリンは封筒を取り上げると消印を確認した。

「四国とある。日本だ。ブラッキーたちはやつぱり、まだ日本にいるんだ」
「彼がここにいないのは少し寂しいけれど、ブラッキーも含め、僕ら全員
の健康に乾杯しよう」

乳豊が音頭をとって高らかに乾杯をした。

「モオーオー・・・モオーオー・・・」

「モオーオー・・・モオーオー・・・」

店の外から聞こえてくるキリンの吼える声もだんだん賑やかになってきた。

気がつけば、もうすっかり陽も落ちて、こうこうと輝く満月が壁の町を照らしている。

「ブラッキーもきつと今頃、どこかで満月に向かって吼えているに違いない」ニッキーは窓の外の満月を見ながら呟いた。

了